

さん じょう し
山城志 第11集

備陽史探訪の会機関誌

1992・5

目 次

檜崎城跡の総合調査概報Ⅱ ——府中市久佐町檜崎城跡と国人檜崎氏——	田口義之……………1
初期山城としての高子山城について	出内博都……………11
ウヤツベの宮処かその周辺	柿原高身……………16
謎の枝廣城考	枝廣 信……………23
水時計	佐藤秀子……………40
日蓮宗の傳來 ——日蓮の西国布教願望と日像の活躍——	小林定市……………42
古代山城に就いて	七森義人……………47

巻 頭 言

名誉会長 神 谷 和 孝

山城志の発行も、今回で回を重ねて11回を迎えることになった。

備陽史探訪の会が創立11年目となるから、1年に1冊の発行を続けてきたことになる。続けてきただけでも大変なことだが、内容も着実に充実してきたことは嬉しい限りである。 当誌

が今や備陽史探訪の会の顔となったと言っても過言ではないだろう。会の顔になるまでには創刊以来発行にたずさわってきた田口会長を中心に熱き思いの人々の言うに言えない努力があったことを忘れてはいけないと思う。

11回を発行するにあたって初心にかえる心算で発刊当時のことを色々と想いおこしてみた。

この山城志を創刊するにあたっては、当時の会の役員の間で、発刊するかどうか、内容はどうすべきか、お互に自分の思いを出し合い、討論をくりかえしてやっと発刊にたどりついた。

誌名を山城誌とすべきところを山城志とあえて志という字にこだわったところにも、当時の発刊にかける熱い思いがあったことを、これからも忘れずに、いつまでも発行の回数を延ばして欲しいと願わずにはおられない。

檜崎城跡の総合調査概報Ⅱ

府中市久佐町檜崎城跡と国人檜崎氏

田口義之

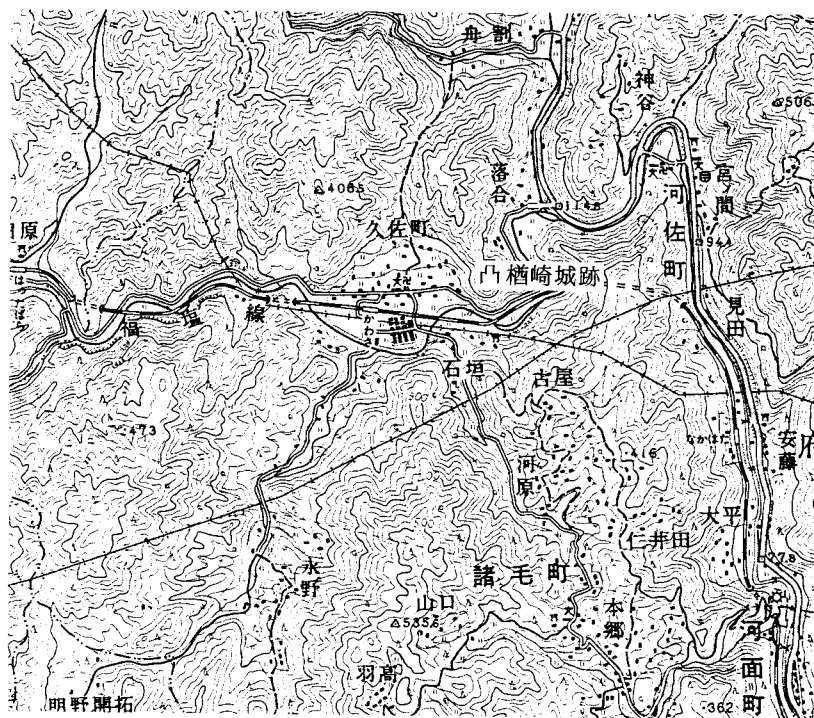
(はじめに)

福山市の中心部から芦田川を逆上ること約二十キロ、府中市の市街地を過ぎると芦田川の流れは同市父石町で二股に分れる。北から合流するのが本流で、更に逆上れば八田原ダム(建設中)、三川ダムを経て世羅台地の源流地帯に達する。

本稿で紹介する檜崎城跡は、この芦田川が世羅台地から府中市の平野部に出る直前の同市久佐町に存在する中世山城跡である。城主として檜崎氏の名を伝え、地理的に見ると、初めに述べた芦田川の水運を押えると共に、備後中部の穀倉地帯世羅台地から備後の平野部へ通ずる古道の出口を扼すという、政治、経済上の好位置を占めている。

城跡は、芦田川の上、中流地帯に点々と分布する小規模な河谷平野の一つ、河佐盆地の東を画す朝山の山頂に残り、主峰の郭群と共に北方尾根続きにも郭跡が認められ、城名「朝山二子城」の由来となっている。

本会城郭研究会では、福山市周辺の中世山城の実態調査の一環として、昭和五十九年より同六十一年にかけて、この檜崎城跡要部の平板測



0 500 1000 2000

檜崎城跡附近

5万分の1 府中

量、及び周辺に関連遺跡の分布調査を実施した。以下はその報告である。

(調査参加者)

新祖隆太郎 (三次地方研究会)

田口義之、七森義人、山下好和、後藤匡史、佐藤洋一、小寺幸一、
佐藤錦士、高橋安子、牧平雅美、塚本 彰 (以上備陽史探訪の会)

(調査日誌)

昭和五九年 (一九八四) 十二月九日

城郭主要部の平板測量を行なう。

同 六〇年 (一九八五) 二月十日

城郭主要部の測量を終える。

同 年 四月二一日

朝山の残り部分と北方尾根続きを踏査する。

同 年 五月一九日

城下の遺跡、地名調査を実施する。

同 年 七月二八日

周辺の中世石造分の分布調査を行なう。

昭和六十一年 (一九八六) 一月十九日

周辺の古道の調査を実施する。

猶、城郭の平板測量は新祖の指導によって行ない、石造物、地名の分

布は七森が中心となって実施した。

(榑崎城跡に関する研究の経過)

榑崎城跡は、戦国時代備後の有力国人とし活躍した榑崎氏の本拠として知られ、江戸時代より注目されて来た山城の一つである。

古くは戦国末期に初稿本が成ったといわれる『備後古城記』にもその記述が見られ、江戸後期に続々と著わされた備後の地誌、『備陽六郡志』、『西備名区』、『福山志料』等にも城主を中心とした多くの伝承が収録されている。

なかでも『福山志料』は、城跡に「高さ五尺丈」の石垣が残ると記し、城主榑崎氏の伝承と共に城跡自体も識者の関心を呼んでいたことがわかる。

榑崎城跡を、主に城主の履歴にしばって初めて学問的な検討を加えたのは大正十三年発行の旧版『広島県史』である。この書は本格的な歴史書ではないが、江戸期の文献と異なり、史料として評価の高い長州藩関係の記録を引用している。ここに備後の中世山城研究は初めて近代史学の洗礼を受けたと言える。

右のように城主についての研究が比較的早い時期に始まったのに対し、山城遺跡としての研究は大部遅れる。

備後郷土史界の大先輩、得能正道が紀行文『榑崎城趾踏査并今高野久井稻荷御調八幡参拜』(備後史談八一十二 一九三三)で「頂上は三槽となり、最も高き槽は僅かに方四、五間、中央に五輪石塔の風輪と水輪との残れるを見る」と述べているのはその最も早い例に属している。



榑崎山城跡遠望（西方より）

その後の枳殻櫻村『榑崎城址の研究』（まこと38号12 一九五三）、
和田嘉郎『榑崎城』（日本城郭全集十二 広島、香川、徳島版 一九六
七）の各論考に於ても主な視点は城主榑崎氏の動向にしぼられ、遺構に
ついての観察は目新らしいものは見られない。

この現状に対して、榑崎城跡の山城遺構としての研究を一步進めたの
は『日本城郭大系』の出版（巻十三広島、岡山版の発刊は一九八〇）で
ある。これは新人物往来社が各県の第一線研究者を動員して、全国の山
城跡を県別に紹介したもので、特に広島県の場合は、県内の埋蔵文化財
専門家がその任にあたり、各山城跡を考古学的に取り上げたことに大き
な意味があった。又、一九八三年には芸備友の会が『広島県の主要城跡』
を刊行、ここに榑崎城跡を含めて、県内山城の本格的な研究が始まった
と言える。

（城郭の現状）

榑崎城は、河佐盆地の北東にそびえる標高三百四十一メートルの山頂
より西南に派成した一支峰、朝山の山頂に築かれた中世山城跡で、城跡
の最高所は標高二百七十一、五メートルを計り、麓よりの比高は約百三
十メートルである。

①郭は、東西に細長い平坦地で東西五十七メートル、南北二十二〜十
八メートルの規模である。北、東、西の三面はやや丸みを帯び、南面の
②郭に接する部分は直線によって構成され、現在、中心からやや西側に
神社の社殿、及び拝殿が建っている。

この郭で注目されるのは、中央南端に残る高さ約一メートルの小台地である。この台地は、上面に東西七メートル、南北六メートルのほぼ正方形の平坦地が残り、ここには後世でいう天守閣にあたる城の中心的な櫓が建っていたものと推定される。

②郭は、①郭の南に約一、五メートル低く築かれた平坦地で、東西約五十四メートル、南北最大二十一メートルを測り、西が広く、東に行く程狭くなるいびつな平面をしている。この郭には、西南部の現在の登山道入口附近にはぞ穴の刻まれた礎石が存在し、①郭と共にこの城の中心的な役割を果たしていたものと推定される。

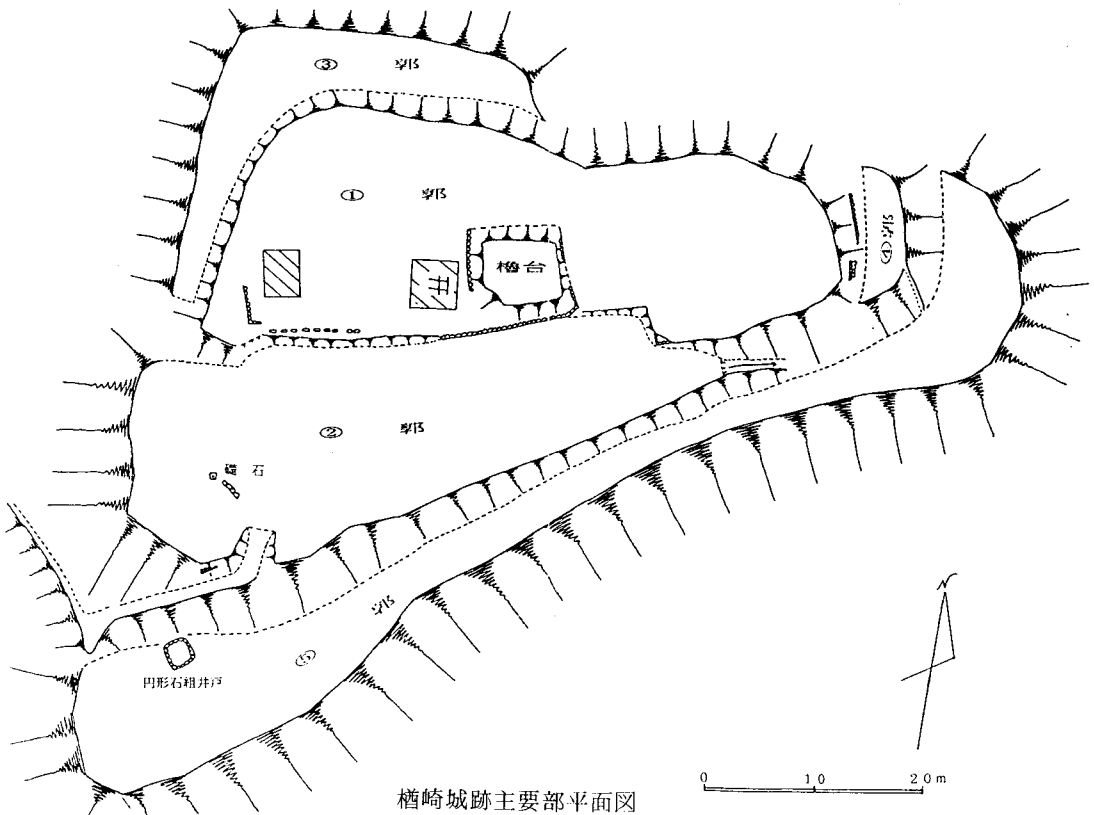
③郭は、①郭の北側に約三メートル低く築かれた平坦地で、幅平均八メートルで①郭北西部をはち巻き状に取囲んでいる。

④郭は、①郭東端から約一、五メートル下って築かれた南北十二メートル、東西四メートルの半円型の平坦地で、後で述べる②郭東端部の虎口を守る役目を果たしていたものと推定される。

⑤郭は、②郭の南から④郭の東にわたって約五メートル低く築かれた長大な郭で、長さ約百メートルに達する。東端と西端は腰郭状に広がり、その中間は幅四、五メートルの帯郭状の細長い平坦地となっている。

又、この郭の西端山側には径二、五メートルの円型石組が残り、井戸跡と推定される。

⑥郭は、⑤郭西端を囲むように築かれた長さ約六十メートル、幅最大十二メートルの半円型の平坦地で西側は土塁によって画され、東端は小径となって空堀①の堀底に達している。⑥郭との高低差は約一七メートル



榑崎城跡主要部平面図



⑤郭に残る石組円型井戸跡

ルである。

空堀①は、⑤郭東端の東に約十メートル下って尾根に直交して築かれた堀切で、幅約四メートル、深さ約一、五メートルを計り、東側尾根続きとの連絡を断っている。

空堀②、③、④は、③郭から西北に続く尾根に直交して築かれた堀切で、空堀①と③郭との高低差は約十五メートル、いずれも幅三メートルから四メートルを計り、谷側は両側共堅堀となつて約二十メートル伸びている。この空堀群は西北の主峰に続く尾根からの攻撃に備えて築かれた、いわゆる城の「尾首」にあたるもので、②と③、③と④の間には尾根の両側に堅堀が築かれ、きわめて嚴重な構えとなつている。

空堀⑤は、朝山と西北主峰との鞍部に尾根に直交して築かれた堀切で、堀底は道路となつている。

この城で注目されるのは堅堀の多用と石垣の使用である。堅堀は、③郭西側と⑥郭西側から南側、及び⑥郭と空堀①との間に、いわゆる「畝状」に分布し、規模は現状では幅三、五メートル、深さ〇、五メートル程のものであるが、各々谷側に二十メートル前後伸び、城の西南、及び南面の防禦力を高めている。石垣は①郭の小台地の周囲、及び①郭東、南面の一部に残り、高さはいずれも約一、五メートル、使用された石も径二〇センチ前後の小規模なものであるが、周辺の山城では類例が少なくこの城の大きな特徴の一つとなつている。

現在、この城の①郭には高竈神社が鎮座し現在の登山道は空堀⑤の堀底道から南に分れ、⑤郭の西北部を通り、②郭西南部に取りついている

が、⑥郭の存在と水の手（⑤郭の井戸跡）の位置からすると、このコー
 スはやや不自然である。もし、現在の登山道を本来の登城道とすると、
 城の一番大切な水の手を真先に敵手に渡すこととなり、城の生命取りと
 なるのである。

郭の配置等から推定すると、当初の登城道は、まず⑥郭西北で城内に
 入り、⑥郭内を通過して空堀①に至り、堀底から③郭東北部を通過して②
 郭東端の虎口に達し、ここより②郭①郭に至っていたのではなからうか。
 こう考えると、⑥郭西北を画する土塁は城の虎口を形成していることに
 なり、④郭は③郭東北部から侵入する敵と②郭東端の虎口に対して横矢
 の位置を占めることになり、共にその存在が生きてくるのである。

猶、この城の性格を考える場合、空堀⑤の堀底を通る道は重要である。
 現在、空堀⑤の北側に若干の平坦地が認められ、道はこの部分でくの字
 に折れ曲っているが、これはこの部分が両側から登ってくる通行人に対
 して虎口を形成していたことを意味している。この道は、芦田川に沿う
 現在の県道が整備される以前、甲山方面から府中方面を結んだ街道で城
 はこの街道に対して関所の位置を占めているのである。

榑崎氏について

府中市久佐町を本拠に戦国時代備後国人衆の一人として名を馳せた榑
 崎氏は、その系譜によると出雲の国人である湯原氏の庶流にあたり、近
 江国犬上郡榑崎村に居住したため榑崎氏を称したと伝えるが、その出自
 や備後入部の時期等不明の点が多い。
 注①

榑崎氏の備後入部の時期については、一般に、鎌倉時代末期の正慶二
 年（一三三二）、榑崎豊武が足利尊氏より軍功の賞として、備後国芦田
 郡久佐村の地頭職を与えられ、同地に榑崎城を築いたことに始まると伝
 えるが、この説には疑問の点が少なくない。
 注②

弾正忠

与兵エ吉蔵

正兵工

元兼

元好

就継

慶長元年九・八死

寛永八・五死



宗貞 三河守 加賀守 彦左五郎尉 彦左五郎尉

信景

宗貞 三河守

加賀守

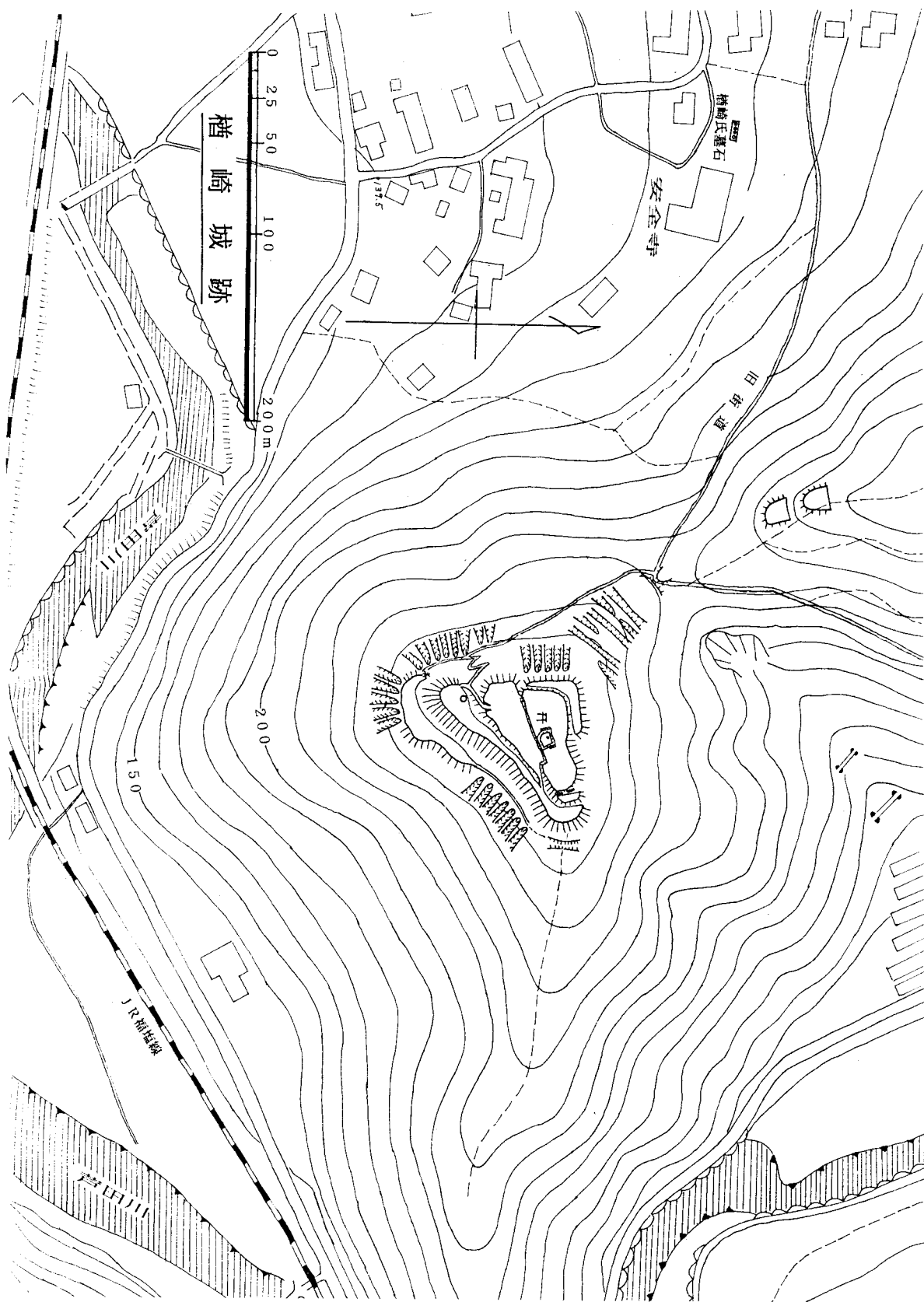
彦左五郎尉

彦左五郎尉

九郎次郎

信景

（広島県史 大正十三年刊 所収榑崎系図）



まず、〃正慶〃の年号が問題である。正慶は、元弘の変で後醍醐天皇を廃した鎌倉幕府の立てた光厳天皇の年号で、『西備名区』の著者が言うように、この時期は〃尊氏はまだ土を封ずる勢ひ〃ではない。

更に問題になるのは、南北朝期以降、榑崎氏の本拠久佐(草)村の所職は、足利氏より尾道浄土寺、京都西芳寺に与えられており、この間榑崎氏の名は関係史料に全く現われないことである。

『浄土寺文書』によると、尾道浄土寺に与へられたのは、草村公文職で、室町幕府初代將軍足利尊氏より、暦応二年(一三三九)十月六日、〃浄土寺塔婆婆料所〃として寄進されたという由緒を持ち、室町後期の文明十五年(一四八三)まで浄土寺の所領であったことが確認される。

一方、京都西芳寺が有していたのは、「草村国衙并地頭職」で、〃国衙〃とはこの地が備後国衙領(公領)であったことを意味し、又、〃并地頭職〃とあることから、西芳寺は浄土寺領を除いた久佐村全域の支配者であったと思われる。このことは長享二年(一四八八)という若干遅れた時期の史料に現われるのであるが、西芳寺は五山系の有力寺院であり、その知行は室町初期に逆上るものと考えてよい。

そこで注目されるのが、榑崎氏の備後久佐村入部を戦国時代とする一連の資料である。

『備中府志』や『三備史略』によると、榑崎氏は元々岡山県新見市鳶巢山城を本拠とした備中の有力国人で、榑崎豊景の代永祿四年(一五六二)毛利元就の命によって備後久佐村へ移住したという。

備中に於ける榑崎氏の初見は南北朝期に逆上り、貞治元年(一三六二)

山名時氏の武将として榑崎氏の名が見える^{注④}。又、『東寺百合文書』によると、榑崎氏は東寺領新見庄周辺の有力国人としてその名が見え、明徳元年(一三九〇)十一月には、榑崎備前守の子息鶴寿丸は東寺公文所より東寺領備中新見庄の〃領家方公文惣追捕両職〃に補任されている^{注⑤}。

これら一連の史料から推定すると、榑崎氏は元備中北部の国人で、それが室町後期から戦国時代にかけての或る時期、備後に本拠を移したのではあるまいか。備中の国人で備後にも本拠を有した者には甲奴郡の新見、伊達両氏があり^{注⑥}、その蓋然性は高い。

但し、その時期を永祿四年とするのは年代的に無理があるようである。備後に於ける榑崎氏の徴証は天文年間^{注⑦}に逆上り、弘治三年(一五五七)十二月の毛利元就他十七名連署起請文案には他の備後国人と並んで、榑崎彦左衛門尉信景の名があり、既にこの時期、榑崎氏は備後国人として活動していることが確認される。

『福山志料』巻二十一、芦田郡久佐村、朝山二子城の頃には、正慶二年の榑崎豊武築城説の他に、三河守宗真の築城説を挙げており割注で「〇元年コ、ニ来ルト云」としている。

「〇元年」では全く意味が通らず、これは同書の刊本に脱字があることを示しているが、榑崎三河守宗真は、享祿三年(一五三〇)三月二十一日に没した人物で、前記信景の曾祖父にあたる人である。又、『芦品郡誌』によると久佐村八幡神社は享祿年中榑崎三河守の再建を伝えており、榑崎氏の備後移住は大概この頃と考えられる。

ちなみに、備中国人としての榑崎氏は、文明十一年(一四七九)の備

前守を最後に姿を消しており、^{注⑧} 榑崎氏の備後移住がこの時期以降、享祿年間までの間であったことを示している。

備後榑崎氏は、天文年間以降、毛利氏旗下の部将として活躍しており、特に豊景、信景、元兼三代の活躍は目覚ましく、^{注⑨} その所領も天正年間には久佐村以外に世羅郡内にも存し、『毛利家八ヶ国時代分限帳』によると、天正末年の榑崎一族の総知行高は、年貢収納高で千八百石に及んでいる。

しかし、慶長年間（一六〇〇）の関ヶ原合戦は、この榑崎氏の運命をも一変させた。榑崎氏が主と仰ぐ毛利氏は西軍与同の罪によって領国を防長二ヶ国に削減され、榑崎氏も備後の本領を失ない、長州藩毛利氏の一家臣として近世を生き延びて行くことになるのである。

まとめ

さて、この榑崎氏と榑崎城跡の関係は、いうまでもなく、国人とその居城の関係にあたる。

但し、前節で述べたように、榑崎氏の久佐入部の時期が今までに言われて来たような鎌倉時代末期ではなく、戦国初頭であったとするならば、その築城時期、性格等も再考が必要である。

榑崎城跡は、その築城者を、今まで通り榑崎氏とするならば、戦国初頭の年代が与えられる。これは現在残る石垣、塹堀の存在から考えても、^④ とも妥当な推定である。

しかし、その性格については、前節の推論、すなわち、榑崎氏が戦国

大名毛利氏によってこの地へ移されたとする説が正しいとすると若干変ってくる。つまり、その築城に関しては、当然毛利氏の意向が働いていることが推定されているのである。

これは、現在残る遺構からも十分首肯できるものである。榑崎城は、城跡の現状のところ述べてのように、世羅郡から芦田郡の平野部へ出る旧街道に対して関所の役割を果たしていた山城である。

これは、確かに国人領主榑崎氏の所領支配にとって有効であったと思われるが、それ以上に戦国大名毛利氏の備後支配にとって重要な意味を持つていたのではあるまいか。内陸部の安芸吉田に本拠を持つ毛利氏にとってここは備南平野への出口として重要な位置を占めていたのである。

永祿十一年（一五六八）八月、備後神辺城合戦に於いて、榑崎豊景はその奮回作戦の中心的な役割を果たしており、^{注⑩} 史料上からも榑崎氏と毛利氏の関係が、他の備後国衆のそれ以上に親密であったことが認められるのである。

猶、居館、その他城跡の関連遺跡に関しては『山城志』十集（一九九一）の七森報告（府中市久佐町の地名調査）によらるたい。

注① 『萩藩閥閥録』卷五十三 榑崎与兵衛等

② 前掲書、『福山志料』等

③ 『蔭涼軒目録』長享二年七月五日条所収西芳寺々領目録

④ 『太平記』卷三十八

⑤ 『東寺百合文書』る函明德元年最勝光院方評定引付

- ⑥ 『備後古城記』等、注⑦にも新見元致の名がある。
- ⑦ 『毛利家文書』二二五号
- ⑧ 『東寺百合文書』けー三二
- ⑨ 注①参照
- ⑩ 注①参照

初期山城としての高子山城について

出内博都

一、在地支配の方形居館址の発展

律令制が崩れ、荘園制（公地は国衙領）が一般化してくると、荘園における荘官、名主、国衙領における国司、田堵名主などいずれも徴税請負人としての性格を強め、行政のルールにのった政治よりも、力によった支配権の拡大、深化を求めてくる。それまで、荘官の住宅が役所を兼ね生活と公務と生産活動が一体化した館が次第に重装備をするようになってくる。そうした過程で、出現してくるものが方形居館址と称せられるもので、いわゆる長者屋敷伝説地や平安から鎌倉武士の館に多くみられ、一般に平地又は微高丘陵の先端部に位置する。土塁や濠で囲まれ百米から百二十米位の方形プランを持ちその形状から土居とか堀の内とか呼ばれたものである。種々の絵巻物などを見ると住宅としての母屋のほかに生活に必要な馬屋、侍廓、倉などの付属室があり、その館をめぐって佃門田、正作、垣内などと呼ばれる免田が存在する。こうした方形館は中世を通じて生活面と在地支配の中心として戦国末期まであまり変化することなく存続した。戦国大名の居館として超大規模な武田氏の「躰躰ケ

崎館」なども出現する。こうした居城と在地支配（農耕作業の一部を含めて）を一体化させるものとして関東地方には農耕水利との関係で「谷田包括式館」という谷間もしくは谷間に挟まれた丘陵先端部に位置する一類型を示すものもある。（西ヶ谷恭弘著、城郭）いずれにしても居館と役宅と要害とが素朴な形で一体化したものが、規模の大小は別として一般的傾向であったと思える。

二、悪党、足輕の発生と山城

鎌倉御家人に象徴される惣領制在地支配の形式は方形館や谷田包括式館に代表される。しかし惣領体制の矛盾（分散領有、分割相続を含む）文永・弘安の役をめぐる世情不安と貨幣経済の進展など生産体制・経済構造の変化から新しい生産単位としての自然村落の成立、新しい階層としての悪党の出現、新しい集団原理としての一揆形式の集団も出現する。こうしたものが相互にからみあって、既成の荘園、郷・村の枠を破って広域経済圏を形成し、荊田狼籍、押込みなどのルール違反も行ない、歩兵として足輕的武力と集団戦法も出現し、それらの拠点としての山城が出現

してくるのである。弘安三年（一二八〇）伊賀黒田庄の住人清定以下が路次をふさぎ城郭を構え東大寺に抗している。その他嘉元四年（一三〇六）丹波宮田庄の前公文職西ら三百人が悪党化し城郭を構え六波羅の遵行使と戦う（大山村誌）など枚挙にいとまがない。元弘の変における楠正成の赤坂、千早の城は有名である。悪党行為が城郭を必要とした理由は①六波羅からの討伐軍に対し楯籠る必要と、一揆集団の寄処 ②狼籍行為に起因した十三世紀末以降の農村の過剰生産物の隠匿の場所 ③惣領制崩壊にみる御家人武家社会の新たな地域支配をめざす拠点としての三点にしばられよう。

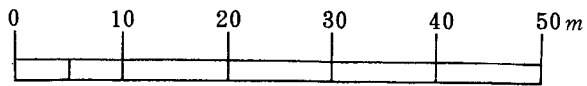
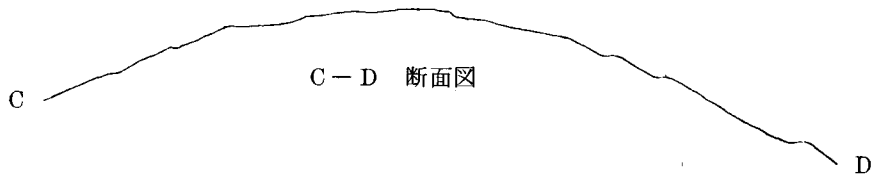
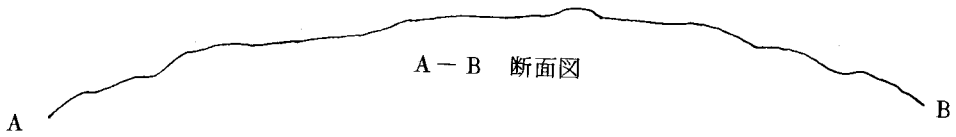
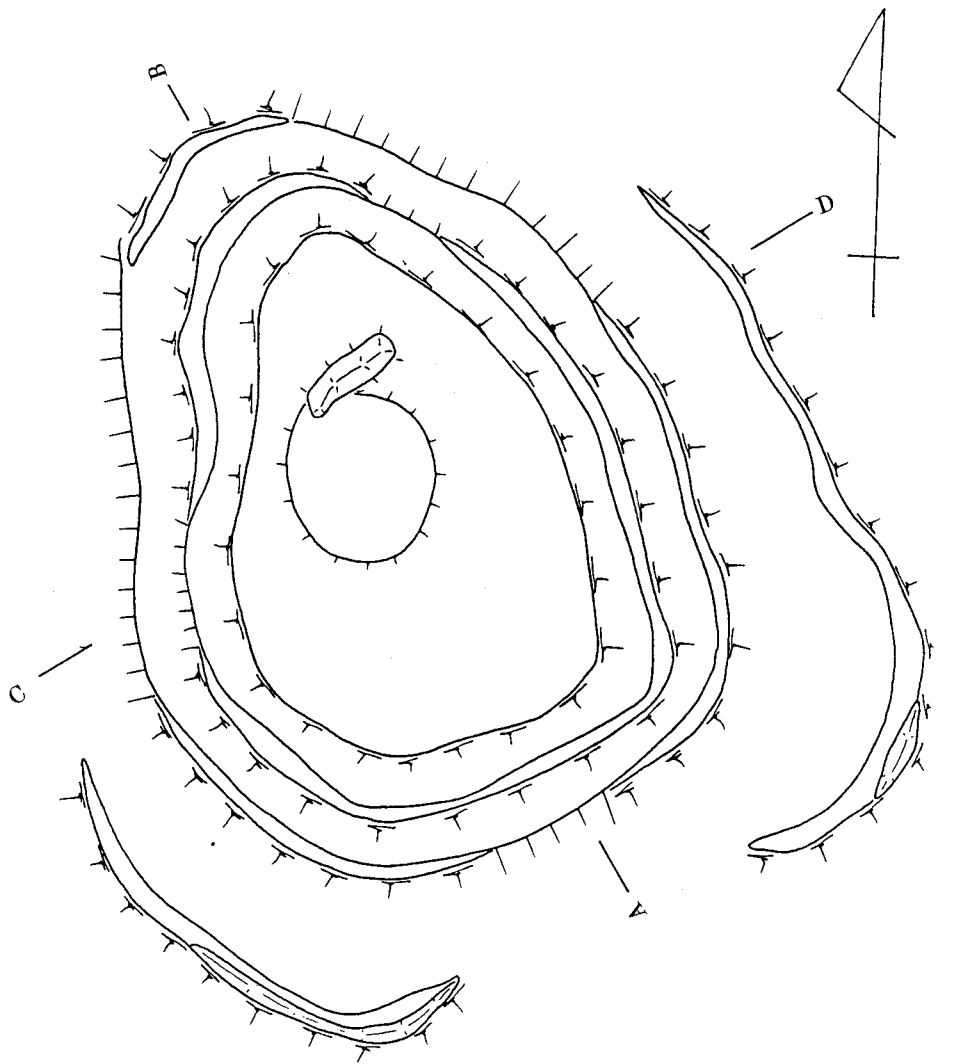
ことに南北朝争乱期の前段階としてこの時期にわが国の尺度でいう城郭の存在が確実に西国の荘園社会で一般化したといえよう（西ヶ谷恭弘著前掲書による）然しこうして本来は逃げの城として成立した山城はその後、荘官、御家人武士が土着の国人として領主化していく過程で、手が加えられ要害堅固なものに変質していく。こうした中でごく初期的な山城としての高子山城の概略を紹介しよう。

三、初期山城としての高子山城

高子山城は神石郡油木町大字安田字河内谷にあり、西備名区には高古山城宇部和泉守とあり、備後古城記に高コ山宇部和泉守とあり註に高古山とも出ている。神石郡誌にもほぼ同じようなことが出ているが、和泉守が貞治三年（一三六四）に同城の西麓に永聖寺を開基しており、その永聖寺の記録には宇賀和泉守以下三代の法名を伝えている。現在、地もと

では宇賀を称する家が家号「でい」として伝っている。（但し「でい」の当家は戦後死滅、分家は存存する。）永聖寺は臨済宗永源寺派の中本山である。由緒によれば「建武觀応の間、近江永源寺開山圓応禪師寂室元光大和尚の韜晦住庵の地たり。此地に宇賀和泉守城を築きて居り深く師に帰依す。貞治元年（一三六一）三月十八日圓応禪師の弟子にして法嗣たる智庵元周を請いて開山となり、隣松山永聖寺と号す」とあり寂室が福山の永徳寺（長勝寺）を開基し二十五年の長きに亘って園中をまわっており、その間靈山星居山へ登るため安田に住したことが福山志料（巻一〇）に出ている。永聖寺は城郭型の寺で城の西南の境界に備えたものと思える。宇賀三代のうち誰が建立したか不明であるが築城はこれ以前であるので一三世紀末から一四世紀へかけてのもので、極めて初期のものと思える。調査カードにあるように円郭式の単郭である。頂上の第一郭は東西約十三メートル、南北約十五メートルの円形で北端に長さ十メートル高さ四〇五センチの土塁状の高まりがありその第一郭と若干緩傾斜をもって東西三十メートル、南北五十メートルの広場があるが、表面は必ずしも平坦ではない第二郭といえるものであろう。これを囲んで帯郭が廻っているが広い処は五メートル、狭い処で二メートルと不規則である。然しこれは帯郭というより、空濠であった可能性が高いように思える。

掘上げ式の空濠と簡単な土累状の土盛りが想定される。この場合空濠は薬研堀より毛拔堀の可能性が強いように思う。いずれにしてもトレンチ溝をいれる必要がある。この二条より下に数メートルの比高で東側に



神石郡油木町安田 高子山城跡実測図

約九メートルの帯状の郭、西南側に同じく約五メートルの帯状の郭がある。巾が狭いので郭というより防御用の土塁の崩れたものではないかと思える。両方共部分的に土塁跡らしき盛上がりが見られる。この城が南北朝期に宇賀氏の名を伝えるのみで、その後使われた伝承もないのでこゝうした古い形が残ったものと思える。現地に残る古い地名から宇賀氏の村づくりのあとを偲んでみよう。

三、城と垣内と名田

現在の安田は北流する安田川の谷と、同じく北流する阿下川・野稻谷川の谷の二つからなっているが、これは元禄検地の時、安田村と西の谷の野稻谷川沿いの畝畠村を合併したもので、中世は安田川及びその支流の谷だけであったと思える。南北に長いこの谷の北端に高千山城があり城の北は大きな山をこえて深い狭谷で油木の権現山城と対している。城の南西麓に永聖寺を配しその二百米あまり南の尾根（畝畠村への峠）に「かんぬき」の地名がある。かんぬきの南山上に「二ツ御堂跡」という地名があり多数の宝篋印塔と五輪塔があり永聖寺の前身と伝え宇賀一族の墓と思える。城の南麓に「比丘尼屋敷」がありその前の小丘の東端に「土居」がある。土居の北隣に「井ノ元」（現在いもうとと呼んでいる）という家号で宇賀を姓とする家がある。南北約二軒、東西約一軒の谷を南から、上垣内、中垣内、下垣内の三区に分けて支配していた。川が北流しているから南を上といっている。垣内は元来は田畑並びに附属林野を垣で囲むことを意味した古い語である。垣で囲むといっても、実際は

樹木を利用し四囲を定めたものである。次第に垣内は田堵、名主の経営地など特別な地の名称となり更に更に領域の拡大、新開などによって重要地に一族などを配して管理させる家や、やがてその管理区域を示す村の中の集落をも示す語へと発展し、近世では分村を指す場合もある。この内が訛って「があち」となり文字は川内・河内・開地「〇〇が市」などなどとして現在に伝わっている。勿論現在のすべての「があち」が中世のものではなく一軒の「があち」があるとそれをもとに上・下とか東・西とかを冠して新設された屋号も多いと思える。安田の現在の行政区で上区といわれる処の大部分の土地台帳上の地名は上河内になっており、上河内屋敷跡と伝える処も残っている。現在の中区は村の中心で学校や鎮守もある地域であるが、この地区の土地台帳上の小字名は時正谷である。一時代古い名田名がそのまゝ残っている。中河内という家も明治まではあり、その一族が「中上」の家号で任んでいたが今は絶えている。その屋敷、墓も荒地として残っている（中河内は筆者の曾祖母の出所、幼時はよく訪れた）この時正谷には旧道に沿うて房元、房宗、頼元（或いは米元）など人名の家号をもつ古い家が現存している。古い道は川沿いと西の谷（日南）を上って畝畠へ越しておりその途中に横穴式石室をもつ古墳があり附近を「塚風呂」と呼んでいる。附近に「塚迫」「塚元」という家号の家がある。然し古墳は以外に少なくこの二軒の谷に三つしか判明していない（二つは破壊）。城の東麓に下河内という屋号はあるが、城や寺のある下区は土地台帳上の字名は殿河内又は河内谷になっている処が多い。城の東南の台地上の小集落を野呂河内と呼んでいるが

これは台帳上の地名にはなっていない。鎮守は亀山八幡と呼んで保元年間の勸請を伝えているが詳細は不明である。この宮山は安田川、鍋谷川の合流地点にある独立丘で三方の谷を見渡せる要害の地で、高い石垣をもつ城郭形式の社である。鍋谷川沿いの谷には家はないが、最奥部に、かじやがあったと伝えられ、田の湧水に金気の錆色が浮んだり、附近の山からかなくそなど出るので採鉄の谷であったと思える。その谷の入口に八幡社を配したとも考えられる。この谷に「いばの坪」「鍋谷住還」の地名を伝える（検地帳）も現地は不明である。下河内から谷を距て、北河内の名も伝っている。城山の北方の谷、権現山に対崎する中山谷に「城殿」・「行司」という地名があり、川沿いに北から入る勢力に対する防衛施設がしのばれる。中山谷には戦後まで二軒の家があったが電灯のない生活をしてきた山の深い谷なので木地師の里であったのか、「キシ畑」の地名を残している。上河内地区で南西にある与那志という谷から北東流して安田川に合流する川沿いに「ふきや」とか「かじや床」など採鉄をしのぼす地名もある。中区（時正地区 中河内地区）で東から流入する戸谷川の合流点に「太鼓の丸」という地名があるがこれは長い南北の谷の丁度中間なのでふさわしい地名と思える。

南北に長い谷の北端に城を築いているという占地の意図がわからない、中河内地区にふさわしい地形の山は多いように思えるが、靈山星居山への道を考えると現在の永聖寺の谷が一番便利である。案外そんな処に根拠があったのではないだろうか。

三五八本の銅劍はどこで作られたのか？

ウヤツベの宮処かその周辺

柿原高身

一、ユメ物語

弥生時代中期の終わり頃から後期の初め頃にかけて、西出雲に「原イヅモ国」ともいうべき首長国連合体があつて、邪馬台連合国の巫女王ヒミコにも比すべき巫女王ウヤツベクを中心に、この地方に勢力を張つていた。かれらは、簸川平野の奥に美しい姿を見せてたたずむ仏経山を神の山として崇め、毎年、春と秋の大祭を、三五八本の銅劍が発見された、ここ、宇夜の里の神庭の広庭で傘下の首長達や村々の有力者達を集めて行なつてきた。

そして、この大祭が終わると、祭りの主宰者であり、連合王国の統裁者でもあるウヤツベは、この日のために作り上げ、神に供えて神霊を宿らせた銅劍（神劍）を、参列首長のひとりひとりに一本ずつ、引き出物として与え、これを貰った各首長は、持ち帰つて神として祭り、連合王国への参加と結束のあかしとして伝世した。所有する銅劍の数が、その首長の勢力のパロメーターとなつていたのかもしれない。このことは、畿内を中心とする銅鐸圏で、所有する銅鐸の数が、その豪族の勢力に比

例するとされていたらしいことも合致し、また、古代のヴェトナムの王達の銅鼓の数と勢力の関係説を見ても、東アジアに共通の流れとみることができよう。

そのために、この銅劍は、この神庭の祭祀の場に近い場所で、朝鮮半島南部地域から渡つてきた工人達によつて毎朝、大祭の日に間合うように作り続けられたのである。

そして、新しい勢力に打ち倒されるか、国譏りをさせられるかの危機に直面したとき、首長たちは、再びここに銅劍を持ち寄つて、滅亡の儀式として、これを一括埋納した。痛痕の想いを込めて、いつの日かの再興の日を願つて、思い出深い神庭の広庭の見下ろせる低い丘の斜面に埋めた彼等の心が胸をうつ。

これは、私のユメ物語語りである。しかし、これが、単なるタワゴトに過ぎないのか、悲劇の古代人の史実の訴えに繋がるものなのか、古代史関連の史料を尋ね歩いて、検証をしてみたいと思う。

二、検 証

○ 検証一―大和王権無縁

『記紀』は、出雲神話に、その《神代巻》の三分の一近くものスペースを割きながら、西出雲地方の古代に関しては、全く口を閉ざして語ろうとしない。それどころか、本来、東出雲の豪族が奉斎していた筈の《大國主》をかつぎ出して、いきなり杵築の地に宮を建てて移しながら、大和王権は、その間の経緯や事情について説明もしていない。西出雲にあった勢力のことは知らなかったのか、知っていても敢えて無視したのか、いずれにしても、三五八本の銅劍については、製作に関しても埋納に関しても、全く無縁で、この銅劍の授与者でないことはもち論、畿内地方がこの銅劍の製作地でなかったことは明白である。

○ 検証二―古墳の年代推移から

松前健氏は、『出雲神話』の中で、次のように説かれる。

出雲地方の古墳の年代の推移からみて 出雲西部一帯に広く拡がっていた古い勢力を、東出雲の「意宇」の勢力が、打ち倒したか、国譲りさせたかして併合した。その時期が、弥生中期から後期の初めの頃…。

時、あたかも、荒神谷に銅劍が埋納された時期と合致する。そうするとこの、東出雲から進出して、西出雲に移って全出雲の王者となった意宇の人々も、この銅劍の製作にも埋納にも、全く不知の人々であったとい

うことになる。むしろ、「このとき、征服された西出雲連合王国の人々の、血涙の『陰匿、埋納の儀式』が、いつの日にか晴れて取り出す日の来ることを願いながら、行なわれたのだろう」と、松前氏は言っておられる。

○ 検証三―古伝承の鍛冶神

さて、ここでもう一度『日本書記』《神代巻》の中から、銅劍製作者をうかがわせる説話があるかどうかを探ってみよう。紀は、

新羅国に天下ったスサノヲが、「この国には居らまく欲りせず」といって、東行して、出雲の簸ノ川上の鳥髪とりかみの峯に移った。

と言い、その子に《ヒノハヤヒノミコト》がいたとあるが、これは「フイゴの神の名だそうで、日本には、銅器と鉄器の製作技術が、弥生式土器を焼くに必要な千度近い火力とともに、弥生時代の初め頃に殆んど同時に入ってきたといわれ、銅器は祭器に、鉄器は武器となって発達していったといわれているが、この神達から産銅、産鉄一族との関わりがうかがわれ、ヒノハヤヒノミコトの子孫が《アマツマウラ》（あるいはアマツマラ）、またの名《アメノヒトツメノカミ》という鍛鉄神だといふ。この『出雲国風土記』の話は示唆的である。

○ 検証四―鍛冶部の火の神と一眼の神

この伝承に関連して、松前健氏は、『出雲神話』の中で、次のような興味深い説を述べておられる。

『出雲国風土記』には、△大原郡斐伊郷の条▽に「ヒノハヤヒコという神がこの地に居ましたことにより、種」と名付けられた」といい、地名起源説話があげられているだけであるが、この「ヒノハヤヒコ」は、鍛冶部の奉じた「火の神」の名であつたらしい。

火の神、カグツチを、イザナギが殺したときの血から生まれたという「ヒノハヤヒノミコト」なども、おそらく類似の神で、火の燃えあがる力の速やかであるのを讃えた神名である。

『新選姓氏録』によると、燻之速日命は、その一二世の孫の「麻羅宿禰」が祀っていた。「麻羅」、「真浦」などというのは、鍛鉄に關係ある名である。

『記・紀』の天石屋神話での鍛冶神「アマツマウラ」、または「アマツマラ」が、「鐸」をつくつたという話が思い浮かべられる。「アマツマウラ」は、「古語拾遺」では、「アマノマヒツノミコト」とも呼ばれ、「一眼の神」である。

古代ギリシャの一眼の巨人「キクロペス」や、アイルランドの一眼の巨魔「バロル」などが、鍛冶と結びついているように、世界的分布をもつ「神冶神一眼」の信仰に繋がるものである。

『出雲国風土記』△大原郡阿用郷の条▽で、「目一つの鬼」に農夫が食われ、「アヨ、アヨ」と叫んだという話がある。

紀伊の熊野の山中に出没すると信じられた「踏鞴」または「一本踏鞴」は、福土幸次郎氏などによると、やはり、もと、踏鞴、すなわち「フイゴ」を使用して鍛鉄に従事する冶金業者たちの守り神であつ

た「雷神」が妖怪化したものであるという。

出雲の「目一つの鬼」も、同様な、鍛冶神の墮落した姿なのである。ギリシャの「キクロペス」も、「オデッセイ」では、たんなる「人食い鬼」とされている。「ヒノハヤヒコ」が「一眼神」かどうかはわからないが、斐伊川の鍛冶神の奉じた「火の神」であつたことはたしかであろう。

古伝承のいう「鍛冶神」や「火の神」が、斐伊川流域に居たというこの説は、弥生中期から後期にかけて、この土地で、祭器としての銅剣が作られていた可能性を、かなり顕著に示しているといえないだろうか。

○ 検証五―八百度の火力と半島の技術

ここで、鈴木武樹氏著、「日本古代史99の謎」の説に耳を傾けてみよう。

青銅器を製作できる温度は、摂氏八百度以上である。しかし、この温度は、新石器（縄文）時代のヤポネシアで用いられていた土器（縄文土器）の製作技術では手に入らない。つまり、焼き火程度の火力では、青銅器は作れないのである。

ところが、水踏栽培の開始とほぼ同じ頃、所も同じ九州島の北部で製作され始めた赤色土器は、窯を用いて八百度の温度を求めなければ作ることができない。いいかえれば、青銅器を鑄造する技術と、新式の赤色土器（弥生式土器）を焼く技術とは、必ずやセットになつてた筈である。

そうならば、その先の推定は極めて容易である。すなわち、西暦前二百年前後に九州島の西北部で作られ始めた赤色無文土器は、すでに青銅器鑄造の技術を知っていた土地からもたらされた技術でもって製造されたものである。

従って、この、いわゆる「弥生式土器」は、その名がいかにも日本のであろうと、起源は、朝鮮半島に求めるべきで、かの地の「無文土器」こそ、その原型だといえる。

○ 検証六―男根模型は語る

話をもとに戻すが、「アマツマラ」の「マラ」は、中国語では男根を意味し、この産銅・産鉄の神を祭る一つのでだとしてシンボライズされたと思われる。石作り（木製もあったかもしれない）の男根の模型が、中国山地の中腹や山麓の谷合いや峠の片隅などに、いかにも「もの言いたげ」に祀られたり、置かれたりして散見される。その付近には銅鉱もあつたらしく、昔、産銅に従事した人々が住んでいたとみてよいように思われる。

○ 検証七―出雲式銅劍

森浩一氏は、『歴史読本』▲謎の三種神器▽の中で、

荒神谷遺跡の銅劍は、「出雲式銅劍」という言葉があるように、長さが一〜五四センチメートルという、概して、北九州の弥生時代の銅劍に比べて長いものである。

といっておられ、そうすると、北九州もこの銅劍の製作地ではないということになり、ましてや、西出雲の国々は、畿内説（検証一）でも、九州説でも、ヤマタイ国とは無縁な国であるということになり、スサノヲ伝承が暗示するように、古くから、親潮に乗って、朝鮮半島南部の弁辰、辰韓方面から出雲に渡ってきた工人達が、西出雲の地で作ったものがこの銅劍であつたのだらうということになる。

○ 検証八―「原イツモ国」考

門脇禎二氏の「銅劍、銅鐸、銅矛と出雲王国の時代」の中の説を聞いてみよう。

「原イツモ国」は、一世紀前後頃より「キツキ地方」を中心に形成されはじめ、傘下の人々の齋く神は、『出雲国風土記』が「神奈備山（仏経山）に祀るといふ」キヒサカミタカヒコで杵築から三瓶あたりまで、その勢威は及んでいた。

さらに、『古代出雲王権は存在したか』で、

この銅劍が埋められたということの意味をどうとるかにかかわるわけですね。つまり、この銅劍埋納が、それを持っていた有力者、あるいは有力な集団が、非常な危機感に陥ったり、圧迫を受けたり、そういうことにかかわっていたとするならば、そういう集団に危機をもたらしただものは何かということになるわけです。

そうしますと、仮に手掛りを『出雲国風土記』の中などで考えますと、出土しました地点は、出雲郡の健部郷であり、ここでは、一番古

くは、クウヤツベ神々がいたところですが、やがて神門臣古禰という新興の有力者に押えられる。ここで支配勢力が交代したという可能性がひとつあるわけです。ですから、そういう現地の、出雲の西部の中での古いものと新しいものとの勢力の交代という可能性がある。

それと、もう一つは、今度は、やがて、出雲の東部ですね。東の方の「意宇」を中心とした勢力が圧迫を加えてきたと、そういう可能性がある。

それから、南の山越えに、吉備の勢力が、まあ、これは、事実、考古学の先生がいろいろおっしゃっているように、吉備の出雲西部に対する関係は、かなり早くからいろいろあると、そういうことですから、吉備の勢力が出てきた可能性がある。

と言っておられるが、この説から類推すると、東出雲や吉備の勢力も、この西出雲の「原イツモ国」の人々に圧迫を加えて、祭器（権威のシンボル）たる銅剣を埋納せざるを得なくさせる原因はつくっても、その銅剣を作って与える存在ではなく、この銅剣の製作地とは全く無縁であったということになる。

○ 検証九一十六鼻、韓鎗社、銅鋳露頭地

ここで、速水保孝氏の示唆に富んだ話を、『古代出雲王権は存在したか』の中から伺ってみよう。

今度銅剣が出土した出雲国、これは『風土記』の呼び名ですが出雲国出雲郡出雲郷、その隣の、古くは「宇夜里」、『風土記』時代では

健部郷の「神庭荒神谷」から出土しているんですが、その「原出雲国」がかつてあった地帯は、『風土記』で出雲郷ということで表現される地帯でして、今の「仏経山」、つまり出雲の神名火山から、この対岸の、最も早く斐伊川の沖積作用でくっついたといわれる、いわゆる国引きの原像がみられる島根半島の河下地区、「十六鼻地溝帯」の河下、あのあたりが、実は朝鮮半島からの渡来人（主として新羅人）の定着地なんです……。

だから、ズバリ言いました、今日、どこで一番銅鋳の露頭が見られるかといえますと、『風土記』でいう、出雲郡の「宇賀里」にあります。「唐川」、「別所」地区（平田市）ですね。一昨日も、私は現地へ行ったのですが、現に、道という道、山という山、殆んど緑青がついた岩石がズラッと連なっているんですね。

実は、なぜそこをめざしたかといえますと、そこに「韓鎗社」というのがあります。これは『風土記』の社ですね。そして、延喜式では、「韓竈社」（かまど）と書いてありますが、やはり釜でしょう。

これは、明らかに「韓鍛冶」の、朝鮮半島の鍛冶技術を持つところの、そういう渡来人たちが、あそこに定着したところだと思えます。ご承知のように「カラカマ」の「カマ」は、朝鮮語の *kama*（窯）でありまして、要するに「焼き物の窯」ですね。ですから、これは「溶鋳炉」と考えてよろしいわけで、そういう「風土記」の社をもって弥生時代の云々ということとは、時代ギャップがあると思いますが、少なくとも『風土記』では、「韓鎗」の「溶鋳炉」の神を祭った一族がいた。今日でも、唐川

地区は「荒木姓」なんですね。その（地区の）全部が「荒木姓」です。

（約六〇戸）これは、金達寿さん流のことばだといわれるかもしれませんが、「アラキ」とは「安羅から来た人」たちのことではなかったろうか。

その人達が韓の錘神を祀って、そこで産銅生活に入っていたと思うんですね。私は、弥生末期には、もう、既にそういう状態があったと思うんです。

あれだけの銅鉱が露頭しているのを見れば、当然、朝鮮半島の先進地の韓鍛冶技術をもっている人たちはあの十六鼻という朝鮮名のある港へ着いているわけですから、そういう人達が、あそこに定着したわけです。

○ 検証十一 使用原料銅の問題

速水説は、材料現地調達、現地製作説にとつて、強力な補強力を持つものであるが、使用銅原料船載説も強いので、一応見てみよう。

まず、中国からの輸入銅であろうとする説で、この説をとる学者は多い。この説によると、銅剣も銅鐸も、銅鏡や銅矛も、鉄文化の進展によつて不要となった中国の銅廃品が、中国から直接、または朝鮮半島を経由して国内に入ってきて、それが原料となったのだろうというのである。

また、直木孝次郎氏は、『日本の歴史』①「倭国の誕生」の中で

対馬における、朝鮮船載の車馬具や青銅利器と、その付属金具などの出土状況から、朝鮮から、一種の廢材が、銅原料として入ってきたと考えられる。

と説いておられる。

しかし、荒神谷で発見された銅剣は、未だ成分の分析、検討がなされていないということであるので、地元の銅か、大陸からの輸入銅であるのかについて、結論を出すのはむづかしいが、唐川、別所の露頭銅鉱や、山口県にあって、日本最古の銅山といわれている「長登銅山」、これは、聖武天皇発願の奈良東大寺の「毘盧舎那大仏」造成の材料たる銅の献上銅山として有名で、ここも近い。さらにいえば、石見銀山として有名な大田市の大森鉱山も、銀の産出量が底をついた江戸中期以降も、明治初期に至るまで、銅の採掘だけは続けられていたといわれるように、銅埋蔵の山であったわけで、中国山地には、古くから銅や鉄が豊富に堀り出され、昔から、これらの鉱山の支配権をめぐって、繰り返し繰り返し戦いが行なわれ、吉備の王「温羅」にしても、大江山の「酒頭童子」にしても、さらには、出雲の「目一つの鬼」すらもがそうであるように、中央勢力から鉱脈を奪われ、敗北の中に消えていった在地、先住の産銅・産鉄集団の王たちは、例外なく「鬼」として、悪者、討たれて当然の者」としての烙印を押されて、社会の体制の外へ抛り出されてしまっているのである。

話が少し横道に外れたが、要するに、そういう場所があり、そういう人達が居たということは、朝鮮半島南部から渡来して、西出雲に住みついた産銅技術者や、銅剣等の青銅器製作技術者達が、この地に君臨する王者の命を受けて、この地において、祭器たる銅剣を製作したとみて、その妥当性を否定されるところはないような気がする。出雲型」とい

われる、この「中細形銅劍」の製作期間が意外に短時間だったらしいといわれるのは、「原イヅモ国」の短命であった命運を暗示しているようである。

三、重複の弁（結論）

そこで、史料の語るところに従って、韓鏗のある所が、この銅劍の製作の場所であつたろうといえ、最も簡単でわかり易い結論の出し方になるだろうが、冒頭に主張したとおり、私は、この件に関しては、私なりのユメを語りたいと思っている。冒頭の主張を、締めくくりの意見として、もう一度持ち出してみたい所以である。

「神庭」という所は、神々が集まって大祭を営む祭祀の広庭で、近くは岡山県をはじめとして、全国各地に散在する。

「原イヅモ国」といふべきか、弥生中期後半から、後期初頭の西出雲の連合国を構成する首長たちは、毎年、春秋の大祭には、神の宿る仏経山を前にしたこの神庭の広庭に集まり、連合王国の巫女王ウヤツベは、その大祭を迎える準備として、銅を集めさせ、帰化工人たちを督励して、集まってくる首長たちの数だけの銅劍を作らせ、これを、祭りの間中神前に供えて神霊を入魂させ、大祭を終えて帰る首長の一人ひとり、この神の依りしるたる銅劍を与えて持ち帰らせ、これを御神体として祭り合わせることによって、連合王国の結束と協力を図ったのであろう。

従って、銅劍製作の場所は、ウヤツベの宮処周辺か、神庭の祭場に近

い谷合いのどこかであつたろうと思う。あの三五八本の銅劍の発見された丘とともに、狭い盆地を囲む山々の谷のどこかに、銅劍製作の工房の跡や、工人達の住居の跡が眠っているような気がしてならない。

だからこそ、滅亡の儀式として、神霊のこもる銅劍を集めて埋める場所も、当然、神庭の広庭を見下ろし、仏経山を望む、この谷でなければならなかったし、三五八本の銅劍があつても、不思議でもなんでもないのである。

※この論文は島根県斐川町教育委員会主催『第三回荒神谷遺跡の謎を解く』の入賞作品です。

謎の枝廣城考

枝 廣 信

一、はじめに 謎の枝廣城

枝廣城（正式には枝廣山城。以後枝広城と言う）

読者諸賢は聞きなれない城名と思われるだろう。従って又その存在を知る人も極めて少ないに違いない。

備後の三大郷土史料と言われる「備陽六郡志」「西備名区」「福山志料」にも一切その固有名詞は出てこないのだから……

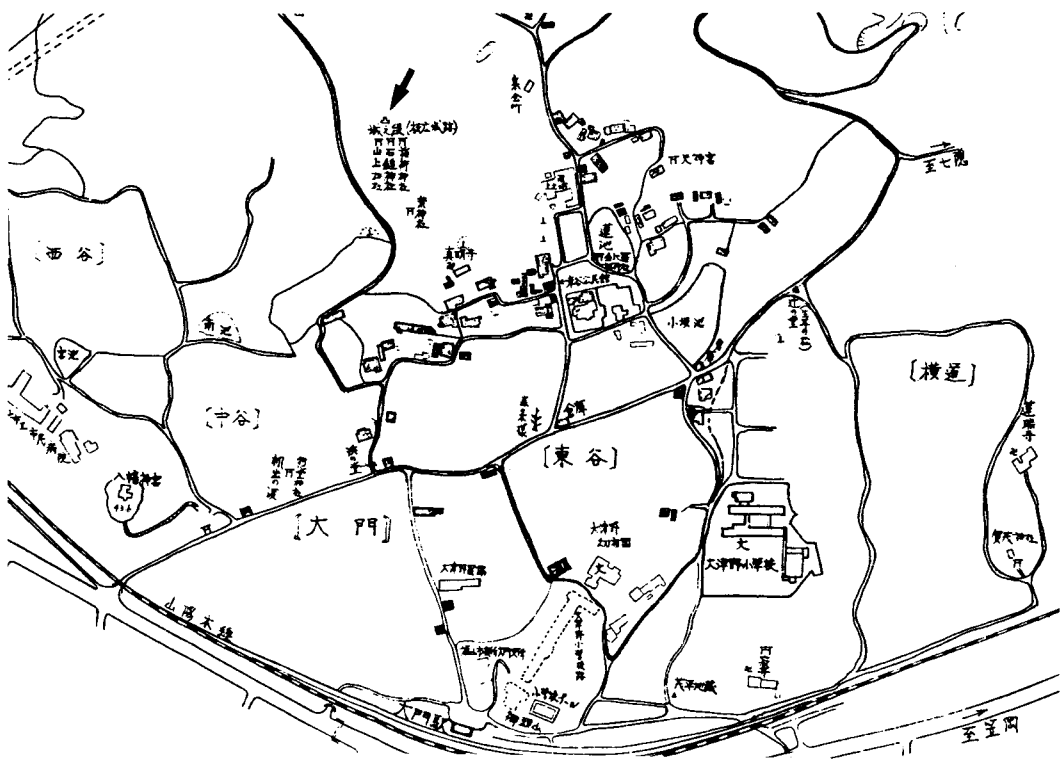
然し枝広城は確かに実在した。

場所は福山市大門町大門（旧深津郡大門村）東谷である。土地の人々は通称「城の段」と呼び、現在枝広城の呼称は現地でも徐々に忘れられつつある。

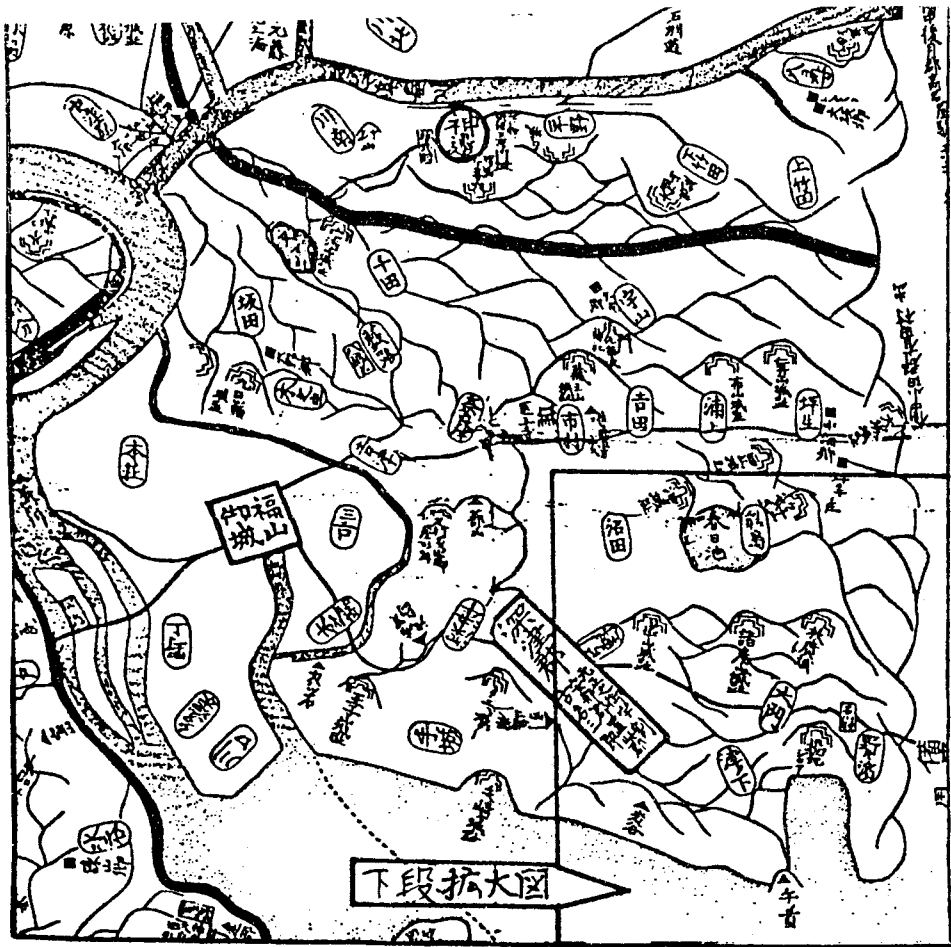
だが地区の小誌（「ふる里のあゆみ」）には判つきり記載されている。

（地図①参照）更に決定的な証拠として次ページに掲げたように江戸時代の備後大絵図（地図②福山市民図書館蔵・福山市赤坂町赤坂遊園内集古館常設展示 原図は淡彩）にも又豁然と記載されている。

一体、なぜその枝広城が誌上から忽然と消え失せたのであろうか？



地図① 吾古里東谷全図



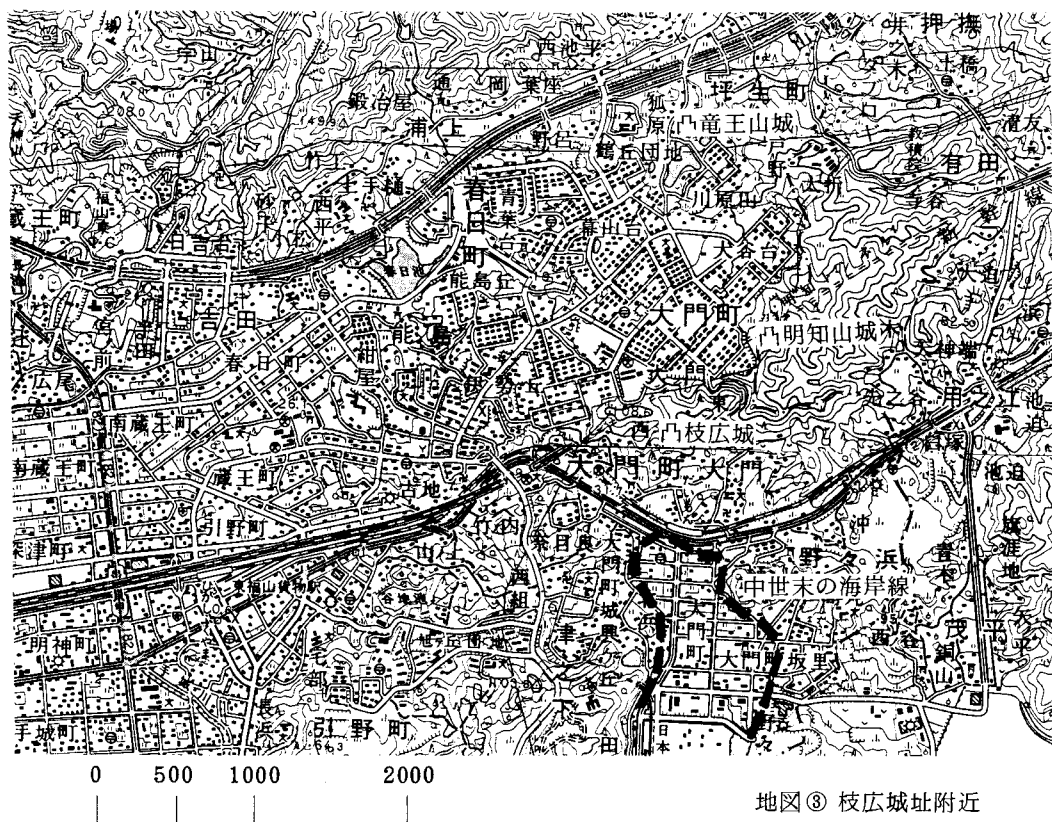
地図② 江戸時代備後大絵図（部分縮小）



右訂正図（筆者）



上掲地図拡大図



5万分の1 井原・福山

地図③ 枝広城址附近

そもそも枝広城は、誰が、いつ、何の目的で築城し、いかに機能したのであろうか？ 長い年月が伝承に加担することによって造られた誤まった虚像は、いつの間にか実像となって我々の歴史認識の中へ固定していく。四百年以上を経て、殆んどの人に忘れ去られようとしている枝広城の謎にどこまで迫れるか判らないが、あえて私はその謎にアプローチして見たいと思う。

その前にまず、枝広城が機能したと思われる戦国時代を中心に、全国的情勢、特に中国地方、備後南部に焦点を当て、述べて見たい。

二、全国的情勢 風雲と枝広城

応仁の大乱は両軍主将の死によって漸次下火となったが、却って天下は麻の如く乱れて、下剋上、弱肉強食、骨肉相喰む、いわゆる戦国動乱の世に突入した。だがその混沌たる戦国の世も天文の頃（一五三二―一五五五）になると、次第に地方ブロック化の傾向も見られるようになった。中国地方では山陰の尼子氏、山陽の大内氏、毛利氏が覇権を巡って角逐に寧日なかった。天文の初め頃までは尼子方がかなり優勢で、度々山陽地方まで脅かしたが、永くは保てなかった。

地方豪族はその度に右顧さべんし変節を繰返していた。

天文九年（一五四〇）尼子氏は大兵を発して、毛利氏の安芸（広島県）郡山城を囲んだが、大内氏の来援などもあって敗北を喫し本国へ逃帰った。大内氏はその勢いを駆って、天文十二年（一五四三）毛利氏、小早川氏らと共に、尼子氏の本拠、出雲（島根県）富田月山城に兵を進めた

が、神辺城主杉原（山名）理興等の裏切りにより大敗、命からがら逃帰った。前者の轍を踏む愚を冒した訳である。

天文十三年（一五四四）大内氏は前の失敗に懲りて、尼子氏の本拠を衝く作戦を捨て、先づ備後神辺城主杉原理興を征伐すべく陸海より兵を進めこれを包囲した。このあたりを「福山市史」は史料的にも信頼できる「小早川家証文四三三号」に抛り次のように述べている。

「……備後外郡五ヶ荘（または五ヶ）は坪生荘より分離したその南部の海より一帯の地で、今日の大門、能島、野々浜、津之下（以上福山市大門町）および引野（福山市引野町）を含む一帯の地と思われるが、天文十三年（一五四四）大内氏がこの五ヶ荘を竹原小早川氏に預け、この地の内に神辺城攻撃の拠点となる一城を築いて堅固に抱えさせることにしたのは、竹原小早川一族が、海上に発展しており、海上連絡に便宜を持っていたからであり、天文十三年八月七日付で、弘中隆兼に対してこのことを実行するよう申し送っている。（小早川家証文四三三号）」

註、同証文はこの章末尾に原文を付す 筆者

「広島県史」も同様の文意である。

神辺城は攻防実に六年に及び、遂に天文十八年（一五四九）落城し、杉原理興は出雲に奔った。（後、赦されて城主として帰り咲く）

次いで毛利氏は弘治元年（一五五五）敵島の戦いで、主君大内義隆を弑逆した陶晴賢を滅ぼした。

更に永祿九年（一五六六）毛利氏は出雲（島根県）富田月山城を攻撃して宿敵尼子氏を降伏せしめ、遂に中国の覇者となった。

注、後の中央の覇者織田信長は同じ永祿九年美濃の斎藤竜興を破り、漸く上洛の端緒を掴んだ許りであった。以て毛利氏が既にいかに強力であったかがわかる。

永祿十二年（一五六九）毛利氏九州出兵の隙に乗じた山名の遺臣藤井皓玄は奇襲によって神辺城を一時攻陥したが、逆襲に保ち得ずして敗走、浅口郡大島村（現岡山県笠岡市）で討死したといわれる。

天正六年（一五七八）山中鹿之介は主君尼子氏の遺子、勝久を擁し播州上月城（兵庫県）に立籠るが、毛利軍はこれを攻畧、勝久を自刃せしめ、降将山中鹿之介は護送途中高梁川阿井の渡しで謀殺された。

ひるがえって、目を京師に転ずると……

それより先、永祿三年（一五六〇）桶狭間に今川義元を斃した織田信長は、その後念願の上洛を果し、天下布武の道をまっしぐらに駈上っていたが天正十年（一五八二）明智光秀の謀反により京都、本能寺で最期を遂げた。

当期、信長の命で毛利氏の属城備中（岡山県）高松城を水攻めにしていた羽柴秀吉は、逸早くそれを知り毛利氏と直ちに講和、いわゆる中国大返しで摂津（大阪府）山崎、天王山に光秀を破り、後、天下統一、そして死闘ヶ原の戦、大坂の役、徳川氏による幕藩体制、明治維新……歴史は、大波小波のうねるが如く、ドラマを繰返しながら進んで行く。

「小早川家証文四三三号」 原文

四三三 大内氏老臣連署奉書寫

外郡之内五ヶ事爲無主之条對竹原方可被預遺候然者於彼在所一城執付之堅固可被相抱之由對家来老者中可被申渡候彼衆之事海上通路可

輒之条被得其心之分別候様可被申与之旨候恐々謹言

八月七日

(吉見) 興滋 (花押)

(青景) 降著 (花押)

(陶) 隆滿 (花押)

(隆兼) 弘中三河守殿

三、「備後三誌」に於ける枝広城 伝承の枝広城

津之下村	備陽六郡志	西備名区	福山志料
城址記載なし	海雲山光円寺縁起 大門村揚知山の城主云々	城址記載なし	城址記載なし
大門口村	古城二ヶ所 城山 岡志摩守景勝 明知山 藤井皓玄	明知山城 当城は大永年中岡志摩守 開築して住みしと云ふ 城主 岡志摩守安氏 同石見守安清 同志摩守景勝(房) 河野(藤間)光重 藤井皓玄 (エピソード)	城山城 岡志摩守景勝 (事蹟) 古城 年代城主シレス

野々浜村	古城一ヶ所 塩飽大力之助 藤井太郎左衛門光重	明知山城 飽浦四郎左衛門尉 塩飽太刀之丞 塩飽太刀之介光久 藤間太郎左衛門光重 藤井太郎左衛門好長 同 三郎左衛門 藤間十郎	明知山城 城主 塩飽大力之助 藤井太郎左衛門尉光重 (藤井は藤間の誤也ト) 藤井能登守入道皓玄
------	------------------------------	---	---

次に準序として枝広城(と思われる城)が「備陽六郡志」「西備名区」「福山志料」(以下備後三誌と言う)それぞれの中でどのような記述をなされているか見てみることにした。

当時大門湾は深く湾入していて、(地図①②③参照) その沿岸の野々浜・大門・津之下、三ヶ村(後の大津野村、現在福山市)は、五ヶ荘の内でも一種の村落共同体的な関係にあったと思えるので、枝広城の存在する大門村と共に、津之下・野々浜両村の項も関係事項のみ簡単な表にしてみた。

今改めて検証するまでもなく、旧大門村には古城址は一ヶ所しかなく、それが〃城の段〃と俗称されている枝広城である。

この事実を踏まえた上で、前頁の表により「備後三誌」を比較検討すると「備陽六郡志」に言う〃城山〃「西備名区」に言う〃大門村明知山城〃「福山志料」に言う〃城山城〃が枝広城と考えられる。

さて、その城主として、前記「備後三誌」を含め、凡ゆる資(史)料の

中で、岡志摩守景勝の名を挙げないものはなく、又これを否定するものも見当らない。

岡志摩守景勝は確かに枝広城に在城していた実在の人物と推定して、まづまちがいない。

言いかえれば、岡志摩守景勝の在城していたとされる城はすべて枝広城の異名である。現、福山市大門町幕山に、岡志摩守景勝の弟を祖とし

〃城名を以て名字とす〃と伝える枝広一族がいる。

その祖廟(といっても小祠であるが…)である通称〃毘沙門様〃の祭神の一柱に〃枝広城主岡志摩守景勝霊神〃とあるのも例証となし得ようか。

枝広城と密接不離の関係にある岡志摩守景勝を探るのが、同城の謎に近づく鍵であると思ひ、次章では彼の伝承と史実について述べたい。

四、岡志摩景勝の伝承と史実

群像と枝広城

「広島郷土史談」抜粋

②明知山城：深津野々浜にあり、城主飽浦四郎左衛門尉は「建武ノ乱」のとき、もし中国から南朝方があらわれん場合には、備前の三津石で東上する足利勢を食い止め楠、新田勢の官軍を助けようと、赤松筑前と三津石で力戦したが空しく討死した。

③明知山城：大門にあり、大永年間、岡志摩守安氏が築城したものの。同石見守安清、岡志摩守景房（景勝）などが居守していたところ、天文年間、四国水軍の河野刑部左衛門光重というものが不意に城を囲んだ。その時折悪しく城内は無勢で防ぎにくく、四方を囲まれては不利ゆえ「船出ノ渡リ」に出て河野勢と戦っていたところ、先づ石見守安清が矢にあたって討死したから、子の志摩守景房はわづかな家来をひきつれて一方の血路を開き上方さして逃げ、五畿内の知人をたよって落ちていった。のち里人たちは憐れに思い城主の霊を慰めるため「惣堂社」という社を建てた。この近辺に上塚という所は石見守の塚、下塚は討死した家来の塚。首塚は石見守主従の首塚。落城後は河野刑部左衛門光重、同万之丞光圓、河野幾三郎光明（六八郎）などが居守した。

(註)一、本書も亦「西備名区」と同じく、野々浜明知山城々と、大門明知

山城々と併存しているとしている。

二、「福山志料」では大門に於ける戦死は岡志摩守景勝としている。

三、「西備名区」に拠ると、大門明知山城々の伝承の続きは、河野光重が後、天正年中（「福山志料」では弘治三年、他に寛正年中の史書もあり）隣国笠岡山の城主陶山国時に敗死せしめられる様子を仏教説話的要素を混じえて詳述している。

四、船手の渡り々は帆手の渡り々の誤り。

先ずお断りしておかなければならない。

「西備名区」では岡志摩守景房（景勝）とあるが本稿では景勝のみを用いている。理由は特にない。他の資（史）料の多くが、景勝を採用しているからという単純なものである。若年の頃景房と言ひ、後、景勝と改名したのかも知れない。武将にはよくあることである。

さて、「備後三誌」の景勝伝承は大同小異であり、その記述を取捨選択、要約（尤も「西備名区」に偏重したきらいがないでもないが）している「広島郷土史談」（福山市民図書館蔵）の関係分を全文上段に紹介した。

岡志摩守景勝の伝承について二つの大きな疑問を抱いた。

その一、天文年中に一地方領主同士が軍独で相争い、攻ぎ合う事があった、或いはできたであろうかという点。私にはそうは思えない。若しあったとしても、彼我共ども、その背後には必ずや大国の意志が働いている筈であり右顧左顧して朝に尼子、夕に大内、毛利と節を変える

も、その時どきの旗幟は鮮明にしている筈である。

まず、独立独歩の一匹狼の伝承だったとは思えない。必ずや歴史の線の上の点、面の中の点であった筈である。

とすると天文年中の備南に於ける重大事件と言えば杉原理興の神辺城攻防戦である。杉原（尼子）方の岡志摩守景勝は、その前哨戦で優勢な水軍を擁する大内・毛利・小早川方の河野（藤間）光重に追落されたのではなからうか？（と始めは推理していたが……）

その二は伝承の岡志摩守景勝落去の様相と、彼を追落したとされる河野（藤間）光重が後、陶山国時に追落される（「西備名区」）様相が極めて似通っている点、更に後年、永禄十二年（一五六九）神辺城を一時攻陥した藤井皓玄が奪還され敗走する（第二章参照）様相にも共通点がないとも言切れない。

岡志摩守景勝の落去伝承は何かの投影ではないだろうか？

ことと注目すべき一書がある。

それは郷土史家故土肥日露之進氏の「広島県備後国旧深津郡古城趾考」（福山市民図書館蔵）という「日本城郭全集」（人物往来社刊）の原稿である。氏はその中で野々浜明知山城と大門明知山城を「誌上合併」せしめて、それぞれの城の沿革、城主の事蹟等を野々浜明知山城に「誌上統合」せしめ大門明知山城（枝広城）を「誌上抹殺」している。故意ではないが勿論誤りである。

然し土肥氏は同書の中で極めて注目すべき事を書いておられる。

即ちそれは、岡志摩守景勝は小早川の老臣、岡与三右衛門尉の子で、杉

原理興の神辺城征討に当り一時野々浜明知山城に在城したといっているのである。

更に伝承の中で岡志摩守景勝を追楽したとされる河野（藤間）光重は後年、永禄十二年（一五六九）藤井皓玄の神辺城奇襲に同心した阿波三好党より派遣された部将で、敗走の途中、備中（岡山県）浅口郡鴨山城主 細川下野守通董の急追に津之下村月の浜で討死したという。他の資（史）料と全然異なることをかなり断定的に書いておられる。

いつの場合でも定説に近くなっている通説、伝承を祖上にのせ、それを大胆に否定し、百八十度違った新説を唱えるには勇氣がいるし、よほどランクの高い資料と確信がなければできないことである。

※同書の関係分の縮少コピーを次頁へ掲載した。

若し土肥説が真実なら「備後三誌」の景勝伝承も、筆者の疑問（一）も勿論すべて誤りである。

果して岡志摩守景勝の去就、動向はいずれが真実なのであろうか？

更に私は「備後太平記」の中に、注目すべき次の発見をした。

「沼隈郡鞆津軍勢猿楽能之事」の項。

そこには天正六年（一五七八）播磨（兵庫県）上月城に尼子の残党を滅ぼした毛利軍将兵が（第二章参照）備後、鞆に凱陣、当時織田信長に逐われ、毛利氏を頼って鞆に寄寓していた足利義昭は将士慰勞の猿楽能を催し、それに陪席した百八名の武将の中に「岡伯耆守景信、岡志摩守景勝」とあるのである。

土肥説とつなげば、この事は一本の線となって立派に符合する。

若し岡志摩守景勝の大門に於ける天文落去の伝承が真実ならば天正六年（一五七八）小早川軍の一將として輅に現われる筈はない。

景信と景勝は書き方から見ても極めて近い血縁関係で、景信が目上と思われるが、判っきりした両者の関係は判らない。

次に「備後太平記」の関係分抄を紹介する。

「沼隈郡鞆津軍勢猿楽能之事」

去程に播州佐用郡上月城没落し、西国の諸軍勢勝利を得、悉く備後鞆之津へ帰陣す。時に大樹感悦斜ならず、武功の武士、粉骨軍忠を抽でし諸軍勢を、悉く鞆津城内へ被召、懇に宣ひけるは、凡そ將たるものは、敵国を治むる時は、

地を裂き、賞肉を分、功を賞し、時を踰す軍政を行ふと雖も、吾は悪臣平信長が為めに、身を西海に墜す。時に今、士卒の功を謝しがたと宣へば、郡下皆感応式代す。今日幸に晴天白日なれば、敵退治の軍政に猿楽の能を興じ、戦労を休止、饗餐すべしと被仰しが、頓て北の丸へ御下り在れば、棧橋高くかき上げさせて、粉骨功名の武士召し集められければ左は毛利、右は小早川の軍勢、御前には毛利右馬頭輝元、小早川左衛門佐陸景、河野兵部少輔通直、毛利伊予守元清。次に左の棧敷には、宍戸安芸守隆家、吉見大蔵大輔広頼、福原出羽守貞俊、内藤修理大夫、上原右衛門大夫、出羽十郎元秋、熊谷豊後守、益田玄蕃頭、天野中務大輔、山内上野介隆通（一本後太平記には名を闕く）、同刑部少輔通定（同書に此の人を欠く）、杉原播磨守盛重（同書に名

を欠く）、同弥八郎元盛（同書に此の人全然欠く）、三須筑前守、成

羽紀伊守、口羽下野守、赤穴左京亮、小笠原弾正少弼、佐波常陸之助

（介）、三刀屋藏人之助、舞台の庭には、桂左衛門大夫、同上総之介、

同忠次郎、児玉周防守、同三郎右衛門尉、渡辺石見守、志道大蔵介

（同上書には助につくる）、林肥前守、門田信濃守、内藤河内守（内

藤の上二宮信濃守を同上書には加へてある）、市川式部少輔、杉小

次郎、坂新五左衛門尉、木原兵部少輔、三吉（同上書には好）佐渡守

光茂（同上書には名を欠く）、神村豊後守、大庭加賀守、土倉対馬守

（同上書に二人を欠く。その替りに宇野道花入道、同九八郎がある）、

粟屋右京大夫 同肥前守、天野左衛門尉（同上書に五郎右衛門尉とあ

る）、三上淡路守、福岡彦右衛門（同上書は終りに尉がある）、桂因

幡守、転右衛門尉、粟屋紀伊（同上書に伊豆とある）、三浦兵庫守

（同上に頭とある。）井上相模守、渡辺民部少輔元（一本光）、同左

衛門尉（同上に此の二人を欠く、たゞ渡辺又左衛門尉がある）、児玉

若狭守、右は小早川の軍士一列す。棧敷の上には、小早川藤四郎元綱、

立花左近将監宗茂、大宮司左衛門入道、秋月三郎種長、高橋三河守秋

種、舞台の庭には浦兵部之丞、弟に世良源左衛門尉勝重、小田孫兵衛

之尉、三吉備後入道、同式部大輔隆慶（一本後太平記に此の人、及び

次の二人を欠く）、同名大炊之助、同丹後守、飯田讃岐守、小泉左衛

門尉、南三河守通弘（同書に名を欠く）、平岡左近将監、河内備後守、

鶴飼新右衛門尉、井上伯耆守、横見三郎左（同上、右に作る）衛門尉、

同和泉守、井上弥兵衛尉、有地民部少輔元盛（同上名を欠く）、同次

郎右衛門尉景信、同左京亮、同右近亮（同上、以上三人を欠く）、榑崎三河守元安、同弾正忠元兼（同上、以上二人を欠き、替りに榑崎十兵衛尉がある）、磯兼右（同上、左とある）近大夫、白井縫殿之助（同上、丞とある）、井上豊後守、虫上弥兵衛（同上、弥左衛門尉）、杉原七郎左衛門経珍、栗原左衛門佐実胤、横山河内守義隆、入江大蔵亮正高、岡左衛門進、長谷部大蔵左衛門尉元信、木梨民部大夫元経、椋梨左衛門尉包久、上原左衛門大夫元佐、東郷平内、高野山五郎兵衛尉元久、安原民部少輔元吉、岡伯耆守景信、同志摩守景勝、赤川左衛門亮、同十郎兵衛尉（一本後太平記には杉原七郎左衛門経珍よりこゝに至る迄の人々を欠く）、村上掃部頭、同賀曾岡左衛門尉、生口孫三郎、因ノ島新左衛門、梨羽中務大輔、是の人々粉骨功名、比類なき戦功、可抽諸武士也。皆太刀をはいて跪く。式三番終つて食籠、名酒佳肴、種々の珍菓を賜はり、鳥目三千疋、帷子、単物、山の如く積み上げ、猿楽に是れを給はれり。見物の大小名、悉く金銀青銅を木の枝に附け、舞台に積み重ねぬ。己に感能人の心を碎き、律筋声耳目を清ます処に、俄に青天暗く成り、予州道後の方より、黒雲矢の如く飛び来たり、霹靂天地を裂き、雨車軸を轟かす。人皆雨声に魂を動かせば、大樹義昭公も驚き給へ共、暫く御座を定め座しける処に、雷忽ち零ち来たり、城門の前成る町家を焼き立てしかば、群吏騒ぎ漂ふ事、唯綱代の魚の如し。見物の貴賤魂魄を驚かし氣を失へば、大樹も城に入り給ひ、諸卒は国々に馳せ帰る、扱も不思議の天災哉。時日多き中に、かゝる軍神祭祀の場に雷火落入こそ奇怪なれ、近年予州新田の宮の鳴動、

今日軍政勝賀の天災は、唯是れ足利氏の御代は是れ迄ならんと。

尚、「沼隈郡志」の々、輒猿楽能の伴りにも、培席の将士僅か二十一名の中に岡志摩守（名を欠く）の名が見える。

然し岡伯耆守景信の名は見当らない。なぜであろうか？

「沼隈郡志」の關係分も紹介する。

「猿 楽 能」

将士各次を以て坐す、御前には毛利輝元・小早川隆景・河野通直あり、左の棧敷には穴戸安芸守・杉原播磨守・福原出羽守等あり。右の棧敷には浦兵部三吉隆慶・有地民部・榑崎三河守・入江大蔵・木梨民部・岡志摩守・村上掃部頭・井上伯耆守等あり。舞台の庭には、渡辺民部少輔・神村豊後守・桂左衛門太夫・土倉対馬守・兒玉若狭守・粟屋右京太夫等居並べり。一騎當千の猛将勇士綺羅星の如く居並び、名酒嘉肴の食籠を前に陳ね鳥目帷子単物の纏頭を舞台に積み、感興人心をたらし、羽律耳目を驚す。まづ式三番より舞ひ始めしが折から一天俄に掻き曇り、豫州の方向より、電光凄まじく閃き来り雨車軸を流し、露歴天地をきりさき、凄愴謂はん方なし。

流石剛強の武士も、威風あたりを払へる將軍も、共に心悸き魂稍に、為んすべなく顔見合はする所に、俄然帛を裂くが如き爆声と共に落雷し、城門前の町家火焰に包まれたり。將軍も最早此迄なりと城に入り、

軍卒も我れ先きと逃げ去り、折角の興も烏有に帰せり、人皆眉をひそめて、足利氏の運命盡くる前徴にやと云ひ合へり。是れより後信長凶刃に倒れ、秀吉和を毛利と締結するに至り、義昭の素志全く頓挫し門前雀羅を張るの否境に陥れり。於是義昭より白傘袋、毛氈鞍を許されて、親任厚かりし山田一乘山城主渡辺民部景迎へて己が城に帰りしが、後一時堺に移居し、又秀吉の計ひにて毛利家へ預けられ、深津菰山の仮館に余年を送り、慶長二年大阪にて死去せり。

「備後太平記」の史料としての価値は「小早川証文」ほどの信頼は置けないし、土肥氏も既に故人なのでその出典も訊ねることはできない。

少しでもランクの高い史料をと望んだが、現在の所まだ発見し得ない。然し岡志摩守景勝が小早川家臣であることは、状況証拠から見ても先づ確かだと思われる。

ここで一応整理して見る。

伝承Ⅱ岡志摩守景勝は河野（藤間）光重に追落されたが、光重も又後年陶山国時に敗死せしめられた。

土肥説Ⅱ岡志摩守景勝は小早川氏の家臣で神辺城攻畧の際派遣された武将である。河野（藤間）光重は後年藤井皓玄の神辺一揆に組し細川下野守通董に討たれた阿波三好党の部将で両者の間には全然関係も接点もない。となる。

土肥説を支持し、次善の方法として、伝承の真偽を問うべく数理文献学的思考に消去法を加味して岡志摩守景勝をめぐる人物を探って見る。

果せるかな、細川下野守通董の菩提寺である長川寺（岡山県浅口郡鴨方町）の「細川公由緒記」（印刷本）には土肥説を裏付けるに足ると思われる二通の古文書の写しがあった。関係分を掲載する。

於神辺城阿州衆數輩討捕之由及度々如此段忠節無比類候次至播州表会出勢候浦上自然相働儀有之者備後兩國相談可氣遣事肝要猶藤賢可申候也

十一月九日

義昭公 御判

細川下野守とのへ

去八月阿州衆其外諸牢人罷出刻被殘置衆則取懸及一戰數多被討捕之由具申上候御感之条被成御内書候御面目之至候猶相心得可申候由被仰出候 恐々謹言

十一月六日

細川右馬頭

藤賢 判

下野守殿

足利義昭より細川下野守通董に与えたもので、文意は、「神辺城に於て阿州衆數多討取る功を嘉したるもの」 一通

今一通は「義昭の近習、細川藤賢がその事を義昭が非常に喜んだことを伝えたもの」 一通

ただ河野（藤間）光重という固有名詞が実証されなかったのは残念である。

左記文書は「榑崎文書」であるが、これも有力な傍証であると思うので掲載する。〳阿波之三好家〳の文言が見える。

榑崎筑後守御断書写

(前略)

一 私親三河守随分元就様・隆元殿・殿様以来被遂御馳走候、御両三殿様御感状十七御座候つ、中にも備後神辺之城、備中之藤井一類之者共、阿波之三好家之手合仕忍ひ取候、備後国中いつき再発仕様候処、木梨・有地両城江三河守兄弟之者共さし籠、家中之人しち取置則神辺之城へすかり、死人ておいむねとの者共八十余御座候つ、則切返し杉原兄弟入城させ申候、藤井一類備中高屋家城に取籠候之処、則取掛落去仕候、其時元就様・殿様御加判之御感状ニ御家之再興ヲ仕たるとの御感状、其段ハ殿様御失念被成間布哉と存候（『萩藩閩閩録』卷五十二榑崎与兵衛書出）

以て見て来た通りに、伝承はまづ誤まりの疑いが濃く、相対的に土肥説は岡志摩守景勝の去就、動向に限り、心証的にも信憑性の比重を強めていく。例え確証はないにしろ土肥説は確かな説得力で私の胸に迫ってくる。

(付) 尚、陶山国時については、本稿の主旨には直接関係なく、却って記述が複雑になるので、實在性に根拠のない事のみ申添えて割愛させていたゞく。

最後に岡志摩守景勝の岡氏族の中に於ける〳位置〳について考えてみたい。「備後太平記」〳鞆猿楽能〳では明らかに嫡流と思える岡和泉守（名を欠く、和泉守を称するものは正吉・就栄・景忠と三人あり、就栄カ筆者注）と岡伯耆守景信・同志摩守景勝との間には二十三名の武将の名が記してある。

「萩藩諸家系譜」岡氏の項には、嫡流の岡和泉守の名は見えるが、伯耆守景信・志摩守景勝の名はない。恐らく嫡流の系譜のみで傍流は記されていないのであろう？ 伯耆守景信・志摩守景勝は傍流・庶流だったのではないのか？ そうだとすると系譜に登場しないのも無理はないかも知れない。伯耆守（名を欠く）は一級史料である「萩藩閩閩録」などにも度々登場する。だが志摩守景勝の名は登場しない。通称でも登場しているのか？ 然しそれらの資料に登場しないからといってその存在を否定することはできない。

度々書くように凡ゆる資料に大門村の城主として岡志摩守景勝を挙げているし、又それを否定するものゝ全然無いところからむしろ實在の人物と推定して間違いなさそうである。

只、今まで調査した事を正しいとすると、伝承の中で景勝の父だとされている石見守安清、その先代とされている志摩守安氏存在は極めて疑わしいと言わねばならない。

関係機関を通じて入手した「岡譜録」は未だ完全に読解していないが、研究員の言を俟つまでもなく岡志摩守景勝の名は出てこない。然し同譜録はかなり後代（享保年中？）の編であるので〳某〳とか〳名不知〳と

いう個所が散見される。同譜録に実名が見えないという事のみで岡志摩守景勝の存在を疑うのも又早計と言わねばならない。

「西備名区」によれば岡伯耆守景信は神石暮ヶ峠和泉山城主とされていゝ。苦勞の末、伯耆守系図を入手した。

同系図は、私見によれば、後代（不明、然し、福山）の地名が出るころから、水野氏福山築城以後であることは確実）書き初められ後、代々書き加えられたものらしい。自家の系図を作製するに当り、不利、不名誉と思われれる事をも述べている事からして、かなりの信用性を持つものと思う。同書中には実名はないものゝ、大胆に推測すれば、岡志摩守景勝に比定し得る人物がないでもない。

然し同書は勿論私資料であり公的に史証として取上げるのは躊躇せざるを得ない。結局、岡志摩守景勝は岡氏の一族子弟のものとするのが妥当であろう。

岡志摩守景勝を含め、枝広城を繰る群像の実相を明らかにし得る確度の高い資料の出現を待望するとともにその後考を待ちたい。

五、二つの明知山城 流転の枝広城

今まで見て来た資（史）料で次のように推理した。

推理というよりも、表現を変えれば必然とは言わななくても当然の結果であると信じている。

現在の大門付近の地勢からは、戦国期の海岸線は到底想像できない。

当時は牛の首と防路ヶ鼻を岬として、大門湾は内陸に深く湾入し海岸線

は旧国道よりまだ北まで侵入して枝広城山麓の真明寺のすぐ下あたりまで迫っていたと思われる。

小早川家証文四三三号を引用した「広島県史」「福山市史」を思い出していたゞきたい（二章）。天文十三年（一五四四）小早川軍は大門湾を神辺城攻畧の爲の補給港湾とした。

神辺城の杉原理興を征討する為、五ヶ荘内に構えた一城はどこにあったのだろうか？ 枝広城こそが、その一城ではなかったろうか？ ご承知の通り、当時は陸路より海路の方が、はるかに迅速に且大量に人員、物資を輸送できた時代である。

枝広城はその目的からして、揚地城又は単に揚地（知は宛字）とも呼ばれた。当時揚地城の呼称が一般化して後の混乱を生むもとなつた。

揚地とは、荷揚地・揚陸地の意である。

この時点で「西備名区」「広島郷土史談」の大門・明知山城は揚地城と書き改められなければならない事が判る。

明知（アケチ）と揚地（アゲチ）と余りにも音（おん）が酷似しているために、後世の人々は混乱し混同し或いは枝広城を誌上抹殺する誤まりさえ生んだのである。

枝広城（揚地城）を大門・明知山城とし、野々浜明知山城と同名併存せしめ（「西備名区」「広島郷土史談」）或いは二城を誌上統合しして枝広城（揚地城）を抹殺（「広島県備後国旧深津郡古城陞考」）する誤まりを冒したのは同じ五ヶ荘内に偶然、明知山城と揚地城という極めて似通った音（おん）の城名があったのが混乱のもとだった

のである。

こうした山城は、その遺構の文化財的価値は勿論であるが、それが存在した歴史的背景の中で考察することがより重要であると思う。ではなぜ枝広城を揚地域と断定できるのか？

再び思い出していたゞきたい。

「西備名区」津之下村の項の海雲山光円寺の縁起の件りに「大門村・揚知（地・知は宛字 筆者注）山城云々、とあるのを紹介したことを……「揚知山城」とは「明知山城」の書き誤まり、宛字だろうと安易に考え、同じ「西備名区」の大門村の項には明知山城として、野々浜明知山城と同じ城名に書き改めた。（第三章、表参照）

そして結果的には明知山城を一人歩きせしめたのである。

大門・明知山城が枝広城の異名であることは第三章の説明の通りである。

つまり遂に大門・明知山城が揚知山城の宛字だったのである。

そこで大門・明知山城（大門・揚知山城）⇨枝広城という図式が成立つ。

尤も当時は宛字を平然として用い、それを自他ともに格別怪しまず容認していたらしい点にも原因がある。

「旧大門村には山城址は一ヶ所、枝広城のみである」

以上は文献上の解説だが、臨場的にも又同一の結論を裏付けている。

即ち野々浜・明知山城の本丸址は目算で二十坪程（六十六 m^2 ）しかなく、とても当時の本丸址とは思えない。

枝広城の方はこれも目算で五、六十坪位（百六十五 m^2 ～百九十八 m^2 ）はあろうか。

又「位置」（地図③参照）枝広城は当時の海岸線に極めて近いと思われ、物資の陸揚等にも便利であるのに対し、野々浜明知山城は海岸線より比較的遠い。P 24の地（絵）図②は、距離、方位等に厳密な正確さを要求するのが無理な江戸期の地（絵）図にしても、両城の位置が反対に書かれ、正しくは「枝広城」と記されている位置が「明知山城」そして「揚地」の下に（枝広城）すべきであろう（図②下段訂正図）。

地（絵）図作製当時も混乱、混同が見られる。

因みに明知山は現在もその通り明知山と呼ばれ、山頂（本丸址）には、NHKテレビ中継所があり、その地底を走るJR新幹線のトンネルも又明知トンネルと呼ばれている。又、野々浜・明知山城を本城とし、枝広城を支城だったのではないかとする向きもあるが、それは前述の理由からむしろ逆であろう。

野々浜・明知山城は古い城址をそのまま放置してあったのではなからうか？ 尤も監視哨程度のもは当時も置いてあったかも知れない。

尚、枝広城付近には血腥ぐさい修羅の址の地名や城址らしい古地名が沢山ある。曰く「死人の谷」「お首の曾根」「上馬場」「鞍の下」「的場」等々。然し野々浜・明知山城の付近には殆んどない。

これは藤井皓玄或いは河野（藤間）光重が神辺城合戦で敗走の途中、一旦この城（枝広城）に拠って抵抗したとも考えられ、地名が一般に時間の流れに耐えて極めて残り易い事を裏付けている。

そしてその事が後世、藤井皓玄を大門城主と錯覚せしめたのかも知れない。

「第七回水野勝成公支干祭記念誌」に故浜本鶴資氏の遺稿として「水野家に仕えた領内旧城主の子孫」の一文がある。氏がその中で「枝広城の子孫」として藤井皓玄一族を挙げておられるのもその辺りの考えかも知れない。

最後にもう一度強調しておきたい。

野々浜・明知山城と揚地（知）山城は全く別の城である。

随って既に定説に近くなっている「備後三誌」の伝承、およびその後の研究者諸家の解釈はすべて誤まりであると思われる。

六、まとめ 究極の枝広城

備南の戦国史は神辺城を措いては語れない。殆どこの重大事件は神辺城を中心にかけている。

天文年間の神辺城に拠る杉原理興との攻防戦、永祿期の藤井皓玄との一時的な攻防戦がその代表的なものである。

天文十三年（一五四四）神辺城攻畧を目指した大内・毛利・小早川軍は、内海の制海権を握る優勢な水軍を擁して大門湾を補給港とした。

そして「無主」の五ヶ荘内に枝広城を構築し、神辺城攻畧戦用の補給基地司令部（近代戦用語で言えば……）とし岡志摩守景勝を司令官として派遣した。

枝広城はその目的、性格から揚地城又は単に揚地（知）とも呼ばれた。

（この事が後々の混乱を生むもととなった）

神辺城攻畧成った後、必要不可欠な城ではなかったらしくそのまま、放置

されたと思われる。岡志摩守景勝はどの時点で退城したかは判らないが、後年、天正六年（一五七八）「轡猿楽能」に培席している。

城は永祿十二年（一五六九）藤井皓玄一派が敗走の途次一時抵抗に利用したかもしれない。又、岡志摩守景勝を討ったという伝承の河野（藤間）光重は、藤井皓玄の神辺一揆に組した阿波三好党より派遣された部将で細川通董に討たれたという。

岡志摩守景勝落去の伝承は河野（藤間）光重討死の事実の投影であろう。最後にもう一度、明知山という山があるのに眩惑されて「大門揚地（知）山城」とわざわざ記してあるにも拘らず「明知は揚地とも書く」（福山志料）などと安易に付会して、後世の歴史家・研究者を混乱におとし入れたのである。

枝広城の謎については、私自身の独自の見解を述べたが、岡志摩守景勝の史実については大筋で土肥説を踏襲した。

それが数理文献学的思考からも最も辻褃が合うと思うからである。

枝広城をめぐる論証は、細部に至っては未だ研究の要はあろうが大筋では以上で間違いないものと信じている。

即ち、天文十三年（一五八五）よりの神辺城攻撃にあたり、五ヶ荘内に構えられた一城（小早川家証文四三三号）は枝広城（揚地城）であり神辺城攻畧の大きな力となった。

そして城将は岡志摩守景勝である。

「備陽六郡志」にいう、「大門村城山」「西備名区」にいう「大門村明知山城」「福山志料」にいう「大門村城山城」はすべて同一の城（枝広

城)であり、又揚地(知)城、揚地(知)山城も枝広城の異名である。
戦国時代大門湾付近に発生した伝承、争乱の多くは枝広城(揚地城)を
舞台としたものである。

枝広城の謎を解くキーワードは「揚地城」だった。

水時計

佐藤 秀子

歴史上の人物に関する記述を読むのは……特に非運の最後をとげた……という時など心痛む思いがする。

万葉集に神亀六年に左大臣長屋王、死を賜はりし後に倉橋部大王（伝未詳）が作る歌、それに続いて、作者不詳で膳部王（長屋王の子、吉備内親王、神亀六年二月、父に殉じて母、兄弟とともに自尽）を悲傷しふる歌として、

よのなかは 空しきものと、あらむとぞ この照る月は
満ち欠けしける

の一首がある。親しい間柄のもの作であろうか。悲しみが切々と伝わってくる。

ある本には藤原定家が二十八才で左近衛権少将に就任して以来、十三年も昇進をさせてもらえない憤懣やるかたない思いが赤裸々に書かれている。昇進嘆願状^ノが載っている。これは、ふっと笑わせてくれるし、小野道風筆と伝えられ国宝に指定されている「秋萩帖」は貴重な紙を節約してか唐時代の中国の典籍の裏面を利用して書かれているとの記述を読めば、又、少しおどろいてしまう。

正面像とは、違った一面をみることは歴史の楽しさであり、雑学的なことを知ること人間性や時代の背景を知ることができる。

本を読むことと、人間と話をすることと、どちらが好きかと問われて知人は、もちろん後者と答えた。画商という仕事柄、出会う書家や画家、それに奈良や京都の有名寺の管長や住職、その人達と話すことの楽しさは、仕事のことは忘れてしまうほどだ。創作をする人達の輝きは、自信となつて顔に表われているから、やはりその心情が、話し相手にしみてくるのだらうし、達観した管長の話は、人生書を読んでいるより、様々な指針を示してくれるに違いない。

旅も不思議な人との出会いだ。昨年、大阪へ行く為、ホームで電車を待っていた時、亡くなった叔父にそっくりの人が向こうからやってくる。わたしは思わず、あいさつしてしまつて「すみません、叔父にそっくりだったのですから」と言つてしまつた。駅に来る時間が三分でも遅れていれば会えなかつただらうし、叔父に又会わせてくれた事の運命を感じ謝した。

西宮の大谷美術館でみた万葉歌人で、人間国宝の紙塑人形師作の額田

王の美しさは、その紅い被布の色のみごとさと、白い知的な表情をした顔。それはまさに何度も何度も気の遠くなる作業の積み重ねが愛情になり魂を持った結果だった。額田王の歌を読むうち、情熱にあふれた彼女を自分の手でこの世に現わさずにはいられなかったのだろう。

王朝時代は、時がゆっくりと流れていたのだろうか。こと有る度、読んでいる真情のこもった歌をみるたびに、昔と今の時間は違う質と量を持っていたのだろうかと思ってしまう。例えば、藤原氏の摂関政治時代、政權掌握には、娘を後宮に入れ、その腹に生まれた皇子を天位につけ、天皇の外祖父という親権を得るには、十年も二十年もの年数がかかるのである。その時を待つ悠長な生活の中で季節の移りかわりや月見の宴など折にふれての自然に対する関わりは、今のわたし達の比では到底なく、感ずる心を持っていた平安人に対し、とても羨ましい気がする。自由な時間が限られているのは、つまらない。流れ、動いているのは自分のほうだと思いたい。

日常を離れて、出かける時、行きあたりばったりのバスや電車に乗って時を忘れるのはどうだろう。自分を証明するものは何も持たず、必要以外喋べらない。それとも心に少しでも感じる人がいれば話しかける？
絵や焼きもの、古美術品をみている時、個々に対しての感じ方はそれぞれ違い、心動かされたものはいつまでもみている。その心染みゆくまで、ものに対峙できる喜びは時間を気にしない一人行でなくては果たせない。けれど、二人連れの話し声は、やはり耳につく……。少しさみしい。

今、珍重されている骨董も、昔は、庶民の日常の雑器だったものも随分あるとか。自分の大切なものや、気持までもに封をして、床下とか屋根裏部屋に置いておけるものなら、何十年後に開けてみるのも一興だ。かつて人がいた空間は、凝縮した思いが、やはり少しずつ残っていて、以前、わたし達に与えてくれたような感動を再び味あわせてくれるに違いない。

古いことを訪ねたり想い浮かべたりするたびに、わたしは最近の町並保存のあまりの明かるさが気になってしまう。白壁やふきかえられた瓦は、居ずまいを正してしまい、心情を吐露してはくれない。雑草の生えた道や、うす暗い小路、くずれかけた塀をなつかしがっているのは、わたしだけだろうか。あたりに落ちていた怨霊や魍魎ちみもろりょうは、いったいどこへ行ってしまったのだろうか。

博物館や古い美術館の暗い空間、そこに漂ようひんやりとした気、彼らが落ちのびた安任の地は、もしかしてここだろうか。

日蓮宗の傳來

——日蓮の西国布教願望と日像の活躍——

小林 定市

日蓮の西国布教願望と日像の活躍

弘安五年（一二八二）九月、氣候の激しい身延山（山梨県）での九年間の法華経信仰で、健康を害した日蓮は、身延山を下り常陸国に赴こうとして武蔵国池上（東京都大田区）で旅を続けることが出来なくなり六人の本弟子を定めて後事を託した。

当時、日蓮の教線は鎌倉を中心として、佐渡・越後・信濃・遠江国以来に限定された東国仏教であった。同年十月十一日、日蓮は入滅に臨み十三才の経一麿（日像）に、京都での布教を遺言し、同所で二日後に寂している。

日像（文永六〜康永元、一二六九〜一三四二、京都・妙顕寺開山）は、永仁元年（一二九三）の日蓮十三回忌を期して京都開教を決意し、日蓮の旧跡を歴訪し、身延山に登り日蓮の祖塔を拝し、越後から佐渡と北陸を巡り、永仁二年四月十三日に入京している。

四月二十八日には、御所の東門において京都開教を宣言し、四個格言を唱え、妙法を説く、日像の辻説法は過激なもので、洛中において折伏教

化をして教線を拡張すると、必然的に旧仏教系の比叡山並びに諸寺等の他宗の僧に憎まれ朝廷に訴えられた。

徳治二年（一三〇七）五月、朝廷は訴えを聞き入れ院宣により、日像は京都追放となり、土佐国幡多はつかたえと配流になる。

日像真言僧を相手に三昼夜法論

配流の途中西国えの街道筋にあたる、京都府乙訓郡おとくに冠井庄かいで真言宗真言寺の住僧実賢と、真言宗極楽寺（嘉祥年間、藤原基経創建、京都市伏見区深草宝塔寺山町）の僧良桂の真言僧二人を相手に三昼夜法論し、二人は破れ信伏改宗し日像の弟子となった。

その後、真言寺は真教寺しんきょうじ（後、南真経寺）・極楽寺は宝塔寺ほうとうじと寺名を改め、二ヶ寺とも日像を開祖とし、実賢と良桂は二祖となり、関西における日蓮宗弘通最初の寺となった。

当時、福山市水呑町の真言宗寺院の僧、戒善院日行の師は、真経寺の実賢であった。実賢が日蓮宗に転じたことで、日行も師実賢と同じ日蓮

宗に転宗する。元真言宗寺院、重顯寺に伝えられた「諸宗問答集」の裏書には次のように記されている。

〔応長元年二月、「諸宗問答集」の裏書〕

一、諸宗問答集、一卷、実賢の口入により、拜写し奉るものなり。
一、外に、日像聖人御本尊一幅を、改宗の褒美として遣わさるところなり。洛西乙訓郡鶏冠井村の実賢は、本来余の師兄たるなり。
像師（日像）彼の僧（実賢）に命じて、法華の深義を示す、余（日行）信伏随従し、忽ち密宗（真言宗）を捨て、一乘（日蓮宗）に帰す、茲により件の重宝を感得し奉るものなり。
時に、応長元（二二二）仲陽（二月）良日

戒善院日行

「水呑町史・重顯寺文書」

また、清光山重顯寺創立略縁起は、「応長元年三月五日、戒善院日行上人之を建つ、往古は真言宗なり。（以下略）」と記している。

日像は帝都開教を達成するため、正応三年（一二九〇）四月、法華經二十八巻を書写し、酷寒の夜、由井ヶ浜で百日の塩垢離の荒行を終え、正応五年には『秘蔵集』三巻を著している。この『秘蔵集』の写と推定される『秘蔵録』三巻が南真経寺に伝えられていて、重顯寺の『諸宗問答集』も南真経寺の『秘蔵録』の写しであろうと推定されている。

日像の後継者妙実（大覚）

妙実（号、大覚、弘安七年生カ）貞治三年、？一二八四〜一三六四。初、嵯峨大覚寺真言宗の僧。後、京都妙顯寺二祖）は従来、正和二年（一二三三）五月三日、十七才の時、侍者知覚・正覚・祐存の三人と、童子五人と共に、真言宗を棄て、日像の弟子になったと諸史料に記されているが、日像は正和二年より早く妙実を弟子としていた。

〔延慶二年、日像の付属状〕（寺院・僧侶の讓状）

伝授之

妙実上人

猶不能盡、以要言之、如来一切所有之法、（中略）

今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子、

例如今、佛將付上行等、當以此法付属於汝、仍為末代。

延慶二年（一二三〇）己酉七月八日

日像花押

「京都、妙顯寺文書」

妙実が日像に師事した時期が早まることは、それだけ三備（備前・備中・備後）えの布教が早まることを意味する。

正和二年説が判読誤、又は書誤りであるとすると、正和の年号から誤字を推定しなければならぬが、正和に似た年号に正応があり、和と応の字をくずすと和と応は似た字体となることから、妙実が日像の弟子となつた時期は、正和でなくて正応二年（一二三〇）ではなからうか。

妙実の備後布教

日像は、早くから妙実を法の相続者として認め、妙実は日像の期待に
応えて備前では多大の成果を挙げ、次いで備中・備後に教線を伸ばした
ように、備後との関係について、水呑、妙顕寺の「妙顕寺由緒事」によ
ると、

〔貞享三年（一六八六）十二月二日。寺院の開創と寺の本末関係を
宗門奉行所え指出の控。〕（文章の途中一部分）

大覚は、恒に廻運弘経の志を盡して、大いに宗風を振わんと欲し、元
享。正中（一三二一〜一三二五）の頃より西邦に周遊し、当郷に適
むく、時に村で日は落ちて晩れ、よって宿を三原一乗（鍛治法華一
乗、妙性）の宅に乞う。『水呑町史・妙顕寺文書』

江戸時代に書かれたもので十分な信用はおかれないが、参考となるもの
で、妙実は鎌倉時代に布教に廻ったと記している。

その後の法華一乗に関する創作物語りとして、宝暦十年（一七六〇）の
『備後太平記』『鍛治法華一乗之事』、安永（一七七二）の始頃の『備
陽六郡志』『分郡之一・水呑村』、続いて『西備名区』『巻二十四、水
呑村・草戸村』に、水呑と草戸寺を混同し、面白く尾鱗をつけた法華一
乗が登場する。

鎌倉における宗論

日蓮は建長六年（一二五四）から、鎌倉名越松葉谷なごまつばがやに小庵を建て法華
堂と号し、弘長元年（一二六一）迄布教している。

この法華堂は後に、日朗・日印・日静と伝えられる。

名越松葉谷日印（文永元年〜嘉暦三年）と、十宗房が、十五才の執権北
条高時の前で宗論をしている。記録は日印の弟子、日静（永仁六年〜応
安二年。父は上杉頼重、母は足利氏で尊氏の叔父。京都、本国寺開山）が
記している。

〔文保二年、『鎌倉殿中間答記録』〕

御障子内、相模守平高時殿、長崎左衛門入道殿、其外他人数。

文保二（一三一八）戊午十二月二十日、長崎入道円喜息所において

問答のこと。（文章途中の一部分）

彼（十宗房）云、何にもあれ、御辺（貴殿）の法門（日蓮宗）は、

鍛治番匠の様なる云甲斐無者こそ信すれ、甲斐々々敷人は信ぜず。

答（日印）て云、御辺の法門は鍛治番匠は仏に成らざると云うや。

『改定史籍集覧』

日蓮宗は職人の信仰と攻撃すると、鍛治番匠の何が悪いか、とやりか
えず、鎌倉で日蓮集を受け入れたのは特権から離れた和賀江・由比ヶ浜
あたりの鍛治番匠だったことから、備後に巡歴して来た妙実が先ず鍛治

と関係を持つとしたことは無理のないことである。

康永元年の日像

日蓮が寂したのが、弘安五^{壬午}年(一二八二)で康永元年(一三〇二)も同じ壬午の甲子(六十年で一廻り)の年にあたることから、日像は、身延山久遠寺(日蓮宗総本山)に登り、日蓮の塔を拜し、鎌倉比企ヶ谷の妙本寺(日朗開山、日朗寂所)をめぐる、武蔵池上本門寺(日朗開山、日蓮宗関東総本山)を過ぎ、故郷の下総国平賀に帰って、父母の墓参をすませて、初秋には京都に帰っているが、七十四才の日像には無理な長旅だったようである。

〔康永元年、日像の遺書〕

妙性(法華一乗)ト、妙法ト、妙理ト、香吉、満若、吉若、此六人ヲ御覧ミツイテタ(マ脱カ)ヒ候ハバ、命土(冥土)マテモ悦思奉可候。穴賢々々

康永元年十月廿六日

日像花押

僧都御房(妙実)

〔京都、妙顕寺文書〕

死を予期した日像は妙実に、妙性等の行末を依頼し、京都、妙顕寺で

同年十一月十三日に寂している。

前記、「妙顕寺由緒之事」の後文の一節に、

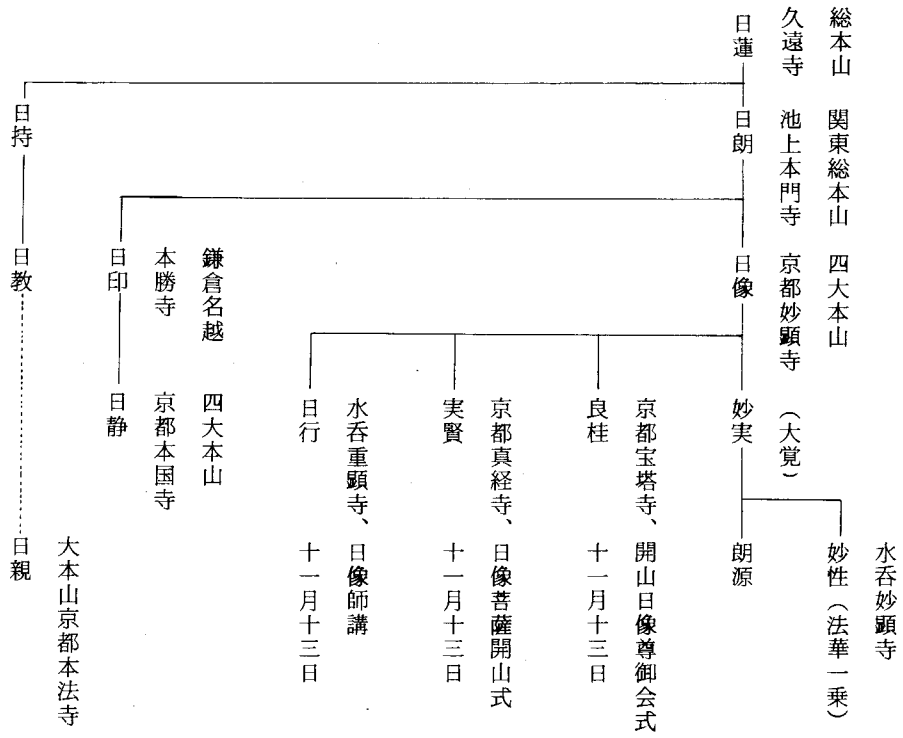
嘗て勇み鋭して、海陸の巨危を凌ぎ、悦然と本山の梵宮(京都、妙顕寺)に詣でて、礼を竭し欽蜜にして、像薩埵(日像菩薩)の座下に寓し、倍化行に遇う。

と記され法華一乗妙性は備後から、危険な道に堪えて上京し、京都、妙顕寺(元享二年の頃日像創建、日蓮宗四大本山)に詣でて、日像に出会い導かれたと記し、京都・水呑の両妙顕寺の記録は一致する。

延文元年(一三五六)四月、水呑・妙顕寺は妙性によって創建され、京都本山と同じ寺号を用い、創立迄の諸関係から系嗣を日像・妙実・妙性としている。

諸史料を集めて見ると、備後に日蓮宗を弘めたのは随に日像・妙実であるが、備後守護の長井氏は六条車大路に在京し、年貢請していた沼隈郡山南郷には浄土真宗光照寺(中国地方弘通最初の巨刹)が創建され、長和庄地頭の長井氏も在京して一族で四条烏丸簀屋の守護人を勤めている。この長和庄東方に日蓮宗が早く布教されたことは、鎌倉時代末期になると京都と備後沿岸部の交流は、想像以上に盛んであったことを物語るようである。

日蓮宗系統略図



妙 顕 寺

古代山城に就いて

七 森 義 人

忘年会で「あなたの研究テーマは？」と聞かれてしまった。最近どうも私は何をテーマとしているのか誤解されている様だ。それに加茂町の芋原や、神辺町の木之上城の事で、何やら騒がしい。そこで古代山城とは何かを、今までの研究がどの様になつていのかを簡略に記して、今後、備後の古代山城がどこにあるのかを考える参考になればと思う。

古代山城とは

最初に述べた古代山城は、続日本記に記されている、常城、茨城の事であるが、古代にある城という意味から述べてみる。

城とは、集団が戦いに備えて一定の地域の地形を利用、改変して築いた防禦施設の事である。

つまり、縄文時代より弥生へと移り、人々が稲作等により、土地に定住して、集落が形成される。そして、米作り等の為に、それを指導するリーダー的な地位が生まれ、そのリーダーのもとに他集団との土地、水利等の権利等を争う事になる。此争いから、他集団の侵入や、戦いを防ぐ為に城が生まれる。

最初は戦いをする人と、農耕をする人という様に役割は別れていなかったが、集団が攻争の結果、他集団の地域も得て、広い地域となり、数十人程度の集団が、数百、数千人となり、集団内に階層が生まれ、農耕をする人と、戦う人に別れてくる。

集落も住居が集まっただけのものから、集落の外に溝、柵、土塁等を築いたものが出来てくる。(城の発生)。それと共に、集落が農耕に不向きな高地に出来る。(高地性集落)^{注⑧}

更に時代が進むと、朝鮮半島との交流の証か、兵器庫等の純軍事的な施設を土塁や石垣等で囲む施設が発生する。(神籠石式山城、朝鮮式山城)。

神籠石式山城

官書に記されていない城の事で、明治31年に小林庄次郎氏が、福岡県久留米市の高良山にある。高良神社を囲む様になつている列石の山頂部分にある巨石を地元民が「神籠石」と呼び、その列石を神聖なものを囲む境界石と考えた。(靈域説)。そして、此様に山を囲む列石を神籠石

と呼ぶ様になった。

その後、八木装三郎氏が、高良山、雷山、女山、鹿毛馬の神籠石を見聞して、此らの遺構を城郭と考えた。更に同氏によって、中国、朝鮮、日本の城郭用語、日韓古城跡を比較し、此遺構を朝鮮式山城と関連があると考えた。(城郭説)。

更に戦後になると、おつば山、帯隈山、石城山等が発掘調査されて、

此石列は土塁の根止め石と云う事がわかり、更に土塁に柵があったと云

う事がわかり、此により、此神籠石は城郭であると云う事が確認された。

此遺構の築城時期は不明だが、二世紀から十世紀までの諸説があるが、柵の柱穴の間隔や、神籠石の水門の築造技法等から、大化改新に近い時期が有力視されている。

朝鮮式山城

注⑦

文献史料に記されている城の事で、その出現が白村江の戦いで、日本

が敗退して、西日本に新羅からの侵入の僅機の為に、亡命百済人の指導

のもとに、築いたとされる七世紀以降の山城を、朝鮮半島の山城と類似

の為に、朝鮮式山城と呼ぶ様になった。

各城郭

神籠石式山城

注⑩

高良山神籠石 福岡県久留米市

標高320 Mの高良山の250 Mから60 Mの山地先端部に列石が、約2.7 Kmにわ

たって廻る。(北半分の列石は不明)。防禦正面は筑後国府の方向の西

側で、列石の一番低い所、比高は約30 M、二ヶ所の谷に水門があったと思われる。列石内に高良山神社があり、此列石は、元々「八葉石」と呼ばれ、此列石内の「高良神の馬のつめかた」と呼ばれるくぼみのある巨石を神籠石と呼んでいた。西北側、約1.5 Kmに筑後国府、その国府から筑後川沿いに、此城の北方を通る豊後への官道と、此城の西を通る肥後への官道が通る。

注⑫

女山神籠石 福岡県山門郡瀬高町

標高203 Mの山を囲んで190 Mから15 Mの丘陵の先端部に列石を廻らす。

小さな三つの谷と四つの水門があり、南の尾根と防禦正面の低地の水門部分が残在し、北の尾根部分は不明。防禦正面の比高は約5 M、約3 Kmの周囲と考えられる。

注⑬

防禦正面の土塁の一部を発掘した結果、列石上に土塁があり、三ヶ所の柱穴が出て来た。柱穴の間隔が約3 Mで唐尺の十尺に当り、唐尺を使用した可能性が強く、大化改新後に、唐尺が使用される様になった事から、その時代に築かれたとされる説がある。

又、列石内外に古墳が多数有り、西方に肥後への官道が通り、筑後国府へは約18 Km。

注⑭

雷山神籠石 福岡県糸島郡前原町

標高955 Mの雷山の山地の中腹部分にあり、470 Mから390 Mの地点を東西

の尾根と、南北の谷の部分を通る。(北と南の谷の部分の水門部分とその延長の石垣部分のみが残存し、東西の尾根の部分不明)。列石内に480 M峰があり、一つの谷と数個の峰を列石が廻り、防禦正面の比高(北の水門)は約320 M、東方の山に雷神社があり、その神名から、此を雷山神籠石と呼ぶ様になった。

北の眼下に、伊都国があったと思われる糸島半島があり、国府へは約24 Kmと遠いが、糸島半島は朝鮮半島からの航路の中継地として、重要な地である。

注⑩
杷木神籠石 福岡県朝倉郡杷木町

標高150 Mの丘陵先端部にあり、列石は140 Mから60 Mの間を廻り、二つの小さな谷に水門を築き、列石のすぐ南に、広大な筑後川があり、堀の役割を果す。又、中世山城が二ヶ所列石内にあり、防禦正面(南の官道)の比高は約10 Mである。

朝倉橋広庭宮跡が約9 Kmの距離にあり、又、南に筑後と豊後を結ぶ官道が通り、筑後川の水運もあったと思われる、国府へは遠いが、交通の要地と思われる。

注⑪
鹿毛馬神籠石 福岡県鞍手郡額田町

標高75 Mの丘陵先端部に位置し、70 Mから20 Mの地点を約2 Km廻り、小さな谷に一つの暗渠式排水と呼ばれる排水口があり(列石との比高がない為) 列石内に小社があり、馬牧の跡という伝承が残っている。

海陸の交通の要路からは遠く離れ、筑前国府へ約35 Km、豊後国府へ約25 Km、但し、豊前国府から、香春、飯塚を経て、太宰府へ通じる古道が近くを通る。又、藤原広嗣の乱の時にこもったとされる湯川山が北へ約20 Kmの所にあり、此地は周囲が山に囲まれた盆地で、比高もないが此盆地が、防禦に適しているのだろうか。

注⑫
おっぱ山神籠石 佐賀県式雄市

標高66.1 Mの山を最高峰として数個の低い峰の山頂部分と低地を通る。丘陵の山頂と先端部分に位置し、58 Mから15 Mの間を通り、延長約1.8 Km、小さな谷を五つ通り、二ヶ所の水門と一ヶ所の城門が確認されている。

発掘の結果、柱穴が列石の前にあり、約3 M間隔である為に唐尺の使用が考えられた。

防禦正面の比高はなくて、防禦正面は武雄盆地側で、有明海からは山を隔てた低丘陵で要地とは云えず、国府へ約30 Kmも離れ、防禦正面の盆地は肥前国府(佐賀市)から武雄市橋町鳴瀬、藤津郡塩田、嬉野を経て長崎へ至る街道が通る。又、川船も近くまで航行していた。

此城は、鎮西八郎為朝の小社があり、為朝の築城という伝承があり、此城の北方には、磐井の砦と称する地があり、磐井の乱の時に、此砦にこもったとされている。

注⑬
帯隈山神籠石 佐賀県佐賀市

標高178.1 Mの丘陵先端に位置し、160 Mから40 Mの間を四ヶ所の小さな谷

を廻り、水門と城門各一が確認され、約2.5 Kmの周囲を廻る。

防禦正面は国府のある南方向で比高約5 M、此も発掘がされ、柱穴が出て来て、3 M間隔であった。城内の一部を発掘したが、倉庫等の施設は未発掘。

国府へは約5 Km、又、東方には肥前風土記に記されている烽があったとされる日の隈山がある。

注②④
御所ヶ谷神籠石 福岡県行橋市

標高247 Mの山地の山頂と山腹に位置し、240 Mから80 Mの地点を列石が約3 Kmで一部二重になって廻る。二つの小さな谷に一ヶ所の水門と二ヶ所の城門が残存する。防禦正面の比高は（北方向）60 M。

城内に景行神社があり、景行天皇の九州遠征の時の行宮所という伝承が伝わり、此、神籠石を帶石と呼んでいた。東方の平野に豊前国府が約5 Kmの距離にあり、南の山麓の川が水運に使用できたと思われる。

注②⑦
石城山神籠石 山口県熊毛郡大和町

標高350.1 Mの石城山（高日ヶ峰、星ヶ峰、築山ノ峰、鶴ヶ峰、大峰の総称）の独立山塊の山頂付近の345 Mから270 Mの地点を六つの小さな谷を廻り、三ヶ所の水門と二ヶ所の城門があり、約3 Kmの周囲がある。「ホロソ石」、^{注②⑧}「マナイタ石」と呼ばれる城門の礎石が多数残り、城内に延喜式内社の石城山神社がある。

土塁中から、石城山神社で使用された祭祀土器が出土した為に、9世

紀から10世紀に築造されたという説があるが、土塁の心部版築部分でなくて、外皮版築部分から出土した為に、土塁の補修時に混入されたと言う説が有力で、土塁の築造はもつと古いと考えられる。望楼の跡と考えられる土塁の切れ目や、空堀がある。空堀は築城当時のものではなくて、幕末に長州藩の奇兵隊の屯所が此に置かれた為に空堀を造ったとされる。此は北に都と太宰府を結ぶ^{注③⑩}第一級の官道が通り、南は瀬戸内海航路が通り、陸海の交通要所で、国府からは遠く約40 Kmもあるが、南の平地は周防地方でも屈指の古墳群があり、当時は此地方は周防国の有力な地帯と思われる。

注③⑩
永納山城 愛媛県東予市

標高132.4 Mの低独立山塊を中心に、110 Mから30 Mの小峰を結び、一つの小さな谷を渡り、水門の推定地が一ヶ所で約2.7 Kmの列石が廻る。又、九州方面の列石は一M四方の石が一段で連なっているが、此は数十cm程度の石が、数段の石垣状となって連なっている。

防禦正面は国府のある今治平野（国府へ約8 Km）の方向と、縄文、弥生の遺跡部が多い、周桑平野の両方向と思う。東方には海があり、瀬戸内海航路が通る。

注③⑪
鬼ノ城 岡山県総社市

標高403 Mの半独立山塊の山頂付近を小さな四つの谷を渡り、390 Mから280 Mの間を石垣、土塁、列石が廻る。此は石垣が高く、水門も高いもの

が五ヶ所も残存している。

延長は約2.8 Kmで、防禦正面は国府側の南で約5 Km、比高はかなり高く、急峻な比高250 M。防禦正面側は高い石垣と堅固な水門を築いているが、搦手側は一段ぐらいの列石による土塁が主である。城門は推定地を含め三ヶ所あり、^{注⑳}温羅伝説が伝わり、暗に吉備氏と大和朝廷との攻争を示唆している。

^{注㉑}

大廻小廻山城 岡山県岡山市

標高198.8 Mの低独立山塊の山を二つの小さな谷を渡り、190 Mから80 Mの間を列石が廻る。

防禦正面は北方の備前国府方向と（距離約5 Km）、南の瀬戸内海方面の二方向と思われる。比高は約50 M、わりとなだらかな山容であるが、此山塊の東方の坂折峠は古代の官道で、交通の要所と考えられる。

^{注㉒}

城山城 香川県坂出市

標高462 Mの独立山塊頂部を中心に二重の塁壁を持っている。内側の比高は約360 Mで、430 Mから370 Mの地点を約3.5 Km廻っている。外側の塁壁は370 Mから260 Mの地点を約7.5 Km廻りで比高は約250 M。

門礎や建物の礎石と思われる礎石は多数残り、城内に城山神社の旧社地とされる明神原と呼ばれる祭祀遺跡がある。

東麓に讃岐国府が約5 Kmの所にあり、東方と北方を防禦正面と考えられる。

朝鮮式山城

^{注㉓}

大野城 福岡県太宰府市

太宰府政庁のすぐ後に位置し、標高410 Mの鼓ヶ峰を最高所として、一つの大きな谷と、数個の峰を廻る様に、独立山塊の頂部に位置する。北と南に二重の土塁線を廻らし、外側の土塁は190 Mから400 Mで比高は110 Mで、延長約6 Km、内側は220 Mから400 Mで比高は180 Mで、延長約4 Km、北に一ヶ所、南に三ヶ所の城門があり、城内の尾根に七ヶ所、70棟の建物跡が確認され、梁行三間、桁行五間、各柱間が2.1 M（七尺）と同一規格で建設されている。

^{注㉔}

鞠智城 熊本県鹿本郡菊鹿町

標高168.9 Mで延長約3.5 Km、しかし、此は土塁線が不明であり、城内の建物跡とされる礎石群のある米原集落の尾根を土塁と考えてみた場合であるが、170 Mから90 Mの間を土塁線が通り、三つの城門礎石を通して思われる。^{注㉕}大野、基瀬、両城と共に修築された為はその両城と同時期の築城と思われる。

しかし、此は築後、肥後の国府からも遠く離れている。ただ、南や、西の玉名、山鹿には、多数の彩色古墳があり、有力な地域である。

^{注㉖}

基肆城 佐賀県三養基郡基山町

標高415 Mを最高所として山頂とその先端に位置する。180 Mから400 Mの

地点を土塁が廻り、比高は約100M、延長約4Km、一つの大きな谷に水門を設けて、四つの城門跡があり、土塁の内側を車道と呼ぶ幅数Mの平坦地を造っている。城内には、五ヶ所の建物跡があり、大野城と同じ、五間×三間の建物が3-4を示めて、柱間も七尺である。

又、城の南西の山麓に、^{注④①}とうれぎ土塁 関屋土塁と呼ばれる。五世紀代とされる土塁の残部があり、太宰府の前面に水城と呼ばれる土塁があるがそれと同様の役割を果たしたのであろうか。

^{注④②}
金田城 長崎県下県郡美津島町

標高275Mを最高所として、三つの小さな谷に城門を築き、周囲約2.5Km、20Mから270Mの間を土塁線が走り、比高は約20Mで、山地先端の海岸沿いに位置する。

国府からは約15Kmも離れ、浅茅湾の奥まった地であり、交通の要所とは云えないが、朝鮮半島からの来航時は最初の地の為により一層の備えが必要な為、此様な要害の地を選んだのではないだろうか。

屋島城 香川県高松市

標高292Mの南嶺を最高所とし、西側の集落の浦生の谷の奥まった地（標高90M）の所に、長さ約90Mで高さも幅も広い石塁が残存し、更に、高さ1Mぐらいの土塁が200Mぐらい続いているが、西側の部分しかわかっていないので、城郭の全周はわからないが、推定として此島の標高90Mの地を一周すると約7Kmにもなる。島頂の池や、平坦地に当時の

施設があったと考えられる。

此城は、国府からは約20Kmも離れているが、眼前を瀬戸内交通の要衝とされ、又、南方の高松平野には石清尾古墳等の有力な古墳群が存在する。

高安城 奈良県生駒郡平群町。三郷町

^{注④③}
標高488Mの高安山を最高所として信貴山多聞院を含めた説等数多く有るが、西側の城郭線は生駒山から高安山の尾根線と考えられるが、東、北、南の線が不明である。しかし、高安山の東数Kmの地に倉庫の礎石群が発見された。

長門城 山口県下関市

下関市と書いたが一切不明であるが、説として、唐櫃山、茶白山、火の山、竜王山、霊鷲等があり、関門海峡付近の山と考えられている。

茨城

読みとしてはイバラノキ、マンギと呼ばれているが、所在地は一切不明で、豊元国氏が、福山市蔵王山を当てる説を出したが否定の色が強い。しかし、穴郡にあったので、福山市と深安郡の地にあった事は間違いないであろう。

常城 広島県府中市

府中市本山町の旧青目寺跡（七ツ池の周囲）の付近と、その旧青目寺の東方尾根から山麓にかけての説があるが、遺構は見つかっていない。旧青目寺の建物礎石を、城の施設の礎石と考えている。

怡土城 福岡県糸島郡前原町

標高415Mの高祖山を最高所として、五つの小さな谷を含む独立山塊の山頂部分から平地まで約6.5Kmの延長を測り、城門二ヶ所が残存する。又、平地部に大規模な土塁を築き、六ヶ所の建物礎石が残る。

此城は俗にいう、朝鮮式山城ではなくて、築造年代が七世紀後半ではなくて、八世紀半ば、後半に完成する、又、吉備真備が、唐に留学して、唐での城を模したと考えられる構造で、大陸式山城（中国式山城）と呼ばれている。つまり、築造時期、築造目的、築造設計者が違う。

備後の山城

それでは備後の古代山城について記してみたい。

前記した様に、常城、茨城があるとされるが、此は、続日本記養老三
年（七一九）十二月の条に、「戊戌、停備後国安郡那茨城、葦田郡常城」と記されている。

芦田郡は現在の府中市と福山市芦田町であり、芦品郡新市町に常という地名が残る、土地の古老が府中市本山町の亀ヶ岳の事を城山（ジョウヤマ）と呼んでいた。

安那郡とは、現在の福山市の一部と、深安郡である。茨城をマンガと

呼んで、神辺町の湯野に馬木という地名から此付近の茶白山、山主山の
一帯を当てる説がある。又、茨城を（イバラギ）と読んで、岡山県の井
原市を当てる説、福山市の蔵王山を当てる説もある。
養老三年とはどの様な時代か。

続日本記の記事を見ると、天智期以来31年ぶりに遣唐使を派遣（大宝
元年、701年）又、遣唐使が倭国と名乗らずに日本国と名乗り、律令を定
めて国号を日本と称して、曆を造り、独自の年号を造り、和銅開宝と云
う最初の貨幣の発行等、独立国としての体裁を整えていった。慶雲三年
（七〇六）二月に、京や畿内の調を戸板で収める様にする等、減税措置
を取っている。扁役制度の採用。和銅三年（七一〇）、藤原京から、平
城京へ移転。霊龜元年（七一一）から天平十二年（七四〇）の間に、大
宝令で決めた国、郡、里という三段階の地方行政の単位の里が、郷と変
り、郷がさらなる二、三の小さな里に分けられ、50戸の郷戸がさらに二、
三の小さな戸に分けられ、房戸と呼ばれる様になる。養老二年（七一一）
に遣唐使多治比真人県守が帰国し、唐の仏教を中心とした諸芸術、文学、
思想等、中国文化が流入して理解が深まる。朝廷は国司の上に按察使を
置いて人民を掌握を強力にした。しかし、その結果、養老四年二月に九
州で隼人が、九月に奥羽で蝦夷が反乱した。養老六年（七二二）に官營
の百万町歩開墾計画、三世一身の法、全国的に開発政策を進めていった。
天平元年（七二九）、長屋王家の没落、天平七年（七三五）七月に、吉
備真備らが唐より帰国する。天平十二年（七四〇）、藤原広嗣の乱、聖
務天皇の従弟で、光明子の甥の広嗣が、太宰府を動員して反乱を起す。

注⑤

天平十五年(704)に墾田永年私財法を立法化する、此により、律令国家の基盤である班田収授法を破壊する事になるが、立法の理由が国分寺の建立に地方豪族を協力させる為であった事は明らかである。

つまり、畿内政権が、日本という国の体制を整えて、減税や、地方行政の掌握が徹底して行なわれてきて、地方豪族の反乱や、対外緊張はなくなってきた。

又、続日本紀による古代山城関係記事

文武二年(698) 太宰府に大野、基肄、鞆智の三城を繕わせる。

同年 高安城を修理す。

三年(699) 高安城を修理す。

同年 太宰府に三野、稻積の二城を修めさせる。

大宝元年(701) 高安城を廃して、舎屋雑儲物を大和、河内二国に移す。

注⑥ 高安烽を廃して、高見烽、春日烽を置く。

和銅五年(712) 高安城に行幸す。

同年 備後国安那郡茨城、芦田郡常城を停む。

養老三年(719) 天平勝宝六年(756) 怡土城を築く。吉備真備を専任する。

天平宝字八年(764) 惠美押勝、高島郡三尾にて戦う。

神護景雲三年(768) 怡土城完成。

とあり、701年に高安城を廃す等、それ以前も修理のみで、養老三年の

停む以降、756年の怡土城を築くまで緊張がなかったものと思われる。

備後、常城、茨城は停むとなっているが、停むとはどういう事である

うか。

701年に高安城を廃す記事があり、舎屋雑儲物を大和、河内に移すとあり、廃すとは城内にあるものを麓に移し、城内の食料等がなくなる状態であるから、廃よりも停の方が軽いから、食料や武器等を城内に保存している状態をいうのであろうか。しかし、都に近い高安城が廃されているし、それ以降なので、常城、茨城は停止というのは、此地域が、大和地方よりも緊張であったのであろうか。

神籠石は地域政権の築造か。

官書に未記載、反乱伝承地にある。

藤原広嗣の乱 現在の福岡市北部から北九州市、筑豊地帯で反乱を行

している為に、鹿毛馬神籠石、御所ヶ谷神籠石を使用

した。

磐井の乱 久留米市を中心とする筑後を中心としていり為に、高

良山神籠石、女山神籠石を築造。

吉備の反乱 吉備の中心地は、鬼ノ城、大廻小廻山城。

吉備の反乱の伝説として温羅伝説が考えられる。温羅伝説とは、吉備

津宮縁起の事で、少し長いが引用すると、「崇神天皇のころ、百済王の

温羅という人、一族を連れて吉備に来て、新山に城をつくり、都へ奉る

調物や婦女子を掠奪し、又の名を吉備冠者と称した。此事が朝廷に知れ、

皇子のイサセリヒコノミコトが温羅征伐の将軍として派遣され、吉備中

山にて戦を始めるが、降伏のきざしささえも見えず、西の片岡山に陣を移

動させると、無防備と想つて温羅が、鬼ノ城を出て弓を射かけるが、突然岩が楯となった。此を楯築山と云う。ミコトも弓を射るが、温羅の矢と空中に喰い合つてちががあかない。神のおつげどおり一度に二筋の矢をつがえて射たところ一筋は空で喰い合つて落ち、もう一筋は鬼ノ肩を射抜いて、いずこともなく飛んでいった。その矢の止まる所を箭翔といふ(矢掛と書く)。矢の喰い合つて落下した所に社をつくり矢喰神社となした。温羅が矢にあつた為川で鯉に化けて逃げようとした。そしてミコトは鵜に化けて、嘴み捕えた。温羅の傷口からしたたる鮮血によつて川は血に染まり、此川を血吸川と呼び、川の傍らにあつて温羅を祭る社が鯉喰神社である。温羅は降伏して吉備冠者の名をミコトに献上したので、それ以降、ミコトは吉備津彦命と名乗る様になつた。

つまり此伝承では、

①崇神天皇の皇子が吉備国の冠者を殺した。(大和朝廷への吉備の服従)

②鬼ノ城(キノジョウウ城ノ城)という意味か。)

③百済王の温羅(百済渡来系氏族の温羅ウラとは朝鮮語のウルとしたら、山丘が囲繞してまがきの様な形状をいう鬼ノ城の外郭を表わしているのか。つまり吉備国の渡来系氏族が吉備氏に協力して築いたのであろうか。)

それでは神籠石が大和政権が築いたとしたら。

ただ単に官書に未記載というだけか。

神籠石を防禦正面の比高別に分類すると、

高い↓雷山、石城山、城山、鬼ノ城

中間↓御所ヶ谷、高良山、大廻小廻山城

低い↓杷木、鹿毛馬、おつぼ山、帯限山、女山、永納山城

国府等の国の中心地からの距離別では、

近い↓鬼ノ城、大廻小廻山城、城山、永納山、御所ヶ谷、高良山、

帯限山

遠い↓おつぼ山、女山、杷木、鹿毛馬、石城山

海陸交通の要所か。

要所↓鬼ノ城、大廻小廻山城、城山、石城山、永納山、杷木、女山、

帯限山

つまり、朝鮮式山城と同じ様に、国府に近い。又は海陸の交通の要所にある。

更に、高さ的にも、かなり高い所にあるものが多い。それと共に、地方豪族の強力な所にある為に、地方豪族が、大和政権の要請によつて築く。地方豪族が築いたものを大和政権が手直した等が考えられる。

しかし、なぜ、備後国に常城、茨城、二城あつたのであろうか。

吉備国周辺の城郭、広島県(備後国に常城、茨城)。岡山県(総社市、鬼ノ城、岡山市、大廻小廻山城)。兵庫県(新宮町、城山城、城牟礼山城?)。香川県(坂出市、城山。高松市、屋島)。

なぜ此様に多いのであろうか。九州地方を第一線防衛地、中国地方第二線防衛地、近畿地方第三線防衛地。

此だけ数多いというのは、大和朝廷が築くとしても、その地方豪族を

動員するわけだから、此にそれだけの有数な力があつた事は確實であらう。吉備氏は製鉄、製塩、瀬戸内航路の航海で力を持っていたと考えられる。

此らについては、備讃海峡付近に高地性集落が分布している。巨大な古墳がある等で分かると思う。

後記

吉備氏の力で鬼ノ城を築いたという様に書いているが、吉備氏は、雄略天皇の時に最初の謀反を起し、清寧天皇の時に、又謀反を起し、山部を取られてしまつて、勢力はなくなるが、鬼ノ城の石垣の築城技術は七世紀後半ぐらいと考えられている。

なお、大野城では城内に後四天王寺が建立されているが、元々、城の守護としてあつたのが、緊張融和と国家仏教の国家守護の為に、城が廃されると寺院となつた。此と同様な事は他の城でもいえると思われ、高安城の信貴山朝鮮孫子寺、屋島城の屋島寺等、神籠石でも神社が内にあつたりする。城を考える上で、寺社関係との関連も考えてみなければならぬであろう。

補注

注① 芋原に大スキの跡と伝えられる伝説があり、芋原集落を囲む様に空堀があるとされている（一部残存、点線推定、図①）。

注② 中条谷の木之内集落と三谷村に跨る山で中世山城と、平安時代の寺院跡があるとされ、数ヶ所の郭と井戸、更に瓦の破片が出土した。（図①）。

注③ 図②と表①②を見ていただきたいが、地形的分類と、性格的分类をして、防禦的な施設として、溝や、土塁を築いているものがある。更に集落内から炭化米の出土や、鉄鏃、石鏃の出土によってその遺跡の性格が把握できる。図③～⑤はその遺跡の遺構図。

注④ 図⑥の様に、土塁の前面部分に石列を置いて、土塁の前面の傾斜角を急にする為に置いた。

注⑤ 図⑥の様に土塁中に柱を埋めて逆茂木の様にしていたと思われる。

注⑥ 図⑦の様に柱穴の間隔が、3Mとなっている事が多い為に、唐尺の一寸が30cmで10尺と考えられる為に、唐尺の使用が考えられ、大化の改新以降から使用された為に、此時に築城した説が有力である。

注⑦ 日本書記、続日本紀、類聚三代格、日本後紀、文徳実録、三代実録、等の時の政権が作成した書物。

注⑧ 朝鮮忠清道錦江の河口（付図①を参照）で、663年（天智天皇二年）に唐の水軍との戦いで、百済が新羅に攻められ、日本に救援を求

めて遠征し、戦ったが敗北し、百済は州柔(ツヌ)に立籠っていたが、日本の敗北後、州柔城も落ちて、百済は新羅の支配下に入り、日本の半島遠征は断念するに至った。

注⑨ 書紀には、百済の十六官位のうち、二位の官位をもつ人物が三人記されている。(答体春初)、憶礼福留、四比福夫)。

注⑩ ⑧、⑨の図面は約1/7700ぐらいの縮尺、⑩は三年山城城壁部分。

注⑪ ⑭ 1/25000 地形図

注⑫ ⑮ 1/25000 地形図

注⑬ ⑯ の様に発掘結果柱穴が出土。

注⑭ ⑰ 1/25000 地形図

注⑮ 「魏志」倭人伝の伊都国の事で、「古事記」の仲哀記では伊斗村、「日本書紀」の仲哀記では伊観県と書かれ、のちに筑前国の郡名となる。

注⑯ ⑱ 1/25000 地形図

注⑰ ⑲ 1/25000 地形図

注⑱ 律令官制の一つで、地方官制のうち最大。朝鮮経営の兵站基地の那津宮家で、天智天皇二年の白村江の戦い後、太宰府市に後退させて、前面に水城、後方に大野、基肄両城を築いた。九国、二島の民政を総括し、外交、国防の任を併せもつ重要官庁であるが、遣唐使の中止以降は未航の宋商船との交易の管理をしたが、平安末期にはその実権を寺社その他に奪われて、衰退した。

注⑲ 僧正玄昉、右衛士督吉備真備を除こうとして、藤原広嗣が天平十二年(七四〇年)に北九州で挙兵した。管下の軍勢約一万を率いて、朝廷は東北で活躍した大野東人を大將軍とし、五道から徴集の兵一万七千を授けて征討させて、広嗣は斬られたが、乱を機に藤原仲麻呂が拾頭し、やがて玄昉、真備もその地位を失う。

注⑳ ㉑ 1/25000 地形図

注㉑ 源為朝の事で、豊後にて、九国総追捕使となつて勢力をふるうが、朝廷の命に従わなかった為、父が解官され、これを契機に帰洛。保元の乱の時に父と共に崇徳上皇側について、戦ったが、兄義朝の軍に敗れ、伊豆大島に配されて、後に伊豆介狩野茂光に攻められて自殺した。

注㉒ 新羅の進攻により危機に陥つた任那を回復する為に継体天皇二十一年(五二七年)、大和朝廷の派遣した近江毛野を将とした任那

救援軍に対して、北九州に支配を確立していた国造築紫君磐井が新羅の勧誘に応じて北九州を抑え、海路を断つた。此為、朝廷は物部麁鹿火を派遣し、翌年、磐井は討伐軍に斬殺された。

注㉓ ㉔ 1/25000 地形図

注㉔ 和銅六年(七一三年)に官命により、諸国国庁が編纂した。

現在五風土記(出雲、播磨、常陸、豊後、肥前)があり、ほぼ完全に残っているのは出雲のみで、その完成も天平五年(七三三年)である。

注㉕ 佐賀県神埼郡神埼町西郷、肥前国には二十ヶ所烽が残っていると

されているが、此は国府から一番近く、眺望も良い。

注②⑥ 図②③ 1 地形図 25000

注②⑦ 図②④ 1 地形図 25000

注②⑧ 「延喜式」の神名帳に所載の官社の事。

注②⑨ 祭神は、大山祇神を主神、雷神、高籠神の二神を配祀している。

注③⑩ 山陽道

注③⑪ 図③④ 1 地形図 25000

注③⑫ 図③⑤ 1 地形図、図③⑥ 第一、第二水門付近の地形図、断面図。
図③⑦ 第一城門跡付近地形図、図③⑧ 城内の建物礎石。

注③⑬ 後記しているが、此が桃太郎伝説になったともされている。

注③⑭ 図③⑨ 1 地形図 25000

注③⑮ 図③⑩ 1 地形図 (①城門、②水門、③明神原、④礎石郡、⑤山頂礎石郡、⑥礎石郡、⑦礎石郡、⑧礎石郡、実線城郭線の残存部、

点線城郭線の推定)。

注③⑯ 図③⑪ 1 地形図 25000

注③⑰ 図③⑫ 1 地形図 25000

注③⑱ 「続日本紀」の文武天皇二年(六九八年)に、「大宰府」が修築した記事がある。

注③⑲ 図③⑬ 1 地形図 25000

注④⑰ 佐賀県三養基郡基山町宮浦字玉虫に所在し、五世紀中頃の築城とされている。幅6M、高さ1M、長さ約40Mが残存している。

此土塁は関屋土塁との関連もあると思うが、付近に、千塔山遺跡

があり、その関連もあると思われる。千塔山遺跡は、弥生時代後期から終末期の遺跡で、U字構、V字構で集落を廻らした遺跡である。

注④⑱ 佐賀県三養基郡宮浦字宿に所在し、五世紀中頃の築城とされ、幅

15M、高さ4.5M、長さ20Mほどが残存し、此地は肥前、筑後から大宰府に通じる要路で、基肄郡の駅も此付近と考えられている。

注④⑲ 図④① 1 地形図 25000

注④⑳ 信貴山朝護孫子寺で、毘沙門天を祀るが、元々は高安城の守護の四天王の関係であろうか。また、「信貴山縁起絵巻」に、飛倉伝説がある。

注④㉑ 図④② 1 地形図 25000

注④㉒ 豊元国著「奈良時代山城」

注④㉓ 高垣不敏著「備後国府考」

注④㉔ 「地理志料」

注④㉕ 注④⑲

注④㉖ 南九州に存住していた族名で、律令支配の侵透に伴い、しばしば反乱を起している。

注④㉗ 一般的に「えぞ」と云うが、「えみし」、「えびす」とも云う。

古くは東国原住民の人々を呼ぶが、後に、大和政権の行政版図外の人々を指す様になる。

注④㉘ 養老七年(七二三年)に公布された法で、新池溝を開いて作った田は三代間、旧池溝を利用して作った田は一代間、収公免除した。

注⑥ 父は太政大臣高市皇子で、宮内卿、式部卿、大納言を経て、右大臣、左大臣へと進んだが、天平元年に謀反の疑いをかけられ、聖

務天皇の命により、自殺。藤原氏による権力攻争上の謀略と考えられている。

注⑦ 天平十五年（七四三年）に公布、三世一身法の用益年限を廃し、永代私有の許可。

注⑧ 位置は不明であるが、古代筑紫の美野（ミノ、ミヌ）駅の付近とされる。此駅は、現在の福岡市に近く、那の津（大津）、美町、大宰府と、港から大宰府への府の大道に置かれた駅とされる。

しかし、最近では海外防衛の為の城ではなくて、大隈、隼人支配の為に大和政権が国府防衛の城という説も出てきている。

注⑨ 位置は不明、糸島郡志摩町可也の稻留という説があるが、前記の様に、大隈、隼人支配の城という説もある。

注⑩ 高安山にあり、此は中世の信貴山城の出城のあった所で、此の地形が、秋田県羽白目遺跡（古代秋田城と秋田郡衛とを結ぶ、中継烽遺跡）に酷似し、軍防令にいう火炬の相互間隔が二十五歩（45M）に近い。発掘調査されたが、遺構は確認されず、土師器、須恵器片が出土しただけであった。

注⑪ 滋賀県高島郡高島町にシシガキが有り、それが三尾城という説がある。

付 表

日本書紀による古代の対外、対内緊張期

注① 崇神天皇

10年 注② 四道將軍を諸国へ向ける。

注③ 武埴安彦の乱

60年 注④ 出雲振根を殺す。

注⑤ 垂仁天皇

5年 注⑥ 狹穗彦の乱。（稻城を築く）

注⑦ 景行天皇

12年 注⑧ 熊襲が反く。天皇征討に出発し、筑紫で土蜘蛛を討つ。後に、熊襲師を殺す。

注⑨ 熊襲反く。日本武尊、熊襲を討ち、帰路、吉備の穴海にて荒ぶる

27年 注⑩ 神を討ち、更に、難波柏波の荒ぶる神を討つ。

注⑪ 東の戒反く。日本武尊東征に出発。

40年 注⑫ 仲哀天皇

注⑬ 熊襲反く。吉備臣の祖、鴨別を遣し、討つが、羽白熊襲が反く為に討ち。

9年 注⑭ 山門村にて土蜘蛛田油津媛を討つ。

注⑮ 新羅遠征

注⑯ 神功天皇

元年 香坂王、忍熊王の反乱。^{注⑲}

5年 新羅の人質、微叱許智伐早が逃げ帰った為に、新羅を攻め、蹈鞬津、草羅城を攻める。^{注⑳}

^{注㉑} 応神天皇

3年 所処の海人、命に従わず、阿曇連の祖大浜宿禰を遣して、平定し、海人の統率者とする。^{注㉒}

14年 葛城襲津彦を遣して、加羅に留る弓月の人夫を連れ帰ろうとするが、新羅の防害の為に帰れず。^{注㉓}

16年 平群木菟宿禰、内戸田宿禰を加羅に遣し、弓月の人夫と襲津彦が、新羅の防害の為に帰れず。^{注㉔}

22年 天皇が吉備の葦原宮に行幸し、御友別が参じ、吉備国の川嶋縣を稲連別に封じ、上道縣を仲彦に封じ、三野縣を弟彦に、波區藝縣を弟鴨別、苑縣を兄浦凝別に封じた。^{注㉕}

仁徳天皇^{注㉖}

40年 牟別皇子の殺害。^{注㉗}

53年 上毛野君の祖、竹葉瀬田道を新羅に遣す。

履中天皇^{注㉘}

87年 住吉仲皇子が兵を發す。^{注㉙}

允恭天皇^{注㉚}

5年 葛城襲津彦の孫、玉国宿禰が尾張連吾襲を殺した為に殺される。^{注㉛}

42年 木梨輕皇子が暴挙をする為に人民臣民が従わず、穴穗皇子（安康天皇）に従う為に、兵を發するが、穴穗皇子も兵を發して木梨輕皇子を殺す。^{注㉜}

元年 安康天皇^{注㉝}

3年 天皇、大草香皇子の妹、媛を大泊瀬皇子の妻にしよとした時に、坂本臣の祖根使主を遣すが、根使主が虚言を云った為に怒って大草香皇子を殺す。^{注㉞}

3年 眉輪王の為に天皇殺される。^{注㉟}

雄略天皇^{注㊱}

元年 安康天皇が殺された時に、兄弟を疑い殺す。眉輪王と逃げこんだ圖大臣を殺す。^{注㊲}

市辺押磐皇子が皇位繼承の有力だった為に殺す。

7年 吉備下道臣前津屋が謀反を起す気を見せた為に、物部の兵を遣して前津屋一族を殺す。

8年 吉備上道臣田狭を任那国司にして、田狭の妻稚媛を妻にしよとした為に新羅に助けを求めて反旗をひるがえた為に、田狭の弟吉備海部直赤尾を遣して田狭を殺そうとしたが殺さずに帰国した。新羅が高麗から攻められるが、百済に救援を求め、任那より出兵し、高麗を破る。^{注㊳}

9年 凡河内直香賜と采女を難波日鷹吉士を遣して、殺そうとしたが、香賜が逃げた為に、弓削連豊穂を遣して三島郡の藍原にて殺す。^{注㊴}

13年 吉備上道采女大海、紀小弓宿禰等を新羅に遣して破る。播磨国御井隈の文石小麻呂が法に従わず、春日小野臣大樹を遣し

て殺す。

14年 根使主が逆いた事がわかり、殺そうとした為に、稻城を造り戦うが、殺される。

20年 高麗の王、兵を発して百済を亡ぼす。

21年 注⁶⁵ 久麻那利を済州王にした。

23年 百済の新王が死亡して昆支王の子、殊多王を国王にして、筑紫の兵五百人を遣して国を衛らせて東城王とする。

筑紫の安致臣、馬飼臣等航師を率いて高麗を討つ。

征新羅將軍、吉備臣尾代が国に寄り、後から来る蝦夷の兵を待つが、天皇の死去により、蝦夷が反き、郡を侵した為、沙婆水門にて戦い、丹波国の浦掛水門にて亡ぼす。

清寧天皇

注⁶⁶

星川王子が大蔵の官について、官物を自由にし、皇太子に反く為に、兵を発し、吉備稚媛、城丘前來目が星川王子に従って殺される。

吉備上道臣等、星川王子を救おうとして、船を遣したが、すでに死亡したと聞いて帰るが、天皇は上道臣を責めて、山部を奪う。

顯宗天皇

注⁶⁷

3年 紀生磐宿禰、任那に行き、三韓の王になろうとした。任那の左魯那奇他甲背等が計略を用いて百済の適莫爾解を殺し、帶山城を築き、東道を防ぎ守り、津を断つ。百済王が怒り、兵を発する。後に、紀生磐宿禰の兵力も弱まり、任那に帰る。

注⁶⁸ 継体天皇

8年 伴跋、城を子吞、帶沙を築き、烽等を置き、日本に備え、新羅を攻める。

9年 物部連、沙都嶋に至り、船師五百を率いて、帶沙江に至る。

伴跋、兵を發して物部連を討つ。

21年 近江毛野臣、兵六万を率いて任那に往き、新羅に取られた、南加

羅、喙己吞を復興し、任那と合わせようとしたが、新羅から貨略を送られた、磐井が、反き、火、豊二国に勢力を張って、高麗、

百済、新羅、任那等の貢物の船を止め、毛野臣の軍を止める。

22年 天皇、物部大連鹿火を遣して磐井も御井郡にて戦い殺す。

23年、近江毛野臣を遣して、南加羅、喙己吞を建国する。

24年、百済、新羅と毛野臣の城を攻める。

注⁶⁹ 安閑天皇

2年 天皇、大伴金村大連の子、磐と狭手彦を遣して任那を救ける。

注⁷⁰ 欽明天皇

6年 高麗大いに乱れる。

7年 高麗大いに乱れる。

8年 百済、高麗との戦いで馬津城を破る。

15年、百済、新羅を攻め、物部莫奇武連を遣して函山城を攻め、新羅に攻め入り、久陀無羅寒を築く。新羅、兵を率いて行く。明王が殺された為、筑紫国造が囲みを破って逃げる。

17年 阿部臣、佐伯連、播磨国直を遣し、筑紫国の船師を率いて国を衛

り、更に、筑紫火君、兵千人を率いて彌弓に送り、津の路の要害を守る。

22年 新羅、阿羅波斯山に城を築き、日本に備う。

23年 新羅、任那の官家を滅す。大將軍大伴連狭手彦を遣して、高麗を破る。

注⁶⁵
敏達天皇

10年 蝦夷数千人が辺境にて敵意を示す。

12年 百濟人、「船三百船の大船が筑紫に行きたいと云う」。此為、対馬、壹岐に伏兵を置き、要害に城を築く。

注⁶⁶
崇峻天皇

物部大連が兵を發し、餘皇子等を捨て、穴穗部皇子を天皇にする。

蘇我馬子、宿禰等、炊屋姫尊を奉じて、佐伯連丹経手、土師連磐

村、的臣真嚙に詔して、「穴穗部皇子、宅部皇子を殺せ」と命じた。

蘇我馬子宿禰大臣、諸皇子と群臣に物部守屋大連を滅す事を謀り、泊瀬部皇子、竹田皇子、厩戸皇子、難波皇子、春日皇子、

蘇我馬子宿禰大臣、紀男麻呂宿禰、巨勢臣比良夫、膳臣賀陀夫、

葛城臣烏那羅が共に大連を討つ為に進軍、更に、大伴連嚙、阿倍

臣人、平群臣神手、坂本臣糠手、春日臣が、物部守屋の家に至る。

注⁶⁷
物部守屋、子弟や奴軍を率いて稻城を築いて戦う。

注⁶⁸
推古天皇

8年 任那と新羅が相攻む。任那の為に新羅を討つ。新羅は降服するが、又、新羅が任那を侵す。

9年 任那、救援の事を計る。

10年、来目皇子、征新羅將軍として出発。

11月 新羅途上の筑紫にて来目皇子死去。

31年 新羅、任那を討つ。数万の兵を率いて、新羅を討つ。

注⁶⁹
舒明天皇

9年 蝦夷反く。大仁上毛野君形名を遣すが、敗れ、城に逃げ帰る。

皇極天皇

3年 蘇我大臣蝦夷、子入鹿臣、家を甘檮丘に建て、家の外に城柵を作り、門の傍に兵庫を作る。

4年 中大兄、大極殿にて入鹿を斬る。(大化改新)。中大兄、法興寺に入り、城として備える。

注⁷⁰
孝徳天皇

大化 磐舟柵を築り、蝦夷に備え、柵戸を置く。

注⁷¹
齐明天皇

4年 阿部臣、船師一八〇艘を率いて、蝦夷を討つ。

注⁷²
天智天皇

2年 新羅、百濟の南の辺の四州を取る。上毛野君を大將軍として派遣

する。大唐の軍將、戦船一七〇艘を率いて白村江に陣取り、そこで戦うが敗れる。百濟の將軍日本に向う。

3年 対馬、壹岐、筑紫等国に、防と烽を置き、筑紫に大堤を築いて水を貯え、水城と名付ける。

4年 達率答林春初を遣して、城を長門国に築く。達率憶礼福留、達率

注⑧ 四比福夫を筑紫国に遣して、大野、基肆二城を築く。

6年 倭国の高安城、讃岐国の山田郡の屋島城、対馬国の金田城を築く。
8年 天皇、高安城に登りて城を修めというが止める。

高安城を修めて畿内の田税を収む。

9年 高安城を修めて、穀と塩を積む。又、長門城一つ、筑紫城二つを

築く。

注⑦ 天武天皇

元年 壬申の乱発生。

付表補注

注① はつくにしろす天皇と呼ばれ、此天皇が事実上の初代とする説が有力。(畿内から畿外への兵士(四道將軍)の派遣、出雲振根の殺害(出雲氏の服従)等で、近畿圏の政治勢力が拮がった。

注② 大彥命(開化天皇の兄)を北陸へ、武渟川別命(阿部臣等の祖先)を東海へ、吉備津彥命を山陽道へ、丹波道主命(開化天皇の皇子)を丹波へ派遣した。

注③ 孝元天皇の皇子

注④ 出雲国造の祖先

注⑤ 埴輪を作りだす。

注⑥ 開化天皇の皇子で、妹が皇后で、皇后に天皇を殺せと命じたが、皇后と狭穂彥が天皇の兵によって死ぬ。

注⑦ 日本武尊を熊襲や蝦夷に遣す等、全国的に支配が確立した所伝が多いが、伝説的な考えとされる。

注⑧ 九州南部の隼人と同族で別称。

注⑨ 筑紫国のみでなくて、筑紫島と書いて九州そのものを指す事が多い。又、豊前国長狭県に行宮を立てると記されており、御所ヶ谷神籠石がその行宮所という伝説がある。

注⑩ 大和朝廷に従わない地方の首長をさげすんで呼称した名称で、肥前、豊後国風土記に、石壘や土壘を築いて生活している話が伝わる。

注⑩ 熊襲の首長

注⑪ 小碓尊の事で、古事記、日本書紀によって、その内容に相違があるが、記が旧辞に基づく伝承に対して、紀が旧辞を基に王権の辺境征服という新しい思想や説話を付加し、多人数によってなされた歴史的事実を一人の英雄によってなされた様に作成された。

注⑫ 岡山県（備前、備中、美作）と広島県東部（備後）の四国を吉備といひ、福山市芦田川河口付近を穴という（他に諸説あり）。

注⑬ 大阪市の淀川河口付近

注⑭ 大和朝廷に従わない東部日本人々を指しているが、民俗学、人類学的にはアイヌ人と考える。

注⑮ 神功皇后と共に熊襲征討の為に筑紫に行くが、新羅を討てという神託に従わなかった為に急死する。

注⑯ 古代吉備の地方豪族で、後に吉備上道臣、吉備下道臣、吉備笠臣等に分かれた。

注⑰ 吉備武彦命の二男を御友別命、三男を鴨別命とされている。

注⑱ 福岡県山門郡山川村

注⑲ 三韓征伐の中心人物で、此以降、朝鮮関係の記事が多くなる。

注⑳ 仲哀天皇が死去し、神功皇后が応神天皇を生み、郡臣が応神天皇に従うと思ひ、反乱を起すが、香坂王は反乱の前に死去する。

注㉑ 伐早は新羅十七等官位の第一位にあたる。

注㉒ 韓国、釜山の南、多大浦

注㉓ 韓国梁山で新羅からは任那への進出拠点で、日本からは新羅への

軍事拠点と重視している。

注㉔ 帰化人が増える等、輸入や高句麗好太王碑の語る朝鮮半島への進出と大和國家の発展が考えられる。

注㉕ 漁業と航海に従事した海辺の漁民で、入れ墨をする風習があった事から異民族ともされるが、すべてが異民族とは考えられない。

注㉖ 全国各地の海人（海部）を中央で管理する伴造
注㉗ 四世紀前後の実在の將軍とされるが、最初の対鮮外交の將軍として一部の事実がさらに伝説化されている。

注㉘ 大和の豪族

注㉙ 岡山県岡山市の足守とされている。

注㉚ 岡山県浅口郡

注㉛ 吉備真備の祖先

注㉜ 岡山市東半、上道郡、西大寺市

注㉝ 吉備上道臣田狭や星川王子の祖先

注㉞ 岡山市北半、御津郡御津町

注㉟ 岡山県笠岡市とされる。

注㊱ 吉備郡真備町北部か。

注㊲ 朝鮮派遣、中国への遣使を積極的に行い、灌漑水利等にも力を入れる。

注㊳ 仁徳天皇の異母兄弟

注㊴ 履中天皇の同母弟

注㊵ 443年、451年に中国に遣使した倭王済にあてるとの説がある。

注④② 尾張国の豪族で、後に壬申の乱の時に活躍する等、古くから皇室との関係が深い。

注④③ 倭王興にあてる説がある。

注④④ 仁徳天皇の皇子

注④⑤ 雄略天皇

注④⑥ 和泉（大阪府の一部）の豪族

注④⑦ 大草香皇子とその妻の中帯姫の間に生まれた子供

注④⑧ あやはとり、くればとりの迎入れや、三蔵（斎蔵、内蔵、大蔵）の分立を行なう等、強力な専制君主とされる。

注④⑨ 八釣白彦皇子（雄略天皇の同母兄）。坂合黒彦皇子（雄略天皇の同母兄）。

注⑤① 葛城氏、雄略天皇と皇位継承について対立関係にある市辺押磐皇子が葛城氏の出である為に、眉輪王が葛城氏を頼り、雄略天皇がそれを口実に葛漆氏を滅し、市辺押磐皇子を孤立させた。

注⑤② 摂津、河内地方に勢力があった豪族

注⑤③ 大阪府茨木市付近

注⑤④ 百済の都の熊津とされる。

注⑤⑤ 福山市松永町、尾道水道の東とされている。

注⑤⑥ 京都府久美浜町ともされる。

注⑤⑦ 吉備上道臣田狭の元妻である稚媛の子供

注⑤⑧ 紀生磐宿禰が反乱を起こしたという様になっているが、百済の帯山城占領の口実として百済側からの虚言とも考えられ、紀生磐宿

禰は任那防衛を積極的に計画、実行し、百済の南進を食い止め様としたとも考えられる。

注⑤⑨ 大伴金村、物部麁鹿火らに越前より迎入れ即位（皇室以外の人物と考えられる）。

注⑥① 任那北部の有力な勢力

注⑥② 名代（天皇の名を記念して置かれた部として天皇の身边に近侍する部として設定）や、倉（貢納された稲を収納する朝廷管理の倉とされるが、倉に付属した土地所有を伴う、朝廷管理の農業経営地を意味する）が著しく増加する。

注⑥③ 安閑、宣化天皇と並立していたとも考えられ、崇仏の対立で物部、蘇我氏の対立、任那、百済をめぐる動きが活発になり、欽明天皇23年に任那宮家は滅亡した。

注⑥④ 欽明天皇の遺言である任那の再建を果たせず、崇仏対立で部族対立がさらに激化した。

注⑥⑤ 蘇我馬子と共に穴穂部皇子（欽明天皇の皇子）と物部一族を倒すが、崇俊天皇5年には蘇我馬子にそそのかされた東漢直駒に殺された。

注⑥⑥ 対隋外交の復活、国史、法隆寺の建設等、国家勢力の侵透、天皇号が最初にあらわれる。

注⑥⑦ 蘇我蝦夷、入鹿の勢力拡大

注⑥⑧ 板蓋宮に実在したかは不明。確実に存在したのは天武天皇の飛鳥浄御原宮から。

注⑥7 柵に配置した屯田兵

熊本 (平凡社版)

注⑥8 防人、遣唐使、近江令の成立、戸籍の作成

日本書紀 (岩波書店版)

注⑥9 百濟官位16官の内、第二位

続日本紀 ()

注⑦0 壬申の乱の発生。旧大氏族が沿落し、皇室の権威が強化された。

〃 (国史大系版)

播磨風土記注釈

古代研究 16卷19卷

総社市史 考古資料編

鬼ノ城

大廻小廻山城調査報告

広島県史 原史古代編 考古資料編

新編香川叢書 考古編

倭国大乱と高地性集落

高地性集落論

日本古代史辞典 朝倉書店版

国土地理院発行 1 地形図 25000

参考文献

式内社調査報告書 22卷24卷

日本城郭史研究叢書 10卷13卷

福岡県史跡名勝天然記念物 6卷

対馬

鹿毛馬

帯限山神籠石天童山東部報告

帯限山神籠石

おつば山神籠石

屋島城

新版考古学講座

古代を考える、「不破の関」

行橋市の文化財 第一集

大野城 IV、V

風土記 (東洋文庫)

全国歴史地名大系 (奈良、山口、佐賀、岡山、広島、香川、愛媛、

表 1 弥生時代集落の地形的分類

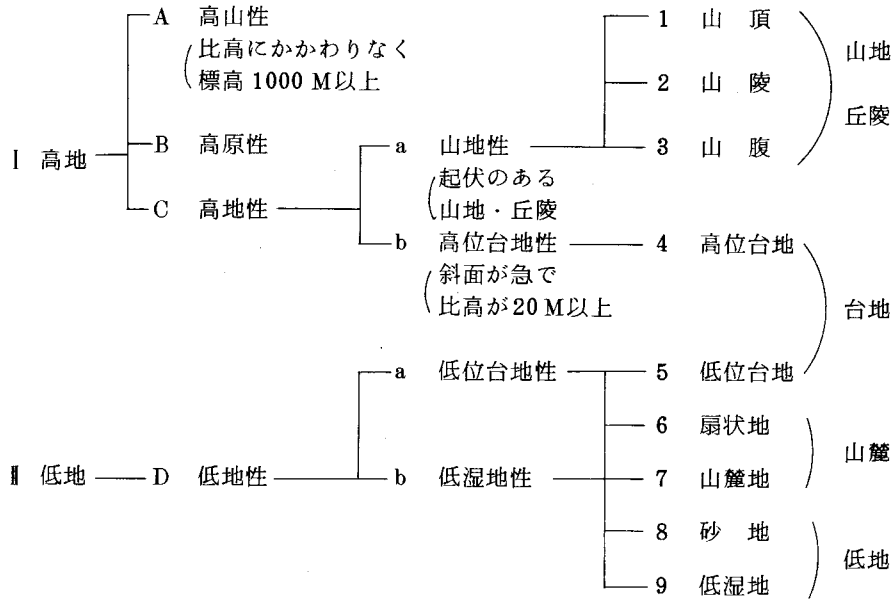
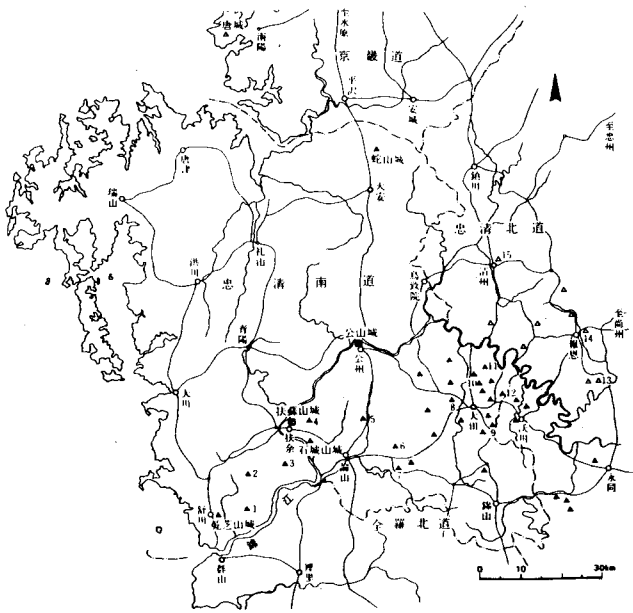


表 2 弥生時代集落の性格分類

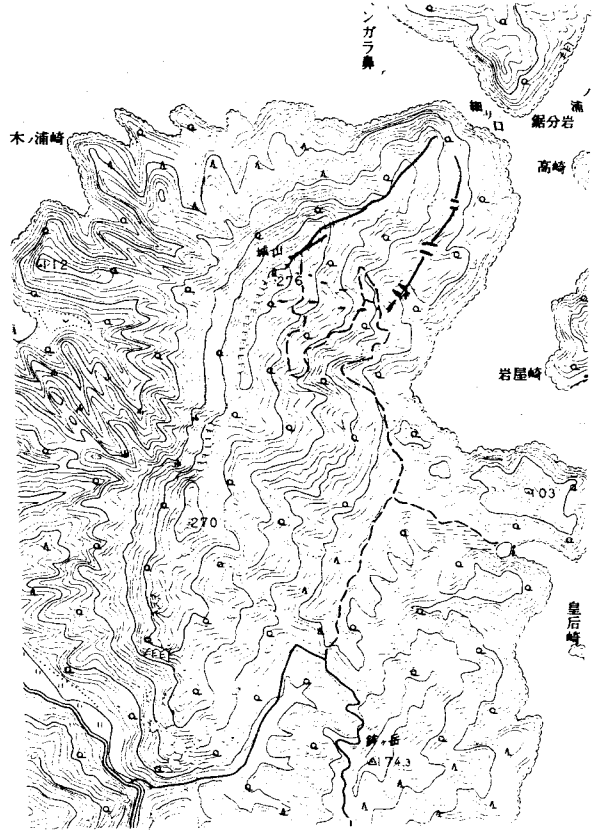
- A 農耕常時集落
- B 漁業常時集落
- C 狩猟集落
- D 焼き畑一時居住集落
- E 農耕主防塞集落
- F 農耕副次防塞集落
- G 祭祀集落
- H 防砦集落
- I 見張台集落



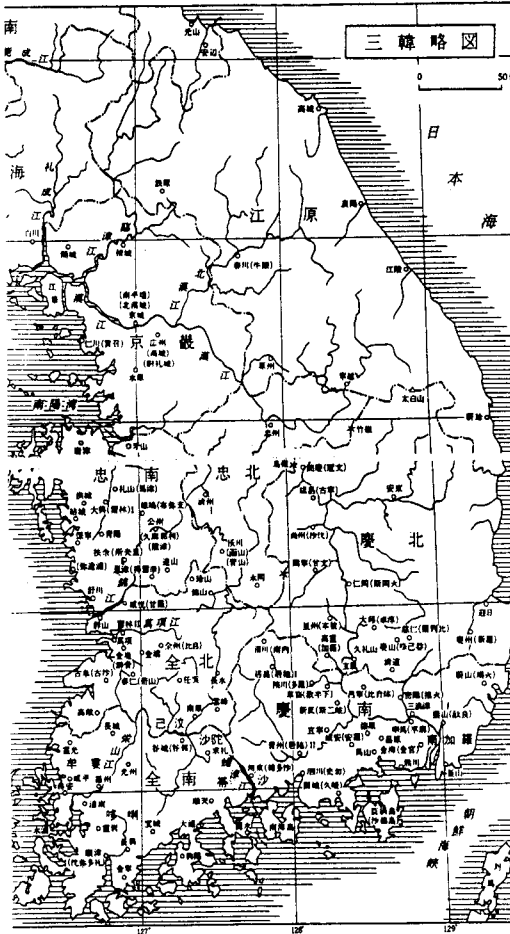
- | | | |
|-------------|-------------|---------------|
| 1 舞山城 | 6 城芝山城(黄山城) | 11 鞠足山城 |
| 2 鹿嶋山城 | 7 山道理山城 | 12 理山城 |
| 3 聖興山城(加勢城) | 8 備城山城 | 13 山桂里山城(昭山城) |
| 4 青馬山城 | 9 城崎山城 | 14 三年山城 |
| 5 豊城山城 | 10 茨城 | 15 山城望山城 |

白河と新藤の山城位置図(▲:白河 △:新藤)

付図②



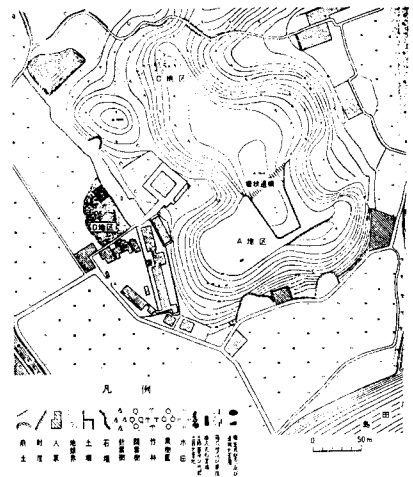
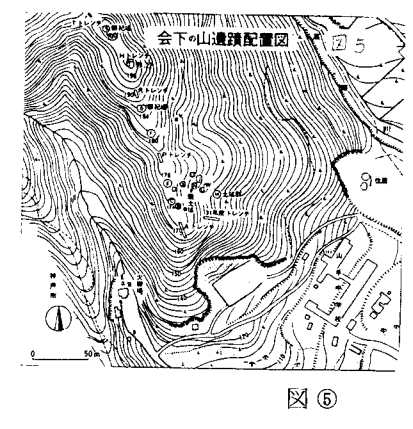
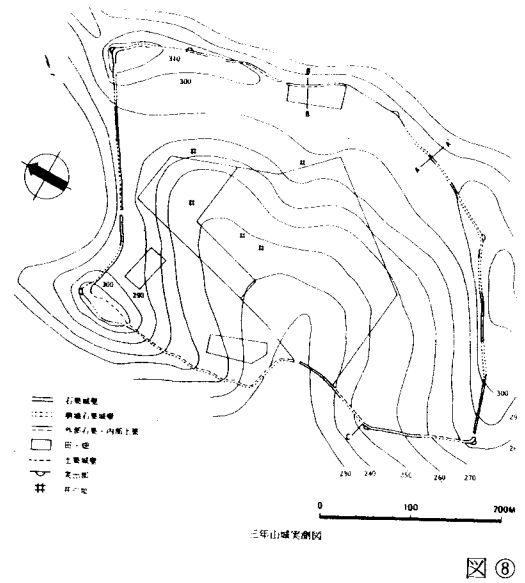
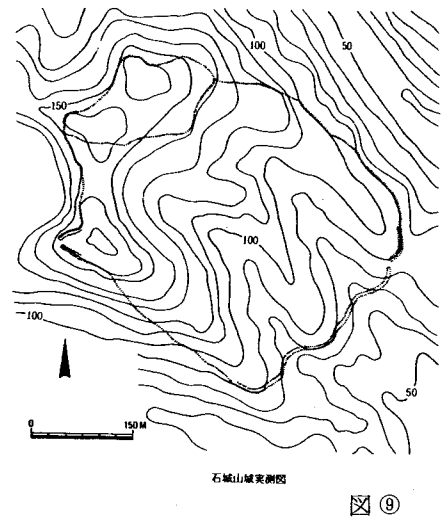
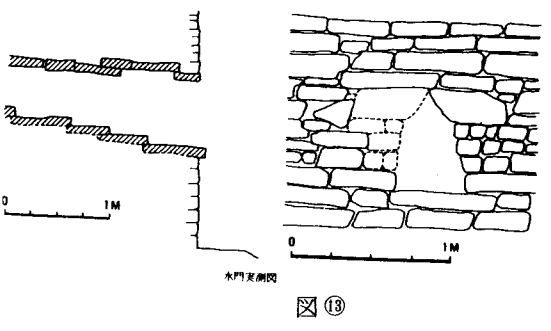
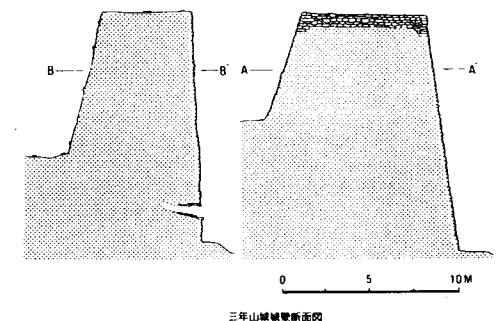
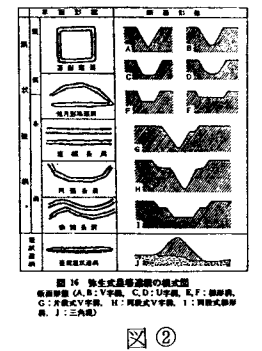
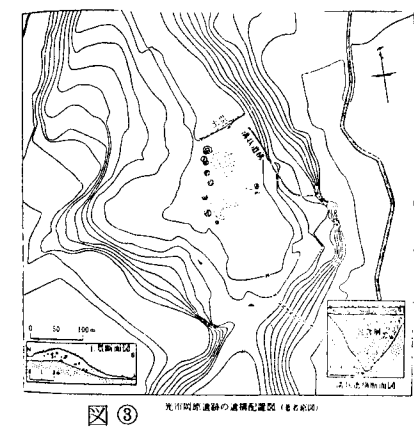
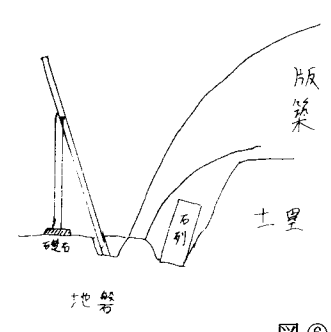
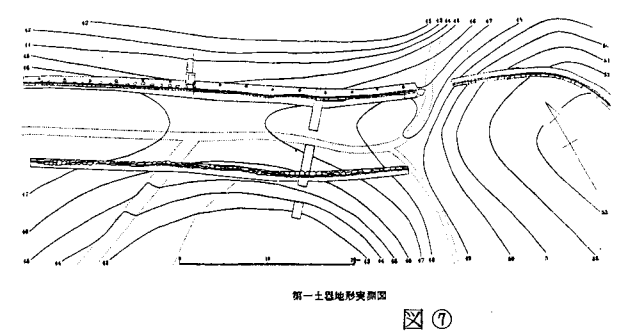
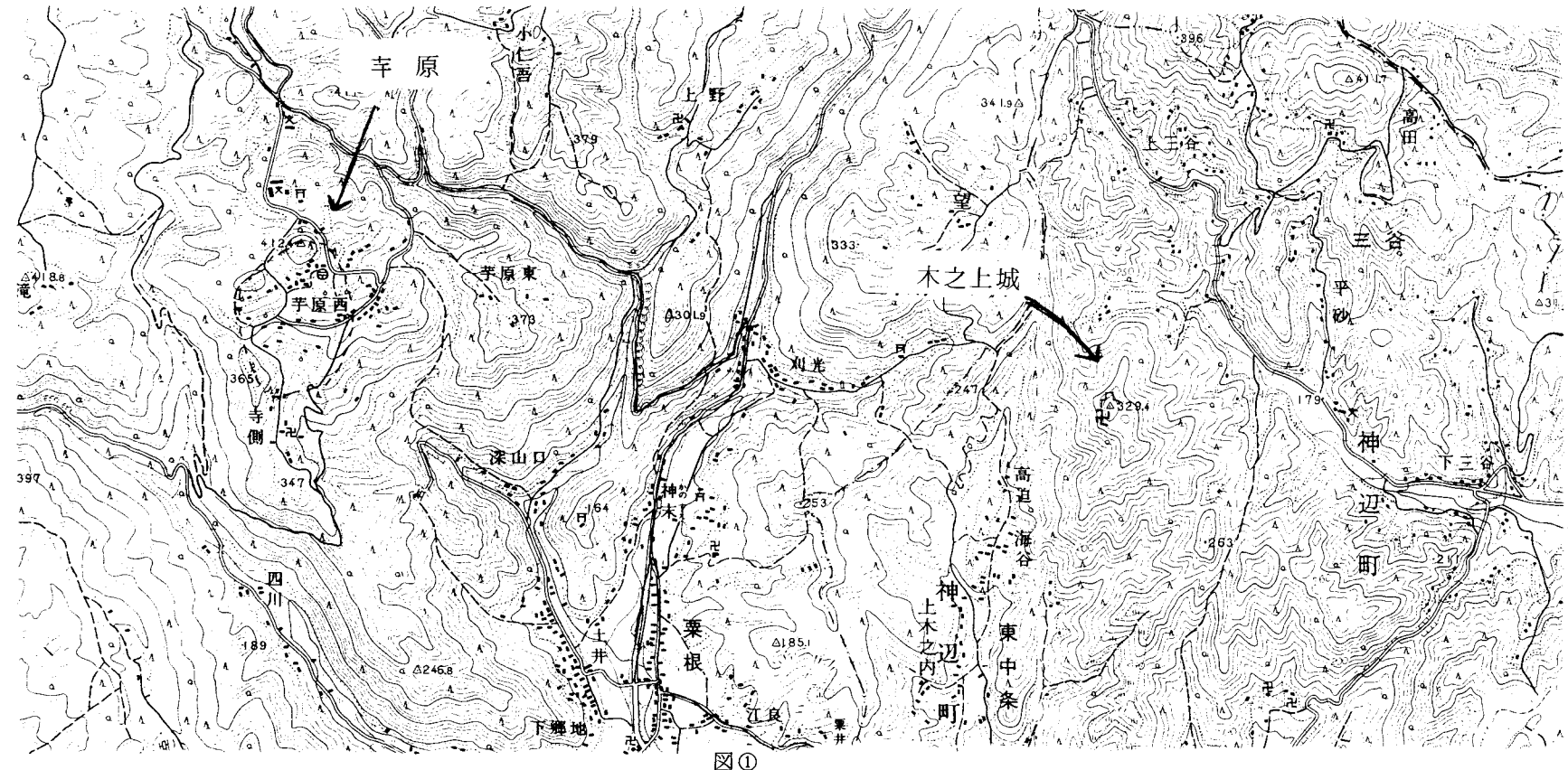
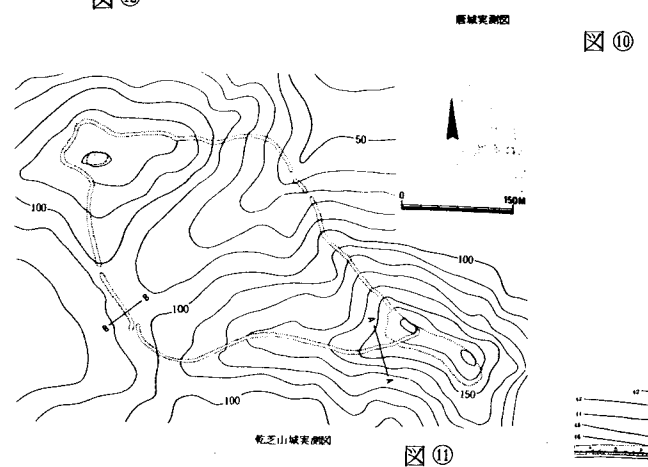
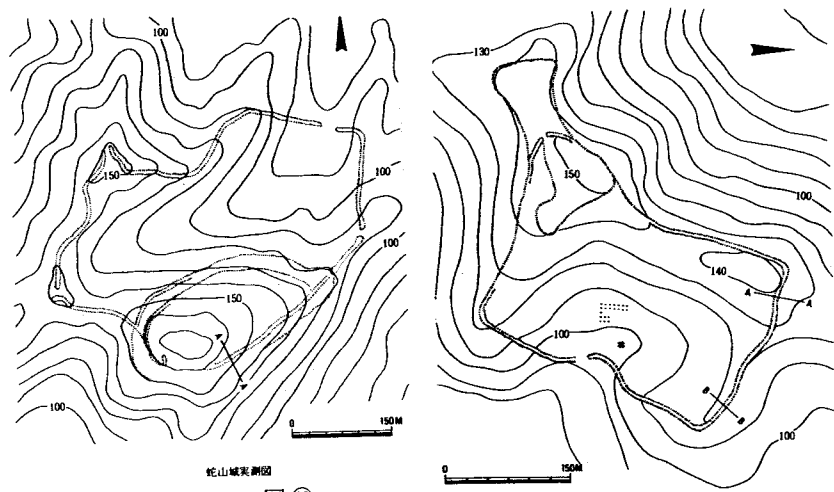
図⑧



付図①



図⑨



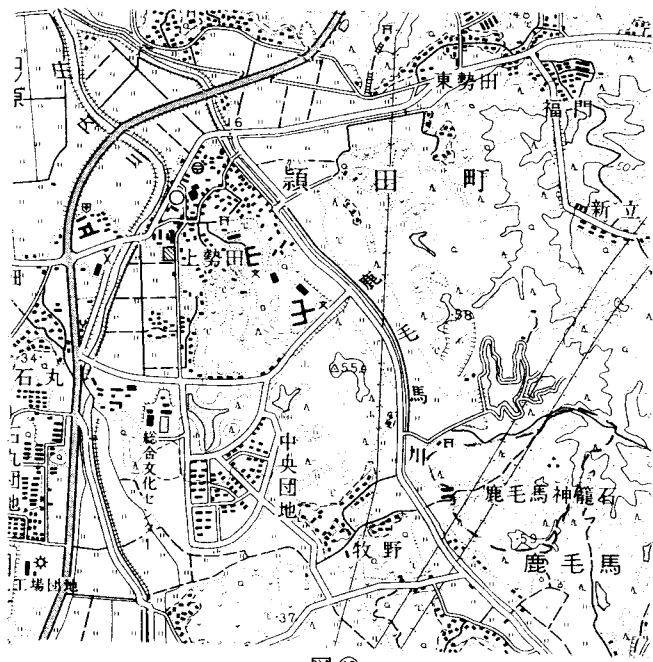


図19

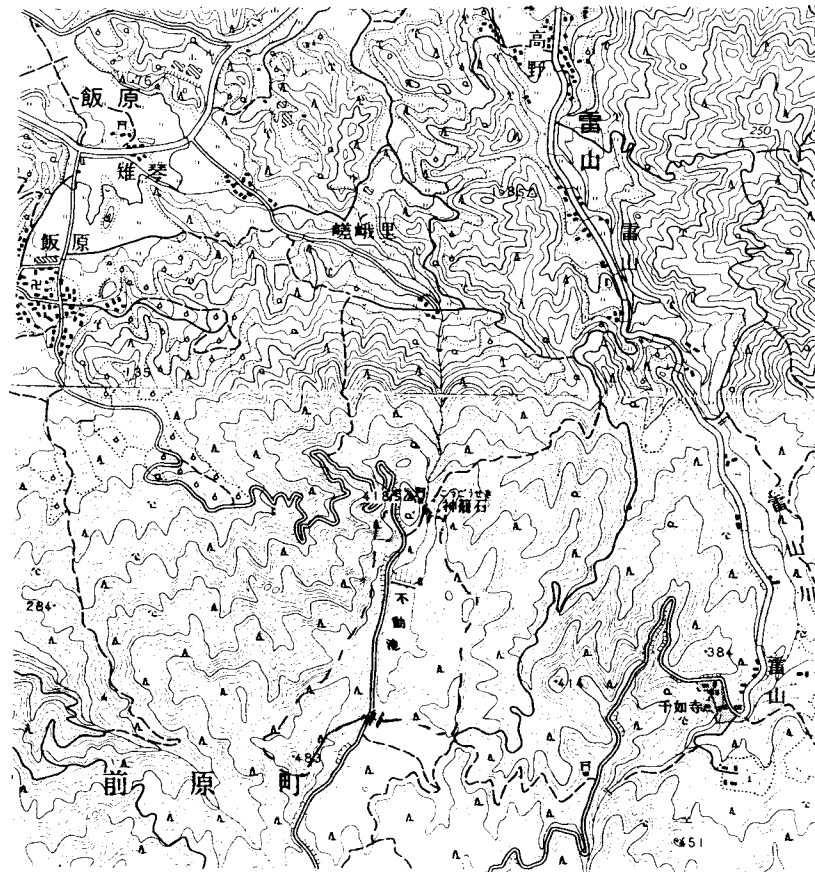


図17

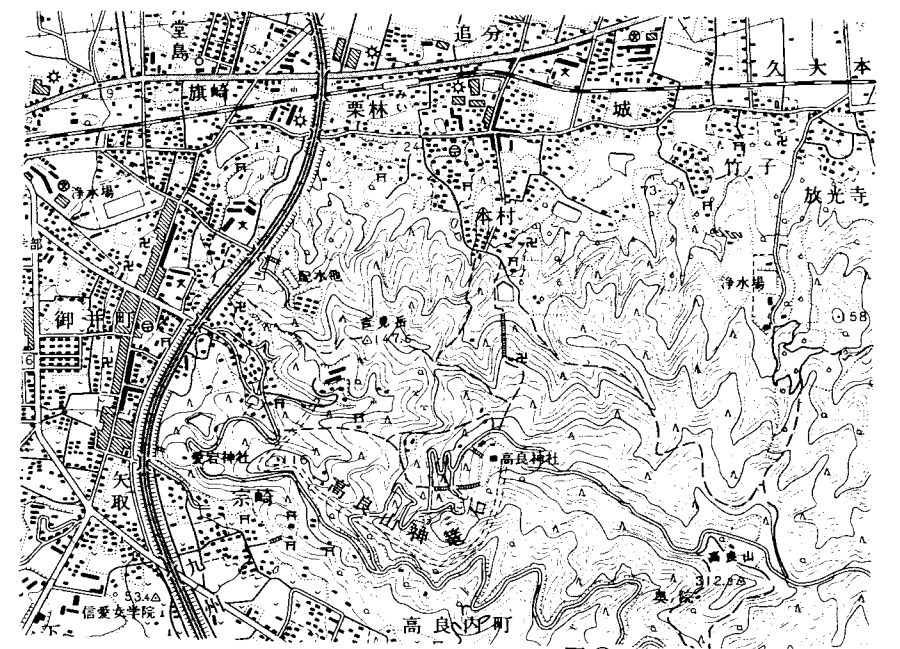


図14

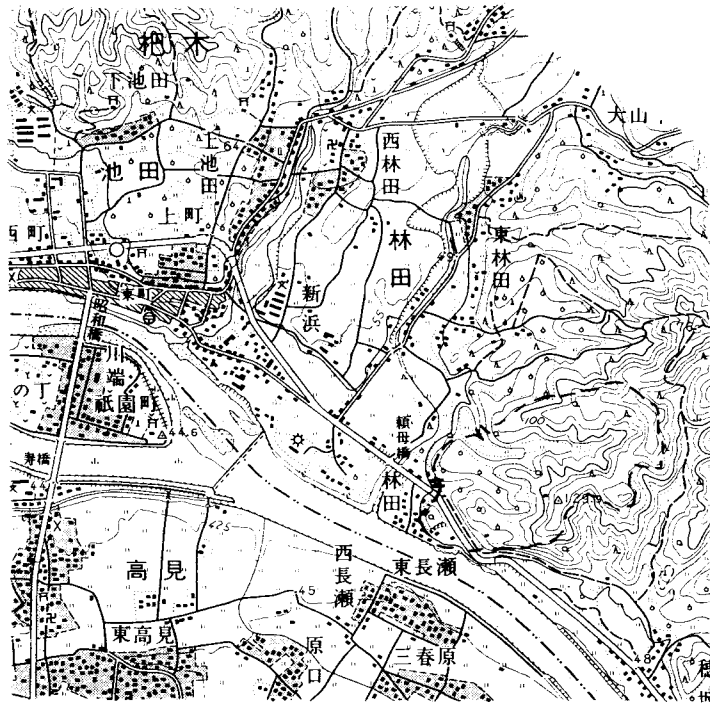


図18

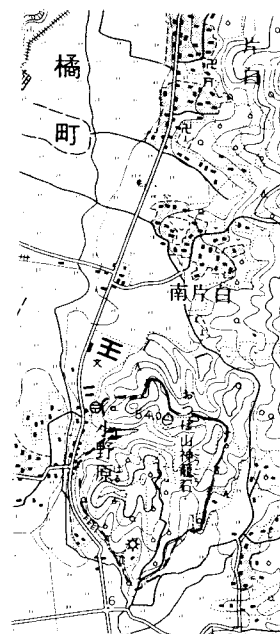


図20

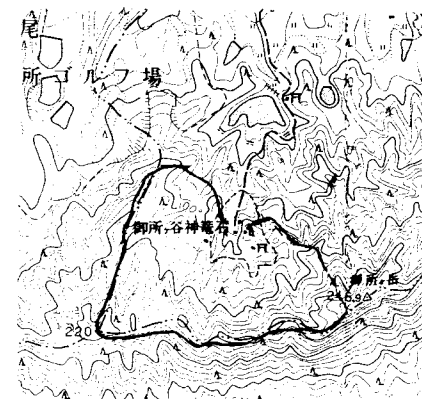
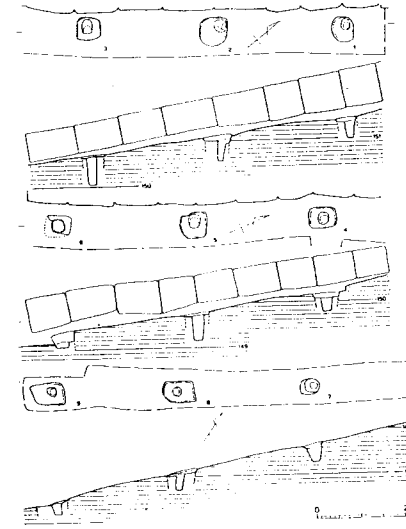


図22



女山神籠石1983年調査棟出柱穴内面図

図16

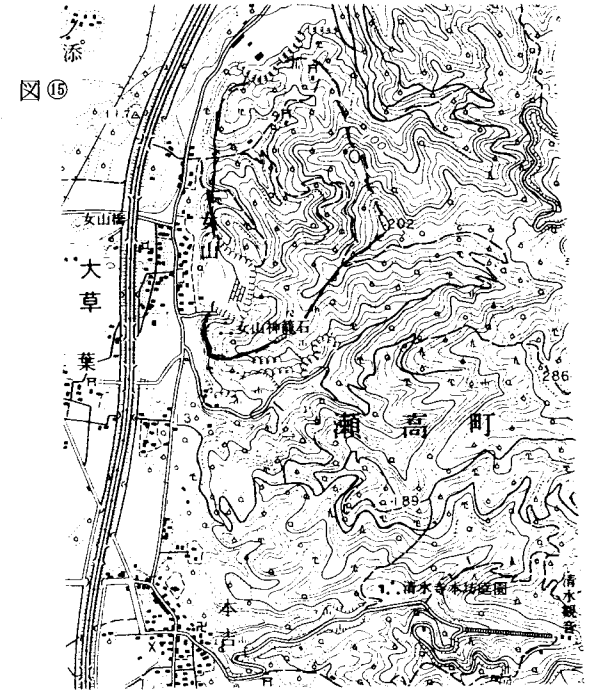


図15

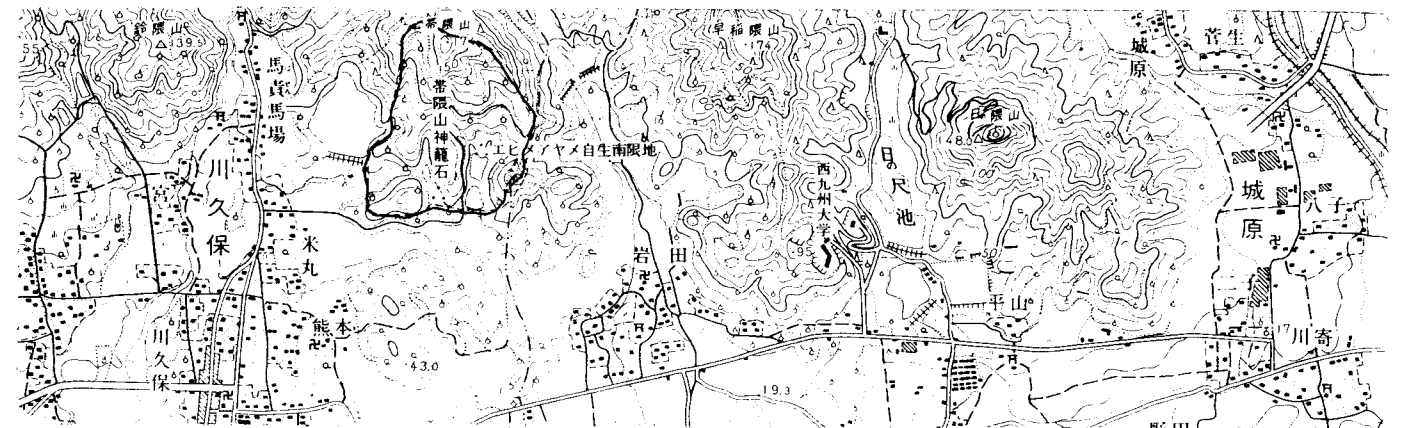
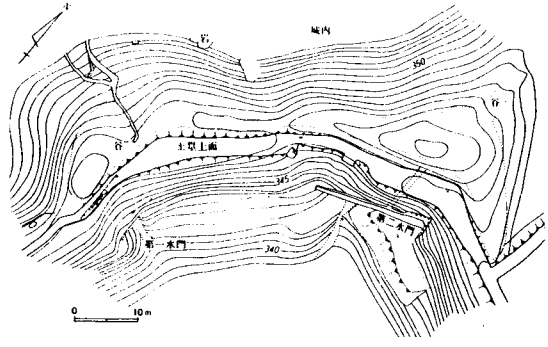
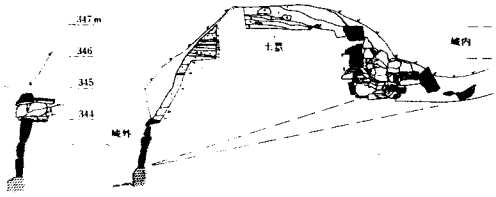


図21

図 25



地方折の城郭概観 (S=1:600)



城郭の平断面図 (S=1:120)

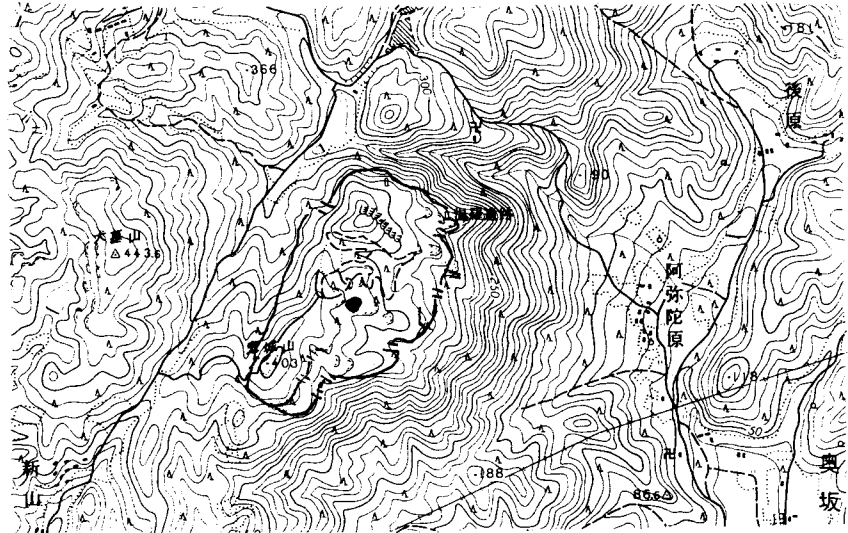
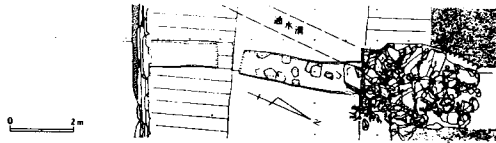


図 26

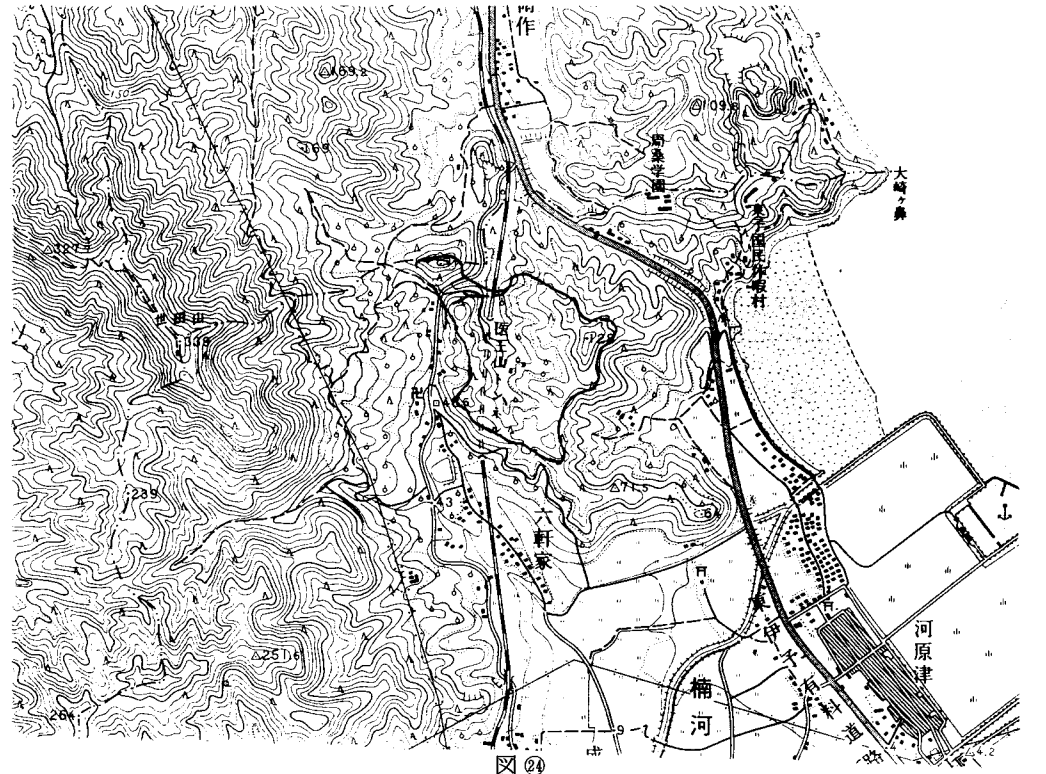


図 27

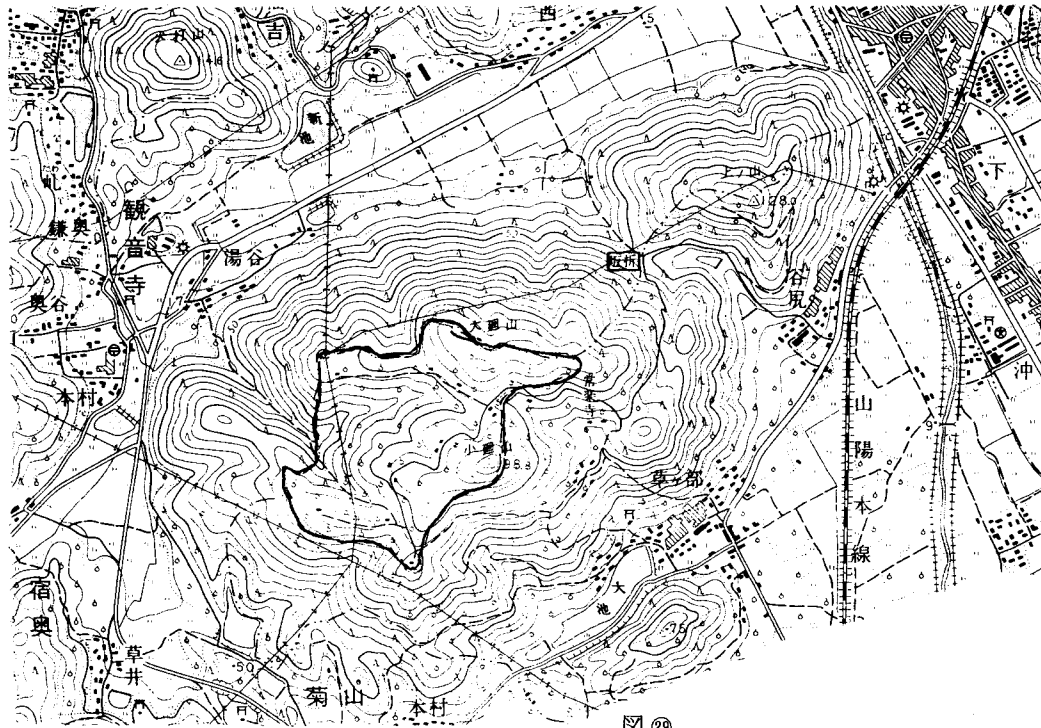


図 28

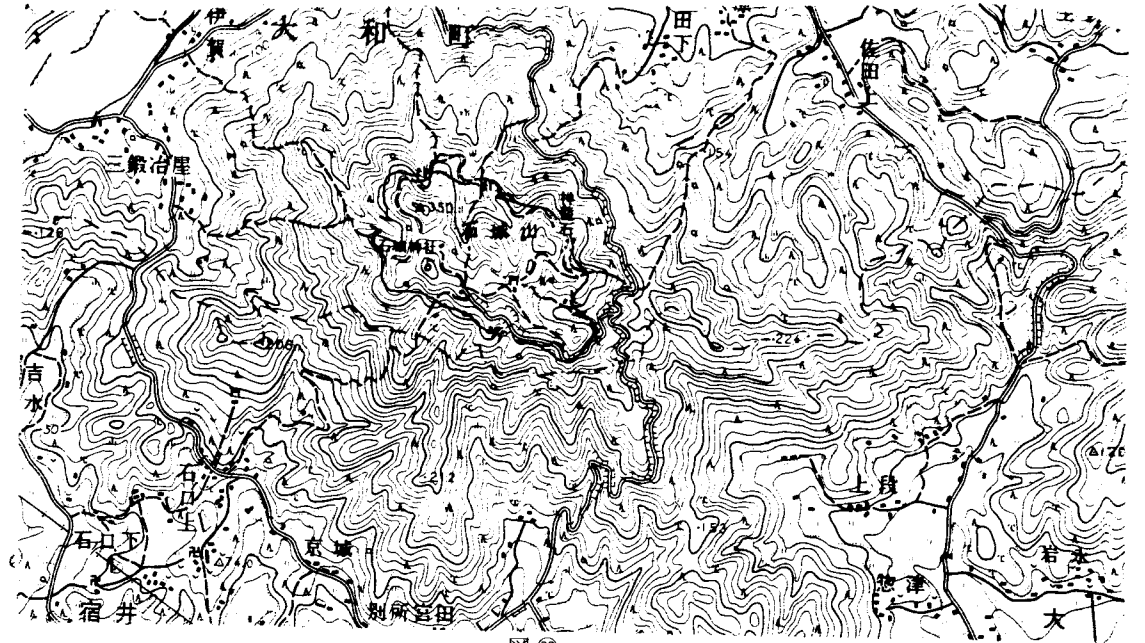


図 29

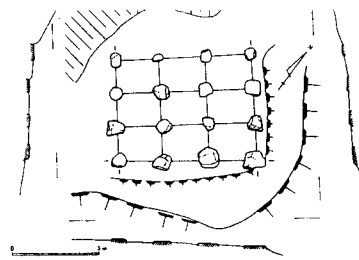


図 30

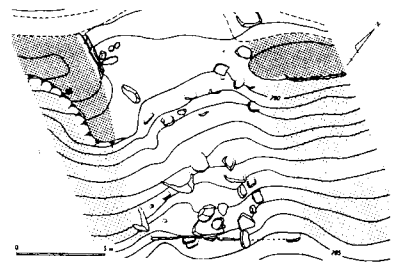


図 31

編 集 後 記

大変おそくなり申訳ありません。

いかがでしたか！ この度の山城志は例年になく充実したものになりました。特に柿原高身氏の論考は懸賞論文の受賞作、読んで行くうちに古代史の謎に自分もひきずられて行く感じがします。又、初顔の枝広信氏の論文も見事な出来ばえ、こんなところにこんな謎がという郷土史の面白さが興味を引きま

す。
結びは何と言っても七森義人氏の力作です。数年の沈黙を破って“遂に出たか”という野心作、彼のライフワーク“古代山城”の謎解きは今後どんな展開を見せるのか、期待したいものです。

平成4年(1992)5月5日

(帝釈庵主謹誌)

備陽史探訪の会機関誌

—山城志 第11集—

1992年5月5日

編集 備陽史探訪の会
) 広島県福山市多治米町5-19-8
発行 TEL(0849)53-6157

印刷 塩出印刷株式会社
広島県福山市引野町1-26-7
TEL(0849)41-0970(代)
